るに及ばぬといふのである。然らば前に天女に對して何故に女身を轉せざるかと問うたことの非を自覺したであらう。○女身を現すと雖も而も女に非ず　外形に於ては女身であつて男子と異るやうに見えるが、大乘を學んで佛と成る上に於て男女の別を立つるには及ばぬ。○男に非ず女に非ずと說きたまふ　佛の眼より見らるゝ時は男女固より平等である。唯だ現在に於て男女形體上の別あり、また生活上の別あつて其の性質氣風等に種々の差が存することは事實である。故に佛は種々の方便を設け、或は男女に通ずる教へを說かれ、或は男女別々に適切なる教へをも說かるゝのである。○在も無く不在も無し　男女形體上の別は永遠のものでない。故に在りといふも在らずといふも、共に眞の答へではない。○一切の諸法も　天地萬有は限りなき差別を示して居るけれども、其の根源は唯一絕對の理であつて、それが種々の因緣によつて果てもなく發展し變化して行くのである。之を在りと見るも一方に偏したる見方である、在らずと見るも亦一方に偏せるを免れぬ。

此の天女の言に『我十二年より來、女人の相を求むるに、了に不可得なり』とあるは、まことに痛快である。維摩詰の室に於ては常に大乘の教へのみが說かれたといふが、其の說く所は盡く聽く者の心に徹し『斯の上人の正法を講ずるを聞きて、皆佛の功德の香を樂ひ發心して出づ』と前段にいつてある。此の如くに貴き說法を聽聞すること十二年に及んだのであるから、何人も共に菩薩の道を行じて佛と成るべきものであるといふことが充分に理解せられて居た筈である。さすれば菩薩道を行ずる上に於て男女の別のあるべきわけも無く、又佛は男女共に佛と成ることを許さるゝのであるといふ自信も充分に得られたであらう。斯くまで貴い女人の身が現世に於ける生活に於て、男子よりも卑しまれて居たところが格別に重大なる問題ではない。男女の間に尊卑の別の存することは究竟的のものではないのであるから、『了に不可得なり』といふの外はないのである。彼の勝鬘夫人はまだ妙齡の婦人であつたが、深く佛法に歸依して、大乘の眞の精神を知り、佛恩の洪大無邊なることを知つて感激に堪へず、

哀愍して我を覆護し、法種をして增長せしめ、此の世及び後世、願はくは佛常に攝受したまへ。

といつた。釋尊は之を嘉せられて、

我久しく汝を安立す。前世に既に開覺せり、今復た汝を攝受す。未來の世も亦然なり。

と仰せられて、其の必ずや久しく菩薩道を行じて、一切衆生の爲に力を盡すべきことを洞見せられ、

此の善根を以て當に無量阿僧祇劫に於て、天人の中に於て自在王となるべし。

とて、其の後に至つて必ず佛と成るべきことを許された。勝鬘は大に喜び、今より佛と成るまでの間に於て特に自ら力を用ゆべき十ケ條の善事を擧げて、其の實行を誓つた。卽ち所謂『十大受』である。（此の事は序說中に委しく述べたから今は省略する。）之を聞いた大衆は大に感歎し、皆共に發願して

恒に勝鬘と常に共に俱に會して、其の所行を同じうせん。

といつた。之に續いて勝鬘は所謂三大願を說いた。

此の三大願はまことに能く菩薩道の眞精神を發揮したものである。されば釋尊も之を稱揚したまひて、菩薩道の精神は之に盡きたりとせられ、

三の大誓願は一切の色の悉く空界に入るが如く、是の如き菩薩恒沙の諸願は皆悉く此の三大願の中に入る。此の三願は眞實にして廣大なり。

と仰せられた。前の序說にも略ぼ此の三大願のことを述べたが、今此處に其の全文を出して、之に聊か解釋を加へて見やう。

此の實願を以て無邊の衆生を安慰せん。此の善根を以て一切生に於て正法智を得ん。是を第一の大願と名く。

我正法智を得已りて、無厭心を以て衆生の爲に說かん。是を第二の大願と名く。

我攝受正法に於て身命財を捨て、正法を護持せん。是を第三の大願と名く。

此の第一の願は自ら佛智を具へ、絕對の理を覺る身とならんとの願である。第二の願は自ら覺り得たる所を一切衆生の爲に說き、彼等をして共に佛道に入らしめんとの願である。第三の願は此の佛の正法の世に弘まるためには、有らゆる努力を惜まずして之を援助し、佛法を普く世間に流布せしめんとの願である。第一の願の始めに『此の實願』とあるのは前に說いた十大受の中に『一切衆生の惱めるを救はう』といふ意を種々の方面から述べてあるのを承けたので、卽ち大慈悲の念の發露したものに外ならぬ。此の大慈悲の念によつて無量無邊の衆生を安慰することが出來るのである。斯く衆生のために力を盡すによつて初めて自己心中の一切の煩惱を掃ひ盡すことが出來るのである。誰でも深く反省して見れば、吾が心中に種々の煩惱の蟠つて居ることに思ひ當るのであるが、さて如何に考へて見ても獨りで考へて居るだけで、此の煩惱を掃ひ盡すことの出來るものではない。世のため人の爲に力を盡すこと漸く久しきに及んで、次第次第に煩惱が影を消して行くのである。それは宛も濡れた物を火の側へ置けば自然と乾い

てしまふやうなものである。それで勝鬘も一切衆生を安慰することに力を盡すうちに、いつかは全く煩惱の無き身となつて正法智を得るであらうといつたのである。正法智とは卽ち佛智である。

第二の願は自分が佛智を具ふる身となつて、他の人をも同じ境界に入らしむるやうに力を盡さうといふのである。前にも度々いつた通り、釋尊は自ら佛と成りたまへる後、『一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめん』といふ理想を以て、世に出て法を說かれたのである。勝鬘も佛の御心の如く、自ら佛智を得たる上は他の人々をも敎へ導いて共に佛智を具ふる身とならせやうといふ大願を立てたのである。之が爲には『無厭心』をもつてすることが最も肝要である。無厭とは無厭足心といふと同じ意で、如何に力を盡しても之を以て自ら足れりとせず、いつ迄も勤めて已まぬことである。敎へを弘むるに當つては種々の障礙が起るものであるが、其の障礙に打克つだけの勇氣のないものは、『今迄相當に力を盡して、相當な成績を擧げ得たのであるから、もはや此以上に努むるには及ばぬ』といふやうな氣が起る。たゞ無厭心を有する者のみが有らゆる障礙に打克ち得らるゝのである。法華經涌出品には

諸佛の師子奮迅の力



とあるが、佛法を弘むるものは皆之を以て範とすべきである。

第三の願は正法を護持することであるが、それには『攝受正法』といふことが基礎とならなければならぬ。攝受正法とは佛の說きたまへる正法を學んで之を體得し、之を實行することである。『身命財を捨て』とあるは之が爲に如何なる犧牲を拂ふとも顧みぬといふ意である。生命も財產も大切なものではあるが、人の人たる所以の道を知らずして生きて居るのは、全く無意味である。生命財產よりも更に貴きものあることを知つてこそ、初めて人らしく生きて行くことが出來るのである。子貢が孔子に政を問うた時に孔子は之に答へて、『食を足らし兵を足らし民は之を信にす』といはれたが、子貢が『若し已むを得ずしてなほ一を缺かなければならぬ場合には何れを先にしやうか』と問へるに對して『兵を去らん』といひ、更に『若し已むを得ずしてなほ一を缺かなければならぬ時には……』と問へるに對して、

食を去らん。古より皆死有り。民信無ければ立たず。

といはれた。實に力ある語である。生命よりも道が貴いといふことを知らなければ、生きがひの無いものである。さて有らゆるものを犧牲にするとも顧みぬといふ熱心を以て佛の正法を學び、其の學び得た所を人に說くことは大なる功德であるが、一人の力には限りがあるから自分

一人で如何に努めても佛法を天下に流布せしむることは出來ぬ。故に自分と志を同うする人を援助し保護して、共に力を協せ心を一にして佛法の流布を謀ることが肝要である。『正法を護持す』とあるは卽ち此の事である。

勝鬘は更に大乘の教への特色に就て自ら解し得たる所を說き、また之を世に弘むるに就ての覺悟をも委しく說いたが、それは盡く佛の御心と一致するものであつたので、釋尊は大に之を嘉せられ、

善い哉善い哉勝鬘、甚深の法に於て方便守護して、非法を降伏すること善く其の宜しきを得たり。

と仰せられた。勝鬘は佛恩を拜謝して其の家に歸り、夫の友稱王に一切の事情を物語り、夫婦心を協せて大乘を弘めた。卽ち勝鬘經に記す所に依れば

具足して佛を念じたてまつり、還りて城中に入り、友稱王に向ひて大乘を稱歎し、城中の女人七歲已上は化するに大乘を以てす。友稱王も亦大乘を以て諸の男子七歲已上のものを化し國を擧げて人民皆大乘に向ひき。

とある。而して釋尊は勝鬘の說ける所が全く佛意に一致せることを認められ、帝釋天及び長老阿難を召して其の意を重ねて說きたまひ、

汝も亦受持し讀誦し、四衆のために廣く說くべし。

と仰せられたといふ。以上勝鬘夫人の事蹟を語ること餘りに長きに過ぎたやうであるが、女人と雖も大乘を學ぶ上に於て少しも男子に劣る所はないといふことを證するには充分であらうと思ふ。又普通は夫の感化が妻に及ぶ例が多いのであるが、勝鬘夫人は却て夫の友稱王を感化して共に大乘の弘通に力を盡したといふ。此の如くであれば全く男女の差別などは超越したわけである。又勝鬘はまだ妙齡の婦人であるが阿難は釋尊十大弟子の一人として重んぜられた人である。然るに釋尊は之に對して勝鬘の說いた所を語られたが、阿難等は非常に歡喜したとある。是れ皆勝髮夫人が佛に歸依し、佛の教へを深く信じたる結果である。世の中に信の力ほど大なるものは無い。大乘の教へを受持する上に於て、男女の差別も無ければ貴賤貧富の差別もない。

此の外にも大乘を學んで、佛の爲に歎稱せられたる女人の例は少くない。是れも前に一度例に引いたが、法華經の中に出たる淨德夫人の如きも、非常に大なる感化力を有し、佛法の弘通の上に大なる功勞があつた。淨德夫人は妙莊嚴王の夫人であつたが、王は外道を信愛して佛法

を信じなかつた。併し夫人の生んだ所の二子は（其の名を妙藏、妙眼といふのであるが）深く佛法に歸依して居た。是れ卽ち母なる淨德夫人の感化に依るものである。夫人はなほ二子に勸めて父王を動かし、王も終に夫人や二子と共に佛の所へ詣つて其の說法を聽き、忽ちに邪念を翻して佛教に歸依した。佛は大衆に向つて、

汝等是の妙莊嚴王の我が前に於て合掌して立てるを見るや否や。此の王は我が法の中に於て比丘となり、助佛道の法を精勤修習して當に作佛することを得べし。

と告げられた。彼は國王であるから、其の一般人民に及ぼす所の感化の力も非常に大きかつたに違ひない。隨て彼が一人佛法を信じて之が弘通に力を盡せば其の效果は極めて大なるものであつたであらう。斯る大なる功德の源を尋ぬれば畢竟淨德夫人の力である。佛が

當に知るべし善知識は是れ大因緣なり。所謂化導して佛を見、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得しむ。

と仰せられたのは道理である。而して

爾時に妙莊嚴王及び其の夫人頸の眞珠瓔珞の價直百千なるを解きて、以て佛の上に散ず。

とあるが、これは夫婦心を同うして深く佛に歸依したるさまを現はすので、此に至れば男女全く同等であつて、その間には毫の差別もないのである。此等の例によつて見ても、天女が女身を轉ずるの要なきことを說いたのは能く佛意に合せる語といふべきであらう。

舍利弗問レ天。汝於レ此沒。當レ生二何所一。天曰。佛化所レ生。吾如二彼生一。曰。佛化所レ生。非二沒生一也。天曰。衆生猶然。非二沒生一也。舍利弗問レ天。汝久如當レ得二阿耨多羅三藐三菩提一。天曰。如二舍利弗還爲一凡夫一。我乃當レ成二阿耨多羅三藐三菩提一。舍利弗言。我作二凡夫一。無レ有二是處一。天曰。我得二阿耨多羅三藐三菩提一。亦無二是處一。所以者何。菩提無二住處一。是故無レ有二得者一。舍利弗言。今諸佛得二阿耨多羅三藐三菩提一。已得當得。如二恒河沙一。皆謂レ何乎。天曰。皆以二世俗文字數一故。舍利弗。汝得二阿羅漢道一耶。曰。無所得故而得。天曰。諸佛菩薩亦復如レ是。無所得故而得。爾時維摩詰語二舍利弗一。是天女已曾供二養九十二億佛一已。能遊二戲菩薩神通一。所願具足。得二無生忍一。住二不退轉一。以二本願一故。隨レ意能現。敎二化衆生一。

（舍利弗天に問ふ、汝此に於て沒して、當に何れの所にか生ずべきと。天曰く、佛化の生ずる所、吾彼の生の如しと。曰く、佛化の生ずる所は沒生に非るなりと。天曰く、衆生猶ほ然り、

沒生に非るなりと。舍利弗天に問ふ、汝久如か當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきと。天曰く、舍利弗が還りて凡夫と爲らんが如く、我乃ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべしと。舍利弗言く、我凡夫と作ること是の處有ること無しと。天曰く、我阿耨多羅三藐三菩提を得ること亦是の處無し。所以は何。菩提は住處無し、是故に得る者有ること無ければなりと。舍利弗言く、今諸佛は阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。已得と當得とは恒河沙の如し。皆何をか謂ふやと。天曰く、皆世俗の文字の數を以ての故に三世有りと說く。菩提に去來今有りと謂ふには非ずと。天曰く、舍利弗、汝阿羅漢道を得たりやと。曰く、無所得の故に而も得たりと。天曰く、諸佛菩薩も亦復た是の如し。無所得の故に得たりと。爾の時維摩詰舍利弗に語らく。是の天女已に曾て九十二億の諸佛を供養し、已に能く菩薩の神通に遊戲して所願具足し、無生忍を得て不退轉に住せり。本願を以ての故に意に隨ひて能く現じて衆生を敎化すと。）

天女と舍利弗との問答はこゝに終りを告げ、隨て此の觀衆生品も終りとなるのであるが、終りに天女の說く所は全體を收束して極めて妙である。此の品の最初に於て維摩詰は文殊師利の問に應じて、衆生の生活の極めて無意義なることを說いた。而も菩薩が衆生を敎化することにいつも全力を注ぐことは、問疾品以來幾度となく說かれた所である。若し衆生が全く無意義に存在するものならば、菩薩の努力は畢竟何の用にも立たぬであらう。たとへ佛菩薩の力と雖も無より有を生ずることは出來ぬ。衆生が全く佛菩薩と懸隔して居るものならば、如何に懇ろに敎へても悟らぬであらう、如何に心を盡して導いても永く凡夫のまゝで居るであらう。無意義なる生活を續けて居る衆生が佛菩薩の敎へによつて其の今まで爲し來つた事の無意義であつたことに氣づき、新なる生活に入り得べき見込みがあればこそ、維摩詰の如く常に佛法を弘むることに力を盡したのである。されば佛となり菩薩となるべき種は衆生の心の底に潛在して居るものと見るべきで、其の種を養つて長せしめんが爲の佛法である。それ故に文殊師利と維摩詰との問答は次第に此の問題に入り、續いて天女と舍利弗との問答に移つても、なほ此の問題が論議されたわけである。而して此の結末に至つて天女は明かに『佛菩薩と衆生とは更に異る所がない』と斷言した。

異る所がないといつても、現に吾等凡夫が佛菩薩と非常に異つたる生活をして居ることは事實である。異ること無き筈のものが、斯く非常に異つたる生活をして居るのは、其の本來具有せる貴い性質が煩惱の爲に蔽はれて居るからである。此處に氣がついて佛法を學び、凡夫の境界を離れ得た者は、他の人々が佛法の何たるを知らずして、いつ迄も凡夫の境界に沈んで居る

のを見て、自分の昨日までの生活に思ひ比べて深き同情を起し、是非とも彼等を救つて自分達と同じやうな光明に充ちたる生活に入らしめたいといふ念願を起すのである。華嚴經の中に菩薩の三大願を擧げて

願はくば衆生と共に大道を體解して、佛種を紹隆したてまつらん。

といひ、又

願はくば衆生と共に深く經藏に入りて、智慧海の如くならしめん。

といひ、終りに

願はくば衆生と共に大衆を統理して一切無礙ならしめん。

とあるは能く此の意を悉せるものである。維摩詰の志もさうであつた、天女の志も亦さうであつた。されば維摩詰は天女のことを語つて『本願を以ての故に意に隨ひて能く現じて衆生を教化す』といつたのである。

希臘のプラトーンは其の名著『理想國』の中に洞穴の譬喩を說いて居る。一の洞穴の中に多くの人が住んで居たが、其の洞穴は一方の狹い入口から微かに日光がさし入るのみで、中はいつも薄暗かつた。而して洞中の人々は皆其の脚を嚴しく鎖を以て地面に結びつけられて居るから、洞の外へ出ることは出來ず、いつも薄暗い中でのみ暮して居た。それ故に洞の外に如何なる物があるのか全く知らず、唯だ折々洞の入口の所を通過する人や動物の影が微かに洞中の岩壁に映ると、人々は其の形に就て互ひに批評しあふが、何れも實物を知らず、たゞ影を見ての み評するのであるから、一つも當つては居ないのである。斯く描寫せられたる洞中の有樣は、法華經の方便品に凡夫の生活の淺ましさを評せられて

貪愛を以て自ら蔽ひ、盲瞑にして見る所無し。

とあるのと能く一致して居る。吾等は煩惱の鎖に繫がれて、凡夫の生活以外に一歩も出ることが出來ず、一切の物の眞相を知ることは勿論出來ずして唯だ憶想を以て彼此と論議して居るのみである。

さて此の洞中の一人が幸にして其の脚を繫いだ鎖を解き、洞外へ出て美しい日光の下に立つた。あまり日光が强いので、久しく薄暗い所にのみ慣らされて居た兩眼に强い痛みを感じ、暫くは唯だ立ちすくんで居たが、次第に落着いて來て眼もよく見えるやうになり、あたりを徐かに見廻すと、其の景色の美しいことは洞中の有樣と到底比較にならぬ。彼は深く自分の幸福を感ずると共に、今までの洞穴の中の生活があまりにも淺ましくなり、其の淺ましい生活を脫し

得ぬ多くの人々が悼はしくなつて來た。それで彼は『人々を誘ひ出して共に此の美しい日光の下に立たせてやらう』と決心し、又以前の洞穴の中へ戻り、外の景色を細々と說き明して『サア其の鎖を解いて外へ出るが宜い、共に美しい光りの中に立たうではないか』といつて熱心に勸めた。併し人々は彼のいふことを信せず『そんな所が有らう筈はない。汝は吾等を欺いて何處か恐ろしい所へ連れて行くのであらう』といひ、彼を罵詈し、或は拳を擧げて打つてかゝる者もある。或は『此の男は夢を見て居るのだ』と彼を嘲笑する者もある。併し彼は人々の無智を憫れんで、決して瞋りを發せず、いかにもして彼等を此の不幸な境界から救ひ出さうと、頻りに『共に美しい光りの中に立たう』と繰返し繰返し勸めて、少しも倦むことを知らぬと。プラトーンは此の譬喩を說き終つて『此の洞中の生活が卽ち一般の人の日常である。此の一人が卽ち哲人である』といつた。維摩詰はじめ諸菩薩の志は卽ち此の一人の志に外ならぬものである。

○此に於て沒して　此の娑婆世界の生活を終つてから、何れの所へ生を受くるつもりであるかと問うたのである。○佛化の生ずる所　佛の敎化を受けて煩惱を掃ひ盡し、新なる生活に入ることをいふのである。○吾彼の生の如し　彼の生とは他の世界（例へば天上界の如き）に生れて、そこに住することをいふのである。心に煩惱が無くなれば何れの所に住むも全く同じことである。娑婆世界を去つて他の世界に住まんと望む必要はない。（此の天女の言は佛國品に於て釋尊が『若し菩薩淨土を得んと欲せば當に其の心を淨くすべし』と敎へられたのと能く一致して居る。）○沒生に非るなり　佛の敎化によつて煩惱を除き新なる生命を得るのは、純乎たる心の變化であつて肉體に支配せらるゝものではない。此の世の生が終つてから別に生を受くるのではなく、此の身このまゝで新なる生に入ることが出來るのである。○衆生猶ほ然り　未だ佛法を學ばぬ衆生であつても、佛の敎化によつて新なる生を得べき素質はもつて居るのである。自ら大乘を學び得たりとて、衆生を疎外する心があつてはならぬ。○汝久如か　天女の說く所を聞けば大乘の精神を充分に解し居るものと思はれる。必ずや佛智を成じて佛の境界に到達することも近きに在らうといふ自信をもつて居るであらう。因て之を問うのである。○舍利弗還りて凡夫と爲らんが如く　釋尊十大弟子の隨一たる舍利弗が又元の凡夫と爲ることは、如何にしても有り得べからざる事實である。それが有り得べからざることならば、天女が佛と成ることも同樣有り得べからざることであるとの答へである。○我阿耨多羅三藐三菩提を得ることも　阿耨多羅三藐三菩提とは前にも度々いつた通り佛智の

ことであるが、佛法を學んで然る後に佛智を得るものと思ふのは至て淺はかな考へである。吾等は皆同じく佛性を具へて居るのであるから、佛智を得ることは本來の性質に基くものである。此の本性を開發し長養するために佛法を學ぶのである。佛法を學んで修行を積むに隨ひ次第に此の貴い本性が延びて行くのは、宛も草や木の芽が日に照され雨に潤はされて、葉を延し花を開くやうになるのと同じことである。雨露や日光が草を作り木を作ることは出來ぬ。○住處無し　僧肇は之を說明して『菩提の道は無爲無相にして自ら住處なし』といつた。佛性が自ら延びて、佛智が自ら成就するのであるから、今日悟つたとか昨日悟つたとかいふことのある筈はない。『自分は悟つた』といつて喜ぶやうな者は、眞に悟つたものではない。○得る者有ること無ければなり　眞の覺を得たものは決して自ら得たりとして世間の人々と自己とを差別することなく、常に世俗の間に混じて唯だ共に佛道を成就することに力を盡すのである。○已得と當得とは恒河沙の如し　已得とは已に正覺を得て佛と成れる者のことである。當得とは今修行を積んで居る結果として、後には必ず當に正覺を得て佛と成るべき者のことである。恒河は大河であるから、恒河の沙の數は固より無限である。遠き過去の世より遠き未來に亘つて、佛と成る者の數は無量である。○皆何をかいふや　諸佛は皆修行を積んだ結果として正智を得たりと語つて居らるゝのである。然るに今天女は『得る者あること無し』といふが、それでは諸佛の言は僞妄となるではないか。之を如何に解すべきであるか。○世俗の文字の數を以ての故に　世間の人を誘うて道に入らしむる爲には、世間の人の解し得るやうな言語文字を借りて教へなければならぬ。卽ち方便の必要がある。○三世有りと說く　過去の業が現在に報を生じ、現在の業が未來に報を生ずると說いて、惡を戒め善を勸むるである。○菩提に去來今有りといふには非ず　吾等の日常生活に於て過去と未來と今との區別はあるが、之を一貫して永恒不變の理の存することを知らなければならぬ。此の理を明かに見究めたものが菩提、卽ち正智を得たる者である。其の正智を得るには修行を重ねなければならぬ。修行を積んだ結果として覺るのであるから、その間に勿論去來今の關係は存するのである。併しながら既に覺り了れば、吾が心と絶對の理と一致するのであるから、時間をも空間をも一切超越するわけである。○無所得の故に　修行を重ねて居る間に、いつとは無しに一切の煩惱を除き盡すことが出來たので、强ゐて求めて得たものではない。○神通に遊戲し　遊戲とは自在を得たることである。自在の通力を得て、佛法を弘むるために力を盡すやうになつたのである。○所願　一切衆生に救護を與ふることが菩薩の願である。併し自分にそれだけの德が具はらなければ人を救ふことの出來るもので

はない。所願具足といへば其の徳の具はつた結果と知るべきである。〇本願を以ての故に　敎化衆生といふことが根本の願である。其の敎化の方法に就ては異同があるけれども、根本の精神に變りはない。

天女は前段に於て男女其の形を異にするとも、佛と成る上に於て何の差異もないことを明かにしたので、更に其の佛と成つて後に住する處は何れの處であるかとの問題に移り、天女は『何れの處に住するも更に異る所はない』と答へたである。佛は申すに及ばず、高徳の菩薩となれば何れの處に住するも常に安穩快樂である。如何なる事物も其の心に累を與ふることは出來ぬ。雹に其の周圍より影響を受けぬのみならず、其の徳によつて其の周圍の者に大なる感化を與ふることが出來る。前にも孟子の言に

君子は其の過ぐる所の者化し、其の存する所のもの神なり。

とあるのを引いたが、佛菩薩の世間に於けるは常に此の如くである。佛菩薩は何れの處に住するも常に斯る貴い作用を續けて居るのであるから、何れに住するも常に其の心は安樂である。但し多くの衆生が煩惱に役せられて、苦を重ね罪を重ねて居るのを見ては、之が爲に心を痛めぬわけにゆかぬ。

一切衆生が異の苦を受くるは悉く是れ如來一人の苦なり。（涅槃經）

とは釋尊の明言したまへる所である。さりながら其の一切の衆生も皆佛性を具へて居る。又佛の說きたまふ所は盡く人々の佛性を開發せしむべき力をもつて居る。それ故に人々の機根に皆等差があるから、其の覺を得ることに遲速の差はあるであらうが、終には盡く皆佛法に歸依し、悉く皆煩惱を掃ひ盡すことが出來るにちがひ無い。佛も菩薩も之を固く信じて居らるゝから、此の娑婆世界に住んで種々の累ひの中に立ちながら、少しも之を厭はれぬのである。前に引いた法華經の文に、

如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度す可きこと易し。疲勞有ること無し。

とは實に此の娑婆世界に於ける釋尊の御言葉である。天女も佛の御心を以て吾が心と爲せるものであるから、自ら此の娑婆世界に在ることに滿足して『吾彼の生の如し』といつた。而して維摩詰は更に之に言を添へて『本願を以ての故に意に隨ひて能く現じて衆生を敎化す』といつた。

さて佛菩薩が衆生を敎化せらるゝのは『彼は後に必ず佛と成るべきものである』との確信をもつての事であるから、如何に之が爲に力を勞するとも、其の勞を厭ふことなく、又彼が如何

に愚であつても些かも之を輕賤することなく、彼が如何に凶惡であつても些かも之を憎惡することは無い。法華經の勸持品には、修行の中途で我慢の心を起し、徒らに自ら高しとして他を輕んずる者のことを、

納衣にして空閑に在り、自ら眞の道を行ずと謂ひて、人間を輕賤する者。

とあり、此の如き徒が末世には世間に輩出するであらうと豫言されてあるが、まことに其の通りである。人間を輕賤する者は慈悲心の缺けたるものである。慈悲心の缺けたる者は佛の御心と一致せぬものである。同じ法華經の化城諭品に、梵天王の說いた偈の中に、

願はくは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん。

とあるが、此の如き心を以て常に衆生に對してこそ、眞の佛弟子と稱せらるべきである、天女が『衆生猶ほ然り』といつたのは『佛の如くに衆生も亦然り』といふ意であつて、至て簡單な語ではあるが、眞に能く佛意にかなへるものと稱すべきである。

既に佛と衆生との間に區別を立てぬ以上は、自ら大乘を學んで漸く佛の境界に近づき得たりとて、少しも自己と世間の凡夫との間に區別を立つべき筈もない。天女が舍利弗の問に答へて『我阿耨多羅三藐三菩提を得ることも亦是の處なし』といつたのは道理である。譬へば夜が明けて朝となるやうなもので、いつとは無しに次第に明るくなつて、全く闇を離れ切るやうに、久しく修行を重ねて行く間に、いつとは無しに心の闇が除かれてしまふのである。又譬へば一町か二町は近く、千里二千里は遠いのであるが、一町より二町、二町より三町と歩みを續けて行くうちに遠くまで行けるのである。第何歩から遠くなつたのかといつて區別を立つることの出來るものではない。法華經の方便品に或は『童子の戲れに沙を聚めて佛塔を爲せる』もの、或は『艸木及び筆、或は指の爪甲を以て畫きて佛像を作せる』もの、或はまた『乃至一手を擧げ或はまた少しく頭を低れ、此を以て佛に供養せる』もの等種々の人達のことを擧げ、其等の事が皆緣となつて後には皆佛道を成すべきことを說かれて、

是の如き諸人等漸々に功德を積み、大悲心を具足し、皆已に佛道を成じき。

とあるが、佛の如き大悲心を具足するまでには、漸々に功德を積むの外はない。漸々に功德を積んで行く間に、吾等の本來具へて居るところの佛性が次第に延びて行くのである。

莊子の『大宗師』といふ篇の中に、子桑戶その他二人の道人が自然を樂んで生活して居た有樣を叙し、孔子が子貢の問に答へて之を評した語が出て居るが、その語に

魚は水に相造り人は道に相造る。水に相造る者は池を穿ちて養給す。道に相造る者は無事に

して生定まる。故に曰く、魚は江湖に相忘れ、人は道術に相忘る。

とある。魚は水中を游泳するに當つて、其の水が淨くして且豐富であれば、水中に在ることをすら相忘れて悠々自適して居る。人も亦其の如くであつて、眞に道を學び得た者は自ら得たりといふことも忘れて、行住坐臥悉く道と一致して居るのである。此の如き人は決して自ら得たりとて傲ることも無く、又他の人を輕んじ賤しむことも無いのである。今此の天女のいふ所も大乘の道の中に相忘れたるさまを語つたものと見るべきであらう。之によつて佛法の洪大なることを知るべく、又佛の御力の際限もなく大なることを知るべきである。なほ此の『大宗師』の中に

古の眞人其の寢るに夢無く、其の覺るに憂無く、其の食を甘しとせず。其の息は深々たり。

とあり、又

眞人の息は踵を以てし、衆人の息は喉を以てす。

とあるが誠に面白い語である。踵から息が出るとは、大悟して其の心の少しも動搖せぬさまを能く形容して居る。又眞人の生活狀態を說明して、

物と宜しき有りて而して其の極を知ること莫し。

とあるが、眞に其の心が定まつて居れば、如何なる所に住み如何なる物に對しても常に其の宜しきを得て、更に窮する所はない筈である。吾等も斯る境遇に到達するが爲に常に力を盡さなければならぬ。

# 維摩經講義（上卷）終

觀衆生品

# 維摩經講義（下卷）

小林一郎述

## 佛道品第八

佛道品に於て說かるゝ所は『大乘を學ぶものは如何にして佛道に通達すべきか』といふことである。佛の說きたまへる所は一として吾等の具有せる佛性を開發せしむべきものとならぬは無いけれども、特に大乘を學んで佛道に通達すべき要點を知ることは極めて大切である。此の佛道品の始めに於て維摩詰は先づ菩薩たる者の特に忘れてならぬのは、常に佛の御心を以て吾が心と爲すことであると說くのである。佛の御心は大慈大悲であるから、菩薩も大慈大悲の心を以て、種々の方便により衆生を誘導することに力を用ゐなければならぬ。維摩詰は更に進んで文殊師利の意見を問ひ、文殊は之に答へて小乘の徒は永く佛と成ることが出來ぬといふ意を力說する。それは自ら煩惱の生活を脫し得たるを以て足れりとし、煩惱の衆生に對する同情心が

足らぬからである。煩惱の衆生を隔てぬ大慈悲あつて初めて佛の御心と一致するのであるから『一切の煩惱を如來の種と爲す』といふのである。此の如くに維摩詰の說く所と文殊師利の說く所とは相應じて、大乘の意を闡明すること到れり盡せりともいふべきであるから、迦葉は聽き終つて深く感嘆した。玆に於て維摩詰は普現色身菩薩の問に答へて、高德の菩薩の日常生活は一擧手一投足が盡く佛道に一致することを述べんが爲に偈を說くのであるが、此の偈は百六十八句であつて、之を分てば四十二節となり、能く菩薩の德を盡し、まことに琅々として誦すべきものである。以下例によつて數段に分つて解說する。

爾時文殊師利問維摩詰言。菩薩云何通達佛道。維摩詰言。若菩薩行於非道。是爲通達佛道。又問。云何菩薩行於非道。答曰。若菩薩行五無間。而無惱恚。至于地獄。無諸罪垢。至于畜生。無有無明憍慢等過。至于餓鬼。而具足功德。行色無色界道。不以爲勝。示行貪欲。離諸染著。示行瞋恚。於諸衆生。無有恚礙。示行愚癡。而以智慧調伏其心。示行慳貪。而捨內外所有。不惜身命。示行毀禁。而安住淨戒。乃至小罪猶懷大懼。示行瞋恚。而常慈忍。示行懈怠。而勤修功德。示行亂意。而常念定。示行愚癡。而通達世間出世間慧。示行諂僞。而善方便隨諸經義。示行憍慢。而於衆生猶如橋梁。示行諸煩惱。而心常淸淨。示入於魔。而順佛智慧。不隨他教。示入聲聞。而爲衆生說未聞法。示入辟支佛。而成就大悲。教化衆生。示入貧窮。而有寶手。功德無盡。示入形殘。而具諸相好。以自莊嚴。示入下賤。而生佛種姓中。具諸功德。示入羸劣醜陋。而得那羅延身。一切衆生之所樂見。示入老病。而永斷病根。超越死畏。示有資生而恆觀無常。實無所貪。示有妻妾采女。而常遠離五欲淤泥。現於訥鈍。而成就辯才。總持無失。示入邪濟。而以正濟度諸衆生。現遍入諸道。而斷其因緣。現於涅槃。而不斷生死。文殊師利。菩薩能如是行。於非道。是爲通達佛道。



（爾の時に文殊師利、維摩詰に問ひて言く、菩薩云何か佛道に通達せんと。維摩詰言く、若し菩薩非道を行せば、是を佛道に通達すと爲すと。又問ふ、云何か菩薩非道を行ずると。答へて曰く、若し菩薩五無間を行じて而も惱恚無く。地獄に至るも諸の罪垢無く。畜生に至るも無明憍慢等の過有ること無く。餓鬼に至るも而も功德を具足し。色無色界の道を行ず

るも以て勝れたりと爲さず。貪欲を行ずることを示して諸〳〵の染著を離れ。瞋恚を行ずることを示して諸〳〵の衆生に於て恚礙有ること無く、而も智慧を以て其の心を調伏し。慳貪を行ずることを示して而も內外の所有を捨て身命を惜まず。毀禁を行ずることを示して而も淨戒に安住し、乃至小罪にも猶ほ大懼を懷き。瞋恚を行ずることを示して而も常に慈忍あり。懈怠を行ずることを示して而も常に念定あり。亂意を行ずることを示して而も功德を勤修し。愚痴を行することを示して而も世間出世間の慧に通達し。諂僞を行することを示して而も善方便をもて諸〳〵の經義に隨ひ。憍慢を行ずることを示して而も衆生に於て猶ほ橋梁の如く。諸〳〵の煩惱を行ずることを示して而も心常に淸淨たり。魔に入ることを示して而も佛智慧に順じ、他の教に隨はず。聲聞に入ることを示して而も衆生の爲に未だ聞かざる法を說き。辟支佛に入ることを示して而も大悲を成就して、衆生を敎化し。貧窮に入ることを示して而も寶手有りて、功德盡くること無く。形殘に入ることを示して而も諸〳〵の相好を具し、以て自ら莊嚴し。下賤に入ることを示して而も佛の種姓の中に生じ、諸〳〵の功德を具し。羸劣醜陋に入ることを示して而も那羅延の身を得て、一切衆生の見んと願ふ所たり。老病に入ることを示して而も永く病根を斷じ、死の畏を超越し。資生有ることを示して而も恒に無常を觀じ、實には貪る所無く。妻妾采女有ることを示して而も常に五欲の淤泥を遠離し。訥鈍を現じて而も辯才を成就し、總持して失すること無く。邪濟に入ることを示して而も正濟を以て諸〳〵の衆生を度し。遍く諸道に入ることを現じて而も其の因緣を斷じ。涅槃を現じて而も生死を斷せず。文殊師利、菩薩能く此の如くに非道を行ずる、是を佛道に通達すと爲すと。）

此の佛道品の始めに於て維摩詰の說ける『佛道に通達すること』は彼が平生に於て自ら實行せる所と思はれる。卽ち前の『方便品』に於て詳細に叙述せられたる維摩詰の行狀と比べ合せて見ると、彼が眞に言行一致の人であつたことが證せらるゝのである。菩薩は佛と衆生との中間に立つものである。其の任務とする所は衆生を導いて佛に歸依し、共に佛法を信ぜしむることである。それは宛も空氣が吾等の周圍に充滿して能く太陽の光りと熱とを吾等に傳へ、吾等の生育を助くると同樣である。然るに若し此の空氣が汚れたり濁つたり、種々の毒物を混じて居たりするならば、之が爲に太陽の光りは昏くなり、太陽の熱は遮られて、此の地上の物は何れも皆生育を遂げられぬに至るであらう。菩薩たるものは常に之を恐れなければならぬ。卽ち菩薩は佛の御心の如くに佛の敎へを衆生に傳ふることに努めなければならぬ。衆生をして眞の佛法を知らしむることに深く意を用ゐなければならぬのである。故に佛道に通達することが菩薩と

しては最も肝要なのである。佛道に通達するとは卽ち佛の實行せらるゝ所の道に通ずることである。卽ち佛の御心の有る所を正しく知り、之に叶ふやうに佛法を弘むることに外ならぬのである。道生は之を解釋して、

應化無方なるは佛の道たり。旣に能く之を體すれば通達したりとす。

といつた。應化とは衆生の性質氣風等に應じて、それ〴〵に適當なる化導を與へ、一切の苦を離れしむること。無方とは自在にして無礙なることである。應化無方なるが故に有らゆる善巧方便を以て、常に法を說かるゝのである。能く之を體得するならば佛の化導を贊くるに於て遺憾なきを得るであらう。

又此の佛道品と前の天女の一段との關係に就て、羅什の解釋した所は頗る要を得て居るやうである。卽ち

上の章に天女が願に應じて身を受け佛法を流通するに因りて、圓應の迹を廣め、以て通達の功を明すなり。

とある。圓應とは圓融無礙にして能く衆生に應じ、一々適切なる教へを與ふることをいふのである。それは佛の御心を以て吾が心とする者にして初めて能くすべき所である。天女の言ふ所は維摩詰の心とも全く一致して居る。因て維摩詰は天女の說いた後を承けて更に文殊師利と問答を重ね、菩薩道を行ずる者の爲に最も肝要なる點を明かにするわけである。天女は『佛も衆生も更に隔てはない』といふことをいつた。それが佛の御心であり、又菩薩の常に心に銘すべき所である。若し佛法を弘むるものが『吾は佛の御使である。汝等は罪の衆生である。汝等と吾とは非常に懸隔せる者である』といふが如き態度を以て世間の人に臨むならば、彼等は決して其の教へを聽くことを樂まず、弘通の目的はいつ迄も達せられぬであらう。佛の御子であつた羅睺羅が密行第一を以て稱せられたことは前にもいつたが、唐の道宣は其の密行なるものが獨り羅睺羅に限らぬことを說いて、

聖賢は密行にして、內智に外愚なり。

といつた。これは良い語である。自ら內心に深く智慧を藏しつゝ、而も之を外面に現はさず、衆生に混じて共に住み、漸く彼等を導いて佛法に入らしむるといふ覺悟がなければ。弘通は竟に行はれぬものである。今此處に說かるゝ所は能く此の意を悉して、頗る有益である。

○非道を行せば　外面には菩薩道に背ける如き行ひを示し、以て衆生を導くのである。卽ち吾も汝等も共に凡夫であるから、共に相助け相戒めて佛法を學び、共に凡夫の境界を離れやうで

はないか』といふ態度を以て彼等に接するのである。羅什が之を說明して『非に處して其の本を失はず、故に能く非道に因りて以て道を弘む』といひ、更に『譬へば良醫の物に觸れて藥と爲すが故に醫術斯に行はれ、病に遇ひて斯に治するが如し』といつたのは良い解釋である。○五無間を行じて　五無間とは無間地獄へ墜つべき大罪を五種擧げたので、五逆といふのと同じことである。其の五とは一には父を殺すこと。二には母を殺すこと。三には阿羅漢を殺すこと。四には佛身より血を出すこと。五には和合僧を破ることである。和合僧を破るとは心を協せて佛法の弘通に力を盡せるものを離間して、その間に紛爭を生ぜしめ、佛法弘通の途を塞ぐことである。此の五種の罪は諸罪中の最大なるものと考へらるゝのである。○而も惱恚無き　五逆を行ずる者は其の心が全く煩惱の爲に昏み、瞋恚の念に驅られて全く分別を失つた爲に、斯る大罪を犯すに至つたのである。菩薩が斯る惡人の中に混じて居ても、其の心には全く惱恚無く漸く彼等を教へ諭して其の心を醱させるやうに盡せば、功德は莫大である。○諸の罪垢無く　心が汚れて居て大罪を犯した故に地獄に入つたのである。然るに心に罪垢なき菩薩が地獄に入り彼の大罪人等と共に居れば、必ず彼等を救ふことが出來るわけである。○無明憍慢等の過無く　無明とは全く正しい分別を失ひ盡した有樣をいふのである。又憍慢の念は進んで人の教へを求めやうといふ念を遮つてしまふから、憍慢の者は永く愚痴なのである。愚痴の極に在る者が卽ち畜生である。菩薩は此等の過無き身を以て畜生界の者と共に住むのである。○功德を具足し貪欲の甚しき者が卽ち餓鬼道に墮つるのである。菩薩は全く貪欲の念なく、一切衆生を救護して大なる功德を積む身であつて、而も餓鬼道の者と共に住むのである。○色無色界の道を行ずるも　前にもいつた通り形體あり欲情ある者の世界を欲界といひ、欲情無くしてたゞ形體のみある者の世界を色界といひ、形體無き、純精神的存在の世界を無色界といひ、吾等の住するは卽ち欲界である。色界と無色界は何れも天上界であつて、多くの婆羅門は種々の難行苦行を積み、其の報として天上界に生を受けんことを理想として居たものである。○以て勝れたりと爲さず　菩薩は無論多くの功德を積んで居るのであるから、天上界に生を受くることも出來るわけであるが、決してそれを望むこと無く、自ら甘んじて娑婆世界に住み、多くの人と共に累ひ多き生活をして、唯だ佛法の弘通をのみ樂みとするのである。○貪欲を行ずることを示して　貪欲の人と共に住むから菩薩其の人も貪欲を行ずる者と見ゆるのである。○諸の染著を離れ　染とは汚れて染むこと著は卽ち執著である。諸の染著を離るゝとは一切の煩惱を起さぬことである。○瞋恚を行ずることを示して　菩薩はまた多くの瞋恚の甚しき者をも隔てず、之と共に住むが

故に、同じく瞋恚の念の強い者と見ゆるのである。○恚礙有ること無く　何人に對しても瞋恚の念を懷かず又何人をも隔つること無く、常に哀愍の心を以て之に對するのである　○其の心を調伏す　相對する人々を感化して、惑を去り惡を除かしむるのである。○賤貧を行ずることを示して　貪欲の甚しきものは、必ず人に施すことを惜む念も強いのである。慳悋と貪欲とはいつも必ず伴ふに定まつて居る。菩薩は此の如き人とも共に住むのである。○內外の所有を捨て　內とは心のこと、外とは物のことである。菩薩は其の知れる所を少しも惜まずして人に教へ、又其の有する所の物を少しも惜まずして人に施すのである。卽ち財施も法施も共に惜まぬのである。○身命を惜まず　內外の所有を惜まぬは勿論、佛法を弘むるが爲には生命を擲つことをすら惜まぬのが菩薩の志である。○毀禁を行ずることを示して　禁とは佛の定められたる禁戒である。禁戒を破つて放逸なる行ひを恣にするのが凡夫の常であるが、菩薩は斯る凡夫と共に住むのである。○淨戒に安住し　其の心は佛の淨戒と一致して居る。戒を守ることに少しも困難を感せず、安んじて之を守り得るのである。○乃至小罪にも　假令微小の罪でも犯してはならぬといふ深き謹愼の念を常にもつて居るのである。○常に慈忍あり　たとへ瞋恚の甚しき者と共に住むとも其の心には常に大慈悲を行ぜんことを念ひ、また忍辱を行ずることを忘れぬ故に、何人に



對しても憎惡怨恨等の念を起すことはない。○懈怠を行ずることを示して　凡夫は眼前の小事にのみ心を惹かれて、大切なる佛法に心を向けぬものである。之を名けて懈怠といふ。菩薩は此の如き徒と共に住むのである。○功德を勤修し　常に功德を積むことに全力を注ぎ、勤めて更に怠ることは無いのである。○亂意を行ずることを示して　其の心が散亂して定まる所無きは凡夫の常である。菩薩は此の如き徒と共に住んで厭はぬのである。○念定あり　正念と正定とが具はつて居る。正念とは佛の正法がいつも其の心を離れぬこと。正定とは其の心が常に決定して、佛の正法と一致して居ることである。○愚痴を行ずることを示して　凡夫は眼前の事物の變化のみに心を惹かれて、正しき因果の理に昏いものである。之を稱して愚痴といふ。菩薩は斯る愚痴　徒と共に住んで居る。○世間出世間の慧　世間の慧を有するとは世間一般の風俗習慣學藝等に通達すること、出世間の慧を有するとは佛法に通達することである。此の兩方の慧を有するが故に、世間の人を導いて佛法に入らしむることが出來るのである。○諂僞を行ずることを示して　諂とは凡て正理を枉ぐることをいふのである。僞とは卽ち虛僞である。諂僞を行じて常に相爭ふものが凡夫の常である。菩薩は此の如き徒と共に住んで居る。○善方便をもて諸の經義に隨ひ　菩薩は常に善巧方便を以て佛法を說き、衆生を敎化するのであるが而も其の說

く所は佛の御心と一致し、少しも誤ることは無いのである。經義とは佛經の正しき意義で、卽ち佛の御心の現はれたものをいふのである。○憍慢を行ずることを示して　憍慢にして忍從の念なきものが凡夫の常である。菩薩は此の如き徒と共に住んで厭はぬのである。○猶ほ橋梁の如く　橋梁はいつも人の爲に踏まれながら少しも之を厭ふこと無く、能く人を渡して其の目的の地に達せしむるものである。菩薩の心を用ゆること亦此の如くである。○諸の煩惱を行ずることを示して　煩惱を掃ひ盡さぬうちは皆凡夫である。菩薩はいつも凡夫の中に混じて住んで居る。○心常に清淨たり　既に大乘を學んで大慈悲の心をもてる上は、再び煩惱の爲に亂さるゝ如きことは決して無い。○魔に入ることを示して　惡魔の群に入つて、世間に害を與ふる如く見ゆることもある。○佛智慧に順じて　佛の智慧によつて導かれ、自身も漸く佛と等しき智慧を具せんことを志として居るのである。○他の教に隨はず　佛教が最上のものであることを固く信じて居るから、他の教が如何に多くあつても、心を惹かるゝことは無い。○聲聞に入ることを示して　聲聞は獨り己を潔うして、衆生に救護を與へんとの慈悲心に缺けたものである。菩薩も時として聲聞の群に身を投じ之と行を同じうするが如く見ゆることもある。○未だ聞かざる法を說く　彼が今までに未だ聞かなかつた深遠な法を說いて、彼をして能く之を了悟



理解せしむるのである。○辟支佛　卽ち緣覺である。これも聲聞と同じく慈悲の心の缺けたるものである。○大慈を成就し　一切衆生の苦を以て吾が苦とし、其の苦を拔くことを志とするのが大慈である。○貧窮に入ることを示して　福德無き者と共に住むことをいふのである。○寶手有りて　寶を施すべき力をもつて居ることである。○形殘に入ることを示して　形殘とは不具者のことである。不具者と共に住めば、其の人も不具者であるかの如く外には見ゆるのである。○諸の相好を具して　三十二相八十種好といふが如き微妙端嚴の相を具ふることである。○下賤に入ることを示して　心の下劣なる者と共に住むことをいふのである。○佛の種性の中に生じて　佛の後を繼ぐべき者のことである。羅什は『已に下賤を超出して佛境に入るなり』といつた。○羸劣醜陋に入ることを示して　身體の弱くして姿形の見苦しい者と共に住むことである。○那羅延の身　那羅延とは天上界の力士のことである。其の身體は堅固にして且偉大、その姿は極めて端正である。○老病に入ることを示して　凡ての生ある者は老病死を免れぬのである。菩薩も亦その一人であるかの如く見ゆるのである。○死の畏を超越し　既に正覺を得て有らゆる人生の變化の外に立つて居る以上は、固より死を畏るゝことも無い筈である。○資生有ることを示して　資

生とは生活の爲に或る職業に從事することをいふのである。菩薩にも世間に立ち實際の業務に從事するものがあるのは當然のことである。○實に貪る所無く　世のため人のために力を盡すことが其の志であつて、少しも利益を貪る心はないのである。貧富の變化の絶え間無き世間であるから、それに心を惹かるゝことは無い。○妻妾采女有ることを示して　采女とは卽ち侍女である。多くの婦人にかしづかれて家庭生活をして居ることである。○五欲の淤泥　五體の欲を恣にすれば必ず心が昏むのである。それは宛も淤泥が身を汚すのと同じことである。佛法を學んだ者は皆五欲を制することを知つて居る。○訥鈍を現じて　强ゐて言語を飾ることをせぬから訥辯にして甚だ遲鈍なるが如く見ゆるのである。○辯才を成就し　能く佛の正法を說いて衆生をして之を信奉せしむる力を具へて居ることである。○總持して　衆生を教へて凡ての惡を止め、凡ての善を長ぜしむることをいふのである。○邪濟に入ることを示して　邪濟とは邪道を說いて人に勸むることである。菩薩は時として邪教の徒と共に住むが故に人は之を邪教の徒と同視することもある。○正濟を以て　佛の正法を說いて人に勸むるが故に能く其の惑を除き得るのである。○遍く諸道に入ることを現じて　諸道とは佛教以外の種々なる教義をいふのである。菩薩は諸道をも究むる故に、外から見ると其等を信ずるものゝ如くに見ゆることもある。○其の因緣を斷じ　佛教以外の諸教の世に行はるべき因緣を除き、以て佛の正法の世に弘まるべき途を開くのである。○涅槃を現じて　世間一切の關係を絶ち、寂寞なる境界を獨り樂んで居るやうに見ゆるのである。○生死を斷せず　生死とは屢々いふ如く世間一切の變化のことである。菩薩は變化窮まりなき世間を棄てず、世間の人を教へ導き、此の穢土を化して淨土たらしめんが爲に常に力を盡すのである。

此の一段は所謂和光同塵の德を說くこと甚だ詳密である。內に洪大なる智を懷いて而も之を表はさず、常に世俗の人々の中に混じて懇ろに之を導くは、實に佛菩薩の殊に貴ぶべき所である。此の如くならざれば佛法の弘通は望まれぬのである。孔子は屢々『水なる哉水なる哉』といはれたが、孟子は徐子の問に答へて其の深意の在る所を說明し、

原泉は混々として晝夜を舍てず、科に盈て後に進み、四海に放る。本有るものは是の如し。是を之れ取れるのみ。苟くも本無かりせば、七八月の間雨集り、溝澮皆盈つれども、其の涸るゝや立どころにして待つべし。故に聲聞の情に過ぐるは君子之を恥づ。

といつた。情に過ぐるとは其の實際に過ぐることである。其の聲のみ高くして其の實の之に及ばぬは君子の恥づる所である。菩薩なる者の志も亦此の如くでなければならぬ。勿論吾等の言

語動作は自ら周圍の人々に感化を與ふるものであるから一擧手一投足と雖も之を愼まなければならぬのであるが、其の言を莊にし其の行を飾つて誠實の之に伴はぬのは甚だ恥づべきことである。

併しながら外面を修飾して、人に知られんことを求むるものが凡夫の常であつて、此の病弊を全く脫するためには非常なる努力を要するのである。釋尊は羅睺羅を戒めんが爲に、或時水を澡盤に入れて持ち來らせ、その水を地に覆させて後再びそれを盤に入れよと命ぜられた。羅睺羅が其の不可能なることを答ふるに及んで、釋尊は嚴然として

慚愧無き人は妄語して心を覆へし、道法の入らざること亦是の如し。

と教へられたといふ。器を覆して底の方が上になれば水を入れやうとしても入るべきことは出來ぬ。人を欺かんとする者も亦此の如くである。常に言行を飾つて人を欺く習慣がつくと、凡て眞實なるものを求めんとする念が無くなつてしまふから、智も德も退くのみで少しも進むことは無いのである。併し何事も久しき歲月を經る間には弊の生ずるもので、佛教も亦釋尊を距ること久しきに及べば、專ら形式的のものとなり、其の精神を失ふに至るのである。釋等は豫め之を洞見せられ、屢々嚴重に之を戒められた。有名なる師子身中の蟲の譬の如きも其の一である。佛法は最も勝れたる教へであるから、人々が之を實行して居さへすれば、他より佛法の流布を妨ぐることは出來ぬが、佛法を弘むるものが佛意に背ける行ひをして佛法の衰微を招くことは、死も師子身中の蟲が自ら師子の肉を食むと同樣である。卽ち釋尊の語には（前にも一度引いたが）

師子身中の蟲の自ら師子の肉を食むが如し。外道天魔の能く破壞するに非ず。（梵網經）

とある。又涅槃經の中に末世に於ける僧の墮落せる有樣を豫め洞見せられて、

持律に似像して少かに經典を讀誦し、飮食を貪嗜して其の身を長養せん。……外には賢善を現じ內には貪嫉を懷き……實には沙門に非ずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん。

と仰せられてあるが、いかにも痛切である。誹謗とは言語を以て誹謗することのみをいふのではない。佛の正法に乖違せることを一切誹謗といふのである。佛は自ら絕大の智を具へながら之を內に蘊んで現はさず、常に衆生と共に住み、種々の方便を以て漸々に之を導かれたのである。此の御精神に乖くものは正法を誹謗するものといふべきである。

釋尊は佛陀伽耶の道場に於て正覺を得られた時に、『此の如き深遠なる理を說いても世間の人

は解し得ぬであらう。併しながら世間の人を迷へるまゝに打捨て置くことも出來ぬ。』と種々に思案し苦心せられたといふ。法華經の方便品には其の時のことを記して、

我が所得の法は微妙にして最第一なり。衆生は諸根鈍にして樂に著し痴に盲られたり。斯の如きの等類、云何してか度す可き。

と考へられたとある。如何に說いても到底信ぜられさうもないので、

我寧ろ法を說かずして疾く涅槃にや入りなまし。

とも思はれたが、それでは切角正覺を得られたるかひが無いと思ひ返し、過去の諸佛の如くに吾も亦種々の方便を以て、徐々に世間を教へ導かうと決心せられた。其の時に十方の佛が出現して釋尊を慰諭し、

善い哉釋迦文、第一の導師。是の無上法を得たまへども、諸の一切の佛に隨ひて方便力を用ゐたまふ。

と稱讃せられたとある。釋尊は全く御自身のことを忘れて、一切衆生のためをのみ思はれたので此の決心をせられたのである。卽ち其の大慈悲心が種々の方便となつて現はれたのである。釋尊の說きたまへる所は提婆達多の如くに高遠なこと新奇なことでは無かつたので、釋尊の御弟子の中には却て提婆を以て釋尊よりも勝れりと爲し、提婆の門に奔つたものもあつたが、久しからずして又釋尊の御恩を思ひ出して懷かしさに堪へず、再び釋尊の門に復歸したといふことも傳へられて居る。慈悲の力ほど强いものはない。

外形を整へ言語を飾つて人の心を惹かうとするのは、全く自己を本位とするもので、卽ち慈悲の心の全く缺けたものである。今此の一段に於て維摩詰の說く所は、此の如き輩の爲に最も痛切なる藥石とも稱すべきものである。心は佛道に一致し其の行に非道を現するといふのは專ら衆生を敎化せんとの慈悲心に出るものであつて、名聞を求め勢利を追ふ念が些かもあつては到底出來得ることではない。僧肇が之を評して

能く美惡齊しく觀じ逆を履みて常に順に、光を塵勞に和げて愈々晦くして愈々明なり。斯れ通達無礙平等の佛道と謂ふ可し。

といつたのは尤もである。龍樹は釋尊の御入滅後七百年代の人であるが、其の著『智度論』の中には佛法を弘むる者の犯し易き過を擧げて之を『比丘の五邪命』といひ、嚴しく之を戒めて居る。其の五ヶ條は

一には詐りて異相を現ず。二には自ら功能を說く。三には吉凶を占相す。四には聲を高くし

て威を現ず。五には所得の利を說きて以て人の心を動す。

といふのである。其の一は何か不思議なことをして見せて人の眼を驚かし、之によつて自己の名聲を高めんとすることである。其の二は今までに自己の爲し來つた事蹟を誇大に吹聽して、世間の信用を博せんと謀ることである。其の三は妄りに吉凶祝福を說き、方位とか人相とかいふ類の事を以て世を惑はすことである。其の四は外面を粉飾し威嚴を整へて、宛かも高德の人であるかの如くに裝ふことである。其の五は信心をする者は斯く斯くの利益があると說き立て、利を以て人を誘ふことである。此等は何れも佛の正法を弘むるに害を爲すものであるが、末世の佛法には此等の箇條が盡く具はつて居るやうに思はれる。要するに名聞の念のみが增長し、慈悲の心の全く缺けたる者の爲す所は同じ所に歸着するのであらう。維摩詰の『非道を行ずる』の說は現時の宗教家の潛心精讀しなければならぬものである。

但し其の列擧せられたる所の中には、あまりに極端に過ぐるかの如く感ぜらるゝものが無くもないが、要するに佛の御精神に背ける佛法の世に行はるゝに至らんことを憂ふるの念の極めて切なるが爲と見るべきであらう。形を整へ表を飾つて心の之に伴はぬものは世を害することは極めて大きい。牆を越え屋を穿つて貨財を盜む者は盜賊として罰せられ、道を說き敎へを弘めつゝ利を竊み名を竊むものは、刑罰に觸るゝこと無くして濟むけれども、實は通常の盜賊以上の大盜であつて、其の罪は極めて重いのである。此の如き弊を矯めんが爲に、古來より隨分極端なことも說かれて居る。例へば老子の中には

聖を絕ち智を棄れば民の利百倍す。仁を絕ち義を棄れば民孝慈に復す。巧を絕ち利を棄れば盜賊有ること無し。

とある。聖と智が民に害のある筈は無いが、聖を裝ひ智を弄ぶ者の民を害することの甚しきを戒むるのである。仁義は固より貴いものであるが、仁義を表に飾つて私利を營む者が多くなれば、民心漸く輕浮に趣き孝慈の風は廢れはつるのである。また

古の善く道を爲す者は以て民を明にせんとするに非ず、將に以て之を愚にせんとするなり。民の治め難きは其の智多きを以てなり。故に智を以て國を治むるは國の賊なり。

とあるが、智よりも愚が勝るといふ道理はない。併し智を重んずるの弊は小智小才を弄して正道を輕んずるに至るが故に嚴しく之を戒むるのである。而して

大直は屈するが若く、大巧は拙なるが若く、大辯は訥なるが若し。躁は寒に勝ち、靜は熱に勝ち、淸靜は天下の正たり。

といふに至つては大に味ふべきである。近頃になつて吾が國に於ても信仰の必要といふことを說く人が漸く多くなり、佛教も漸く勢力を回復しやうとする兆候が見ゆるやうであるが、此の機運に乘じて大に活動し、大に佛教の勢力を張らうと企つる人のみ多く出て、維摩詰の所謂非道を行ずる心得が足らぬならば、眞の佛法の弘通は望まれまいと思ふ。互ひに深く反省しなければならぬことである。

於レ是維摩詰問二文殊師利一。何等爲二如來種一。文殊師利言。有身爲レ種。無明有愛爲レ種。貪恚癡爲レ種。四顚倒爲レ種。五蓋爲レ種。六入爲レ種。七識處爲レ種。八邪法爲レ種。九惱處爲レ種。十不善道爲レ種。以レ要言レ之。六十二見及一切煩惱。皆是佛種。曰。何謂也。答曰。若見二無爲一入二正位一者。不レ能二復發一阿耨多羅三藐三菩提心一。譬如二高原陸地一不レ生二蓮華一。卑濕淤泥乃生二此華一。如レ是見二無爲法一入二正位一者。終不レ復能生二於佛法一。煩惱泥中乃有二衆生一。起二佛法一耳。又如下殖二種於空一。終不レ得レ生。糞壤之地乃能滋茂上。如レ是入二無爲正位一者。不レ生二佛法一。起二於我見一如二須彌山一。猶能發二于阿耨多羅三藐三菩提心一。生二佛法一矣。是故當レ知一切煩惱爲二如來種一。譬如下根敗之士。其於二五欲一不レ能二復利一。如レ是聲聞諸結斷者。於二佛法中一無所二復益一。永不二志願一。是故文殊師利。凡夫於二佛法一有二反覆一。而聲聞無也。所以者何。凡夫聞二佛法一。能起二無上道心一。不レ斷二三寶一。正使二聲聞終レ身聞二佛法力一無畏等一。永不レ能レ發二無上道意一。

（是に於て維摩詰、文殊師利に問ふ、何等をか如來の種と爲すと。文殊師利言く、有身を種と爲し、無明有愛を種と爲し、貪恚痴を種と爲し、四顚倒を種と爲し、五蓋を種と爲し、六入を種と爲し、七識處を種と爲し、八邪法を種と爲し、九惱處を種と爲し、十不善道を種と爲す。要を以て之を言へば、六十二見、及び一切の煩惱皆是れ佛種なりと。曰く、何の謂ぞやと。答へて曰く、若し無爲を見て正位に入る者は復た阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと能はず、譬へば高原の陸地に蓮華を生せず、卑濕の淤泥に乃ち此の華を生ずるが如し。是の如く無爲の法を見て正位に入る者は、終に復た佛法を生せず。煩惱の泥中に乃ち衆生有りて佛法

を起すのみ。又種を空に殖ゆれば終に生ずることを得ず、糞壤の地に乃ち能く滋茂するが如し。是の如く無爲の正位に入る者は佛法を生せず、我見を起すこと須彌山の如くなるものは猶ほ能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して佛法を生ず。是故に當に知るべし、一切の煩惱を如來の種と爲すことを。譬へば巨海に下らざれば無價の寶珠を得ること能はざるが如し。是の如く煩惱の大海に入らざれば則ち一切智の寶を得ること能はずと。爾の時に大迦葉歎じて言く、善い哉善い哉、文殊師利、快く此の語を說く。誠に言ふ所の如し。塵勞の疇は如來の種たり、我等今は復た阿耨多羅三藐三菩提心を發すに堪任せず。乃至五無間の罪、猶ほ能く意を發して佛法を生ず。而るに今我等永く發すこと能はず。譬へば根敗の士の其れ五欲に於て復た利すること能はざるが如し。是の如く聲聞にして諸結斷せる者は佛法の中に於て復た益する所無し、永く志願せず。是故に文珠師利、凡夫は佛法に於て反覆する有り、而も聲聞は無なり。所以は何。凡夫は佛法を聞きて能く無上道心を起し、三寶を斷せず。正に聲聞をして身を終るまで佛法の力無畏等を聞かしむるも、永く無上道意を發すこと能はずと。）

前段に於ける維摩詰の說によつて、菩薩が一切衆生を導くために如何に力を盡すかを知ることが出來る。併しながら前にも屢々いつた通り、如何に佛菩薩の力でも無より有を生ずることは出來ぬ。煩惱に役せられて居る凡夫の身に佛と成るべき本性が具はつて居ればこそ、佛菩薩の努力も無にならぬわけである。因て此よりは凡夫の身に『如來の種』の具足せることを明かにするのである。前には文殊が問うて維摩が答へ、今度は維摩が問うて文殊が答へるのであるが、是れ皆多くの聽聞者を啓發せんが爲に外ならぬ。卽ち此等の問答は二大菩薩の慈悲心の現はれたものと見るべきである。羅什は前段と此より後の文殊の所說との關係を說明して、

上に大士類に隨ひて物を化し佛道に通達すといふに因りて、固に知んぬ積惡の衆生も能く道心を發すべきことを。能く道心を發すは則ち是れ佛道の因緣なり。故に佛種を問ふなり。

といつたが誠に能く其の意を悉して居る。文殊は維摩の問に答へて『一切の煩惱皆是れ佛種なり』と斷言し、更に其の意を敷衍して說くのであるが、迷うて苦み、苦んで其の苦みを脫せんことを求め其の求むることが切であれば必ず得らるゝのである。

但し同じく佛法を學んでも、たゞ小乘を學び得たるのみでそれに滿足し、更に進んで大乘を學ばうといふ志の無い者は、前にも屢々說かれてある通り、一切衆生の惱めるを救はうといふ念の乏しいもの、卽ち慈悲の心の缺けたる者であるから、決して佛の境界に到達すべき見込み

はないので、『身を終るまで佛法の力無畏等を聞かしむるも、永く無上道意を發すこと能はず』と斷ぜられたのである。寶童子經には『修行する菩薩には三種の實語有り』といふことが說いてある。實語とは卽ち言行一致のことである。菩薩道を行ずるものは勿論言行一致でなければならぬのであるが、其の要點は三つであるとて、

一には諸佛如來を誑かざるなり。二には衆生を誑かざるなり。三には自身を誑かざるなり。

とある。諸佛如來を誑かぬといふは、卽ち佛の恩を忘れず、佛の御心を以て吾が心と爲し、佛法の弘通に力を用ゆることである。佛に對して合掌禮拜しながら佛の御心に違戻するのは卽ち佛を欺くことになるのであるから固く之を戒めなければならぬ筈である。さて諸佛如來を誑かぬ爲には特に四事を心得なければならぬ。其の四事とは、

一には堅固心。二には威力心。三には勢力心。四には持戒精進。

である。堅固心とは佛の教へを信じて、今より後決して退轉しまいと固く心に誓ふことである。次に威力心とは佛の御力によつて自身も有らゆる邪說を碎破し、正法を世に弘めんと決心することである。次に勢力心とは必ず佛の化導を贊けて多くの人を勸め、佛法に歸依せしむるやうに努めやうと決心することである。終りに持戒精進とは、自分で實行し得ぬことを人に勸むることは出來ぬから、自ら一心に佛の淨戒を持して違ふまいと誓ふのである。此の如くであれば必ず佛の御心に一致し得るに違ひない。

次に衆生を誑かぬといふは、吾が心に思はぬことは誓つて人に向つて說かぬのである。唯だ辯舌を巧にして教へを說いても、心が之に伴はなければ眞に恥づべきことである。孔子の言にも

道に聽きて塗に說くは德をこれ棄つるなり。

とあるが、眞に道を弘めんとするものは、必ず言行一致を期せなければならぬ。之に就てまた根本となるべき四事が擧げてある。それは

一には堅牢に修學す。二には慈心樂を與ふ。三には悲心苦を愍む。四には衆生を攝取す。

といふのである。先づ第一に自身が多くの人の前に立つて教へを說く身となつても、之を以て自ら足れりとしてはならぬ。佛の境界に到達するまでは修學を怠つてはならぬのである。自らも勤め人をも導くことが眞の菩薩の道である。第二と第三とは慈心と悲心を常に失はぬことである。慈心があれば必ず多くの人の心を平和安樂ならしむることが出來る。悲心があれば一切の人の苦を愍んで、其の苦の中から拔濟してやることが出來る。是れが卽ち佛の化導を贊くる

所以である。第四に衆生を攝取するとあるは一切衆生を導いて、共に佛法の中へ歸入せしむることである。無論衆生といふ中には善人も惡人も、智者も愚者も皆含まれて居るのである、惡人を憎んだり愚者を輕んじたりする心をもつ人が、世間に立つて佛法を說くのは佛の御心に叶はぬことである。又聽く人を欺くことである。

次に自身を誑かぬといふは自身の心に問うて見て少しも耻かしからぬ行ひをして居ることである。吾等の心にいかに多くの煩惱が充ち塞がつて居ても、其の奥にはたとへ微かながらも佛性が潛在して居る。吾等がたとへ一時は世を欺き人を欺いて小さき自己の欲望を遂げやうとしても、心の奥には必ず之を咎むる聲がするのである。獨逸の哲人カントが

吾等をしていつも肅然たらしむるものは、晴れ渡つたる空の星影と吾等の心の中の聲である。

といつたのは何人も思ひ當るべきことである。さて經文には自己を誑かざるに就て根本的の心得を四項に分けて擧げてあるが、その四項とは

一には堅固心。二には重複堅固心。三には無諂惑心。四には無誑心。

である。先づ堅固心とは佛の教へを固く持つて背くまいと自ら心に誓ふことである。第二に重複堅固心とあるのは特に深く味ふべき所である。如何に堅固であるつもりでも、吾等の心は兎角緩み易いのである。されば常に自ら顧み自ら戒めて、堅固なる上にも更に堅固ならんことを期せなければならぬのである。第三には諂惑無き心といふのであるが、諂とは恣に正理を枉げて、物事を自分に都合のよいやうに解釋することである。斯る習はしがつくと次第に智も昏み心も亂れて、所謂『其の日暮し』の生活を續くるより外はないやうになる。譬へば鐵から生じたる錆が鐵を腐らせて、全く役に立たぬものにしてしまふのと同樣である。自分の爲と思つたのが結局自分を亡ぼすやうになる。之を戒むることは特に肝要である。第四に無誑心とは自ら欺き他を欺くの大罪なることを常に深く心に銘して居ることである。

眞に菩薩道を實行せんとするものは誰も皆此の如く堅固なる心をもち、此の如くに高き理想をもつて居なければならぬのである。聲聞緣覺の如き境界を以て自ら足れりとするものは眞の佛弟子とはいはれぬ。釋尊は苟くも佛法を學ぶ者は皆大乘を學び、皆共に菩薩道を行ずべきことを期せられたるが故に。

但だ一乘の道を以て諸の菩薩を敎化して、聲聞の弟子無し。（法華經方便品）

と仰せられたのである。此の點に深く意を留めなければならぬ。

○有身　有とは差別のことである。利害得失を別ち　愛憎を別ち親疎を別ち、たゞ己に利なら

んことをのみ求むるものが凡夫であるから、凡夫の身を有身といふのである。○無明有愛　凡夫の特色として最も著しいのは此の二つである。無明とは卽ち惑である、一切の事物に就て正しき判斷の出來ぬことである。有愛とは妄りに愛憎の別を立て、之に執著して離るゝことの出來ぬことである。○四顚倒　凡夫は無常なる世間を常住なるものとして賴み、苦に充ちたる世間に於て樂を求め、變轉して少しも賴りにならぬ自己に執著し、不淨なる生活を淸淨なるものゝ如くに考へて居る。卽ち凡夫の考へて居る常樂我淨の四事は皆迷妄であるが故に之を四倒といふのである。○五蓋　前の佛國品に出て居るが、要するに吾等の心を昏まし、明かなる分別を遮る所の五種の惑である。○六入　色聲香味觸法の六をいふので、此の六によつて吾等の心が常に擾されて居るのである。○七識處　欲界と色界と無色界とを併せて三界といふことは前にいつたのであるが、其の欲界と色界とに於ける心の持ち方を七段に分けて七識といふのである。其の最下のものと最上のものとの間には非常なる差違があるけれども、何れも佛の正法に歸依しなければ眞の覺を得、眞の樂を得ることは出來ぬものである。○八邪法　前に擧げたる八正道に背ける心を八邪法といふのである。○九惱處　凡夫は吾が爲の善知識を惡み、吾が爲に累となるものを愛し、吾自ら吾が身を惱ますのである。此の三事が過去現在未來の三時に亙つて絶えず繰返さるゝ故に之を併せて九惱處といふのである。○六十二見　前に弟子品に出て居るが、要するに佛教の興る以前に勢力を得て居る婆羅門各派の說ける人生觀を概括して六十二としたもので、何れも一方に偏して中正を得ぬ考へ方である。○一切の煩惱皆是れ佛種　煩惱を起す心の中から佛智を成ぜんことを求むる心が生じ來るのである。僧肇は『塵勞の衆生卽ち佛道を成ず。更に異人の成佛なし、故に是れ佛種なり』といつた。○無爲を見て正位に入る者　正位とは聖者の地位である、聲聞緣覺菩薩佛等を盡く正位といふのである。無爲とは小き自己の利害得失等の觀念を一切離れ盡したことである。それは勿論貴いことには違ひないが、世間には煩惱の爲に役せらるゝ衆生の夥しく存在することを考へなければならぬ。苟くも其等を哀愍する念があるならば、自分だけ悟つたからとて滿足して居られやう筈はない。若し無爲の貴ぶべきことのみを知り、世俗を超越することのみを以て足れりとする者は、所謂小乘の徒たるに止まるのである。○復た阿耨多羅三藐三菩提心を發すこと能はず　此處に『復た』とあるのに注意すべきである。獨り世俗を超越したのに滿足してしまへば、それより以上更に奮發して菩薩道を勵み佛智を成就しやうといふ念が起らぬのである。○佛法を起すのみ　煩惱に役せられて心中に少しの平和もなく生きて居ることの苦痛を充分知つて居る者は、此の苦痛を脫するの

ことの熱望も非常に強いから、誠心を以て佛法を信ずる。それが佛法流布の機運を生むのである。○種を空に殖ゆれば　唯だ煩惱を脫し得たる境界のみに眼をつけて、衆生の實際の生活狀態に疎いものは決して眞の佛法を世に弘むることは出來ぬ。○塵勞の疇　卽ち凡夫のことである。凡夫にして眞に凡夫生活の苦を痛感したるものが佛道に入るのである。○今我等　小乘を學んで覺を得、世間の重んずる所となつて居る者は、更に進んで大乘を學ばうとの奮發心を起すことが極めて困難である。○根敗の士　五根の何れか用を爲さぬやうになつた者、例へば盲者とか聾者とかのことである。○利すること能はざる　欲を滿足させることが出來ぬのである例へば盲者は見んとしても見得ぬが如きをいふのである。○諸結斷せる者　結とは煩惱のことである。聲聞は一切の煩惱を斷じ盡せる者である。○反復する有り　反復とは佛恩に報ずることをいふのである。一切衆生を救護するために力を盡すのが卽ち佛恩に報ずる唯一の道である。○無上道心　無上道とは卽ち佛道である。佛と成つて一切衆生を救ひたいといふ念が卽ち無上道心である。○三寶を斷せず　佛道を行せんことを志とする者が世に斷えぬ限り、三寶は永く榮ゆるのである。

此の一段に於ける文殊師利の所說は煩惱卽菩提の深義を明かにし、佛敎は消極的の敎へであるといふやうな誤解を一掃するに充分なる力がある。煩惱に役せられて動く者が卽ち凡夫であることはいふまでも無いが、菩提とは智度論に

菩提とは諸佛の道に名く。

とあり、大乘義章に

菩提とは胡語なり、此に翻して道と名く。果德圓通せる之を名けて道と爲す。

とあるによつて知らるゝ通り、眞の菩提を得たる者は卽ち佛である。然るに天台大師の法華玄義には

生死卽涅槃と體するを名けて定を爲し、煩惱卽菩提と達するを名けて慧と爲す。

とある。前にも度々いつたことであるが卽とは『離れぬ』といふ意である。生死とは人生に於ける有らゆる離合變化の絕え間なき世間に處し、多くの人に接し多くの事を閱して、而も之が爲に心を擾されず、此の中に在つて眞の覺を得たるものをこそ眞の禪定を得たる者といふべきである。又凡夫の身は煩惱に充ちたるものであるが、其の心が一轉すれば卽ち菩提に向ふのであつて、此の身より外に佛身が存在すると思つてはならぬのである。誰も現在に滿足して居るものは無い、而も皆滿足を求めて居る。唯だ其の滿足

を外界に求むるものが多いから、種々の累ひが起るのである。又誰もたゞ一人で住んで居るのを好むものは無い、人は皆社會性をもつて居て、多くの人と共に住むのを好むのが其の本來有する所の天性である。唯だ多くの人と共に住み、多くの人を利用して吾一人の滿足を得やうと企てるものが多いから爭鬪の絶え間が無いのである。さりながら兎も角も『現在に滿足せぬこと』とは吾等人類の向上發展して行く根本の力ともいふべきものである。若し多くの人と共に住み、多くの人をして苦を除き樂を增さしめるために、吾が身心一切の力が役に立つことを何より大なる悅びとするならば、それは卽ち佛菩薩の心である。煩惱を起す心の方向を一轉すれば、卽ち佛菩薩の心となるのである。佛は常に此の事を吾等に教へて居らるゝのであるから、佛の說法は『轉迷開悟』のためといはるゝのである。迷へる心を一轉して悟りを開かしむるのである。煩惱を起す所の心が卽ち菩提を成ずる所の心である。天台は此の事を徹底的に知るのが眞の智慧であるといつたが、眞の智慧とは卽ち佛智に外ならぬ。

一切の煩惱を掃ひ去れば、如何なる境遇に在つても何等の累ひを受けぬから誠に結構であるが、自ら多くの累ひを離れ盡したる悅びを感ずると共に、斯る悅びを味ひ得ぬ者に對して深き哀愍の情を生じなければならぬ。雜譬喩經の中に出て居る物語りであるが、或る國王が位を棄て出家し、山中に茅屋を構へて住み、獨り志を得たりとして『樂しい哉』と大笑した。之を聞いた人が『王宮の榮華の生活を棄て斯る貧しい生活に入つて何の樂しみがあるか』と問うた時に王は之に答へて、

我王たりし時憂念する所多かりき。或は隣王の我が國を奪はんことを恐れ、或は人の我が財物を劫取せんことを恐れ、或は人の爲に貪利せられんことを恐れ、又常に臣下の我が財寶を利せんとして反逆時無からんことを畏れたり。今我沙門と作りて、人の我を貪利する者なし。快いふべからず。

といつたとある。是れは如何にも尤もなことであるが、若し此の王が更に一歩を進めて、多くの國民に斯る樂みを樂みとすべきことを敎へんが爲に力を盡すやうになれば眞に佛法を學んだかひがあるのである。若し斯る慈悲の念が無くて、唯だ世の累ひを脫し得たるを以て自ら足れりとするならば、文殊や維摩の呵責を免れ得ぬものである。德川氏の初期に觀世黑雪といふ能樂の名人が居たが、其の至藝を慕つて門人となる者が非常に多かつた。此の黑雪が或る人と門人の敎育法に就て種々語りあつて居た時に『聲の好い者は大概見込みがない』といつた。聞い

た人が不思議に思つて其の理由を尋ねたところが黒雪は之に答へて『何事でも大に苦しまなければ大成するものではない。天性美聲の者は多く其の聲の好いのを恃んで、謠ひ方に就ての苦心が足らぬから大成せずして終るのである』といつたと傳へられて居るが、これは大に味ふべき話である。彼の聲聞緣覺の地位に甘んじて自ら足れりとする者も亦此の類であらう。實際大に苦しまずして大成するものは無い。

『種を空中に殖ゆるも終に生ずることを得ず、糞壤の地に乃ち能く滋茂す』といふ文殊の語に思ひ合せて、釋尊が『末法の世に至つて大乘が必ず流布する』といふことを豫言せられた深意が能く分るやうに思はれる。古歌に

みどりなる一つ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける

といふのがある。春の始めに芽を出した時に見ると、何れの草の葉も皆同樣に綠であつて、殆んど見分けはつかぬ。併し秋になつて見ると皆それぞれの花を咲かせて居る。萩も桔梗も皆美しく咲くが、中には美しい花を咲かすことの出來ぬ草もある。世の中のことも亦其の通りである。世間が平穩無事であれば善人も其の力を充分に發揮する機會が無く、惡人も其の惡を恣にすることが無くして終るのであるが、末世に及んで世間が非常に複雜になると人々の我執が著しく募つて來る。譬へば電車に乘るのでも、日中の比較的乘客の少い時には、老人や小兒を先に乘せてやつて、自分は後から乘るぐらゐの心得は誰も持つて居るが、朝夕の大混雜の時刻になると、老人や小兒は突き除けて、自分だけ急いで乘る者が多い。さういふ亂暴なことをしても互ひに怪まぬほどに人々の心がイラ〳〵として居るのである。末法の世に入つては一般の人情が斯ういふ風になつて來て、互ひに遠慮もなく其の欲望を遂げんとするのであるから、自然互ひに相背き相離れて行き、互ひに不滿足の日を送らなければならぬのである。不滿足であるから一層苛立つて一層烈しく衝突する。隨て一層其の不滿足の念が增す。それは宛も游泳の術を知らぬ者が水の中へ落ちた時に、慌てゝ手足を動かすので、益々深みへ落ちて行くのと同じことである。

此の如くに淺ましい世相が現はれ來つた時が、卽ち佛の正法の世間に流布すべき機運の動き來る時なのである。實際いかなる事でも多くの苦を經ずして大成するものは無い。易の繫辭傳の中に、

日往けば月來り、月往けば日來る。日月相推して明生ず。寒往けば暑來り、暑往けば寒來る。寒暑相推して歲成る。往くとは屈するなり、來るとは信るなり。屈信相感じて利生ず。

とあつて、更に之を承けて

尺蠖の屈するは以て信びんことを求むるなり。龍蛇の蟄するは以て身を存するなり。精義神に入るは以て用を致すなり。

とあるは大に味ふべき言である。大に屈するによつて大に伸び、其の伸ぶる時の力は屈せざる前に倍するのである。能く此の理を明かにするものが卽ち『精義神に入るもの』であつて、末法の世に此の如き人の出ることに依つて、正法の弘通といふ大作用が行はるゝのである。末法の世に入つて人々の苦悶は其の極に達するのであるが、世間が唯だ苦しんで居る人のみで充されて居るわけでは無い。如何にして此の苦しみの中を脫出すべきかに就て深く考ふる人も亦出現するのである。此の如き人が最初から多數あるわけではないがこれは新しい機運を作る人であるから非常に貴い人である。此の眞摯なる要求を充すべきものが卽ち大乘佛教であるといふことは、吾等の憶斷ではなく、佛の豫め考へられた所である。(此の事に就ては前にも屢々いつた。)世間が多事になれば人々の考へが次第に尖銳的になり、何事に就ても鋭い批判を加へるやうになるから、唯だ善を勸め惡を斥くるといふやうな單純な教へでは誰も相手にしないのである。人生の眞の意義を明かにし、社會の有らゆる面倒なる問題を解決すべき力を與ふるだけの實質を具へた教へでなければ人々の心を惹き着くることが出來ぬ。漢の虞詡の言に

盤根錯節に遇はずんば何を以て利器を別たんや。

とあるが、正しく其の通りである。末法の世は正しく種々なる宗教の比較せられ批判せらるべき時である。

貴い教へに依つて此の苦しみの中を脫出せんとする人の要求は極めて眞劍なものであるから、最初はたとへ少數であつても、次第に大なる力を作り、世間を動すやうになるのである。遺教經に

譬へば小水常に流るゝときは則ち能く石を穿つが如し。

とあるは最も適切である。吾が國でも以前には、先祖代々淨土宗であるから南無阿彌陀佛と唱ふるのであるとか代々法華宗であるから南無妙法蓮華經と唱ふるのであるとかいふのみで、其の唱名や題目の意味を辨へぬ人が多かつたのであるが、眞に其の心の底に『何とかして自分も此の苦悶の中を脫し、世間の多くの人々をも苦悶の中を脫せしめたい』といふ眞摯なる要求をもつて教へを求むる人は、一切の行き懸りを離れて、偏へに眞實なるものを求むるのであるから、其の要求を充すべきものが捉へられた時には、必ずや其の周圍の人々をも勸めて、同じ道

に入らしめんと努力するにちがひ無い。正しき佛法の流布は斯る人々の力によつて其の端を開くのである。

されば末法の世に生れ合せたことは吾等の大なる悦びでなければならぬ。吾等は種々なる難問題に出逢つて、種々の累ひを受くるのであるが、此處に新なる機運が動いて來ることを知つて、吾等の前途に大なる光明を認むるに於ては、眼前の困難は物の數でない。日蓮上人は末法の世に出て有らゆる艱苦を冒し、法華經を弘むることを何よりも大なる悦びとして

此の功德は傳教天台にも超え、龍樹迦葉にもすぐれたり。

といひ、なほ其の後を承けて

極樂百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず、時の然らしむるのみ。春は花さき秋は果なる、夏はあたゝかに冬は冷たし。時の然らしむるにあらずや。（報恩鈔）

といつたが、吾等は皆此の心を以て吾等の心とすべきである。末法の世相の最も險惡なる時に生れ、正しき佛法を弘めて暗黑なる世の中に大なる光明を投ずべきために力を盡すことは佛弟子たる者の最大の悦びでなければならぬ。眞に佛法を信ずるものは斯る大勇猛心を有する者である。

是の如きの人は諸佛の歎めたまふ所なり。是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり。（法華經寶塔品）

とあるのは卽ち此の事である。佛教を評して消極的のものであるとか、厭世的のものであるとかいふのは、佛教の眞の精神を全く辨へぬ者の妄評である。

又此の迦葉の言に『凡夫は佛法に於て反覆する有り、而も聲聞は無なり』とあるは特に注意すべきである。反覆とは佛の御恩に報ずることである。報恩の大切なことに就ては今迄にも度々いつたが、釋尊は諸弟子に敎へて、

若し衆生ありて反復することを知らば、此の人敬ふべし。小恩すらなほ忘れず、何に況んや大恩をや。設ひ此の間を離るゝこと百千由旬なるも、我に近づけると異らずして、我常に歎譽す。若し衆生ありて反復することを知らざれば、大恩すらなほ憶はず、何に況んや小恩を人猶ほ遠きが如し。（增一阿含經）

と仰せられた。一切衆生を救護せんが爲に世に出て、有らゆる艱苦を冒して法を說きたまへる

佛の恩の廣大無邊なるは今更いふにも及ばぬことであるが、恩を知つて其の恩に報ずることを知らなければ、恩を知らぬと同樣である。前に引いた智度論の文に、恩を知ることを稱して大悲の本なり。善業を開くの初門なり。とあるも、要するに恩を知ることが恩に報ずるための大なる活動を生み出すからである。然らば恩に報ずるためには如何なる事をすべきであるかといへば、吾等の分際として直接佛に其の恩を報ずることの出來やうわけは無い。又佛も直接の報恩などを望まるゝことは決して無い。唯だ佛法を世に弘めて、一切衆生をして共に佛恩に浴せしむるやうに努むることが、卽ち佛恩に報ずる唯一の方法である。此より外に斷じて報恩の道は無いのである。

佛の御德は洪大なものであるが、其の御德の洪大なること、其の一切衆生を救護せんが爲に常に心を勞せらるゝことを知らずして種々の迫害を加へ、種々の凌辱を加ふるものもあつた。提婆達多や阿闍世王の迫害は前にも度々いつたが、其の外にも例へば旃遮婆羅門の女の爲に大衆の前に於て誘られたとか、毗蘭邑に於て馬に與ふる麥を食して九十日を過されたとか、或は終日婆羅門の聚落に入つて乞食しても全く得る所無く、鉢を空しうして歸られたとか、數へ盡せぬほどの困苦を嘗められたのである。此の如き有樣であるから、佛法が普く世間に流布するに至るまでには實に夥しい勞苦を積み、又餘程長い歲月を重ねなければならぬのである。それ故に佛は入滅の際に於て、諸弟子が心を一にし力を協せて佛法を世に弘むることに努むべきことを命せられ、前にも引いた通り

我が滅後諸〻の弟子相傳へて自利利人の法を行ずれば、如來の法身は常に在りて滅せざるなり。（遺教經）

と仰せられたのである。されば報恩の道は自ら深く佛法を信じ、又佛法を世に弘むることに全力を注ぐより外には無い筈である。大方便佛報恩經の中に

恩を知る者は當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。恩を報ずる者も亦當に一切衆生を教へて阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべし。

とあるは卽ち此の意である。然るに小乘を學んで覺を得、世間の有らゆる煩累を脫して獨り平和なる每日を送り得るやうになつたのに滿足して、一切衆生を救護するといふ大事を忘れて居るのは忘恩の甚しさものである。佛の教へを受けながら佛の御心に背くといふのは先づ第一に大なる罪である。又其の修行を重ねる間、自ら耕さずして食し、自ら織らずして着、無事に身を保ち得たことは卽ち一切衆生の恩ではないか。其の恩を受けて其の恩に報せざるは、不都合千

萬なことである。此處で文殊と迦葉との語つたことは、苟くも佛法を學ぶ者の共に深く考量しなければならぬ事である。

爾時會中有菩薩。名普現色身。問維摩詰言。居士。父母妻子。親戚眷屬。吏民知識。悉爲是誰。奴婢僮僕。象馬車乘。皆何所在。於是維摩詰以偈答曰。

智度菩薩母。方便以爲父。一切衆導師。無不由是生。法喜以爲妻。慈悲心爲女。善心誠實男。畢竟空寂舍。弟子衆塵勞。隨意之所轉。道品善知識。由是成正覺。諸度法等侶。四攝爲伎女。歌詠誦法言。以此爲音樂。總持之園苑。無漏法林樹。覺意淨妙華。解脫智慧果。八解之浴池。定水湛然滿。布以七淨華。浴此無垢人。象馬五通馳。大乘以爲車。調御以一心。遊於八正路。相具以嚴容。衆好飾其姿。慚愧之上服。深心爲華鬘。富有七財寶。教授以滋息。如所說修行。廻向爲大利。四禪爲牀座。從於淨命生。多聞增智慧。以爲自覺音。甘露法之食。解脫味爲漿。淨心以澡浴。戒品爲塗香。摧滅煩惱賊。勇健無能踰。降伏四種魔。勝幡建道場。雖知無起滅。示彼故有生。悉現諸國土。如日無不見。供養於十方。無量億如來。諸佛及己身。無有分別想。雖知諸佛國。及與衆生空。而常修淨土。教化於群生。諸有衆生類。形聲及威儀。無畏力菩薩。一時能盡現。覺知衆魔事。而示隨其行。以善方便智。隨意皆能現。或示老病死。成就諸群生。了知如幻化。通達無有礙。或現劫盡燒。天地皆洞然。衆人有常想。照令知無常。無數億衆生。俱來請菩薩。一時到其舍。化令向佛道。經書禁呪術。工巧諸伎藝。盡現行此事。饒益諸群生。世間衆道法。悉於中出家。因以解人惑。而不墮邪見。或作日月天。梵王世界主。或時作地水。或復作風火。劫中有疾疫。現作諸藥草。若有服之者。除病消衆毒。劫中有飢饉。現身作飲食。先救彼飢渴。却以法語人。劫中有刀兵。爲之起慈心。化彼諸衆生。令住無諍地。若有大戰陣。立之以等力。菩薩現威勢。降伏使和安。一切國土中。諸有地獄處。輒往到于彼。勉濟其苦惱。一切國土中。畜生相食噉。皆現生於彼。爲之作利益。示受於五欲。亦復現行禪。令魔心憒亂。不能得其便。火中生蓮華。是可謂希有。在欲而行禪。希有亦如是。或現作婬女。引諸好色者。先以欲鉤牽。後令入佛道。或爲邑中主。或作商人導。國師及大臣。以祐利衆生。

諸有貧窮者。現作無盡藏。因以勸導之。令發菩提心。我心驕慢者。爲現大力士。消伏諸貢高。令住無上道。其有恐懼衆。居前而慰安。先施以無畏。後令發道心。或現離婬欲。爲五通仙人。開導諸群生。令住戒忍慈。見須供事者。現爲作僮僕。既悅可其意。乃發以道心。隨彼之所須。得入於佛道。以善方便力。皆能給足之。如是道無量。所行無有涯。智慧無邊際。度脫無數衆。假令一切佛。於無量億劫。讃歎其功德。猶尚不能盡。誰聞如是法。不發菩提心。除彼不肖人癡冥無智者。

（爾の時に會中に菩薩有り、普現色身と名く。維摩詰に問ひて言く、居士、父母妻子、親戚眷屬、吏民知識、悉く是れ誰とか爲す。奴婢僮僕、象馬車乘皆何れの所にか在ると。是に於て維摩詰偈を以て答へて曰く

智度は菩薩の母なり、方便を以て父と爲す。一切衆の導師是に由りて生せざる無し。法喜を以て妻と爲し、慈悲心を女と爲す。善心誠實なるは男、畢竟空寂なるは舍なり。弟子の衆は塵勞なり、意の所轉に隨ふ。道品は善知識なり、是に由りて正覺を成す。諸度は法の等侶なり、四攝を伎女と爲す、歌詠法言を誦し、此を以て音樂と爲す。總持の園苑に無漏法の林樹あり。覺意淨妙の華、解脫智慧の果あり。八解の浴池に定水湛然として滿てり。布くに七淨華を以てし、浴するは此れ無垢の人なり。象馬の五通馳せ、大乘を以て車と爲す。調御するに一心を以てし、八正の路に遊ぶ。相具以て容を嚴り、衆好其の姿を飾る。慚愧の上服、深心を華鬘と爲す。富は七財の寶有り、教授して以て滋息し、所說の如く修行し、廻向するを大利と爲す。四禪を牀座と爲し、淨命より生ず。多聞にして智慧を增し、以て自覺の音を爲す。甘露法の食、解脫味を漿と爲す。淨心以て澡浴し、戒品を塗香と爲す。煩惱の賊を摧滅し、勇健なること能く踰ゆるもの無し。四種の魔を降伏して勝幡道場に建つ。起滅無きことを知ると雖も、彼に示すが故に生有り。悉く諸の國土に現じ、日の見ざるもの無きが如し。十方の無量億の如來を供養し、諸佛及び己身に分別の想有ること無し。諸佛の國及び衆生の空なることを知ると雖も、而も淨土を修して群生を教化す。諸有の群生類の形聲及び威儀を、無畏力の菩薩は一時に能く盡く現ず。衆魔の事を覺知して而も其の行に隨ふことを示す。善方便智を以て意に隨ひて皆能く現ず。或は老病死を示して諸の群生を成就す。幻化の如くなることを了知して、通達して礙有ること無し。或は劫の盡く燒くることを現じて

天地皆洞然たり。衆人に常想有るを、照して無常を知らしむ。無數億の衆生倶に來りて菩薩を請ずれば、一時に其の舍に到りて、化して佛道に向はしむ。經書禁呪術、工巧諸の伎藝、盡く此の事を行ずることを現じて諸の群生を饒益す。世間の諸の道法、悉く中に於て出家して、因て以て人の惑を解きて而も邪見に墮せざらしむ。或は日月天、梵王世界の主と作りて、或時は地水と作り、或は復た風火と作る。劫の中に疾疫有れば、現じて諸の藥草と作り、若し之を服する者有れば、病を除きて衆毒を消す。劫の中に飢饉有れば、身を現じて飲食と作り、先づ彼の飢渇を救ひて却て法を以て人に語る。劫の中に刀兵有れば、之が爲に慈悲を起し、彼の諸の衆生を化して無諍地に住せしむ。若し大戰陣有り、之を立つるに等力を以てすれば、菩薩威勢を現じて降伏して和安ならしむ。一切國土の中の諸有の地獄處には、輒ち往きて彼に到り其の苦惱を勉め救ふ。一切國土の中に畜生相食噉すれば、皆生を彼に現じて之が爲に利益を作す。五欲を受くることを示し、復た現に禪を行ずることを示し、魔心をして憒亂して其の便を得ること能はざらしむ。火中に蓮華を生ずる、是れ希有なりと謂つ可し。欲に在りて而も禪を行ずる、希有なること亦是の如し。或は現じて嫡女と作りて、諸〳〵の好色の者を引き、先づ欲の鉤を以て牽きて、後に佛智に入らしむ。或は邑中の主と爲り、或は商人の導、國師及び大臣と作りて以て衆生を祐利す。諸有の貧窮の者には現じて無盡藏と作り、因て以て之を勸導して菩提心を發さしむ。我心驕慢の者には、爲に大力士を現じ、諸〳〵の貢高を消伏して無畏を以てして、先づ施すに無畏を以てして、後に道心を發さしむ。或は嫡欲を離るゝことを現じて五通の仙人と爲り、諸〳〵の群生を開導して戒忍慈に住せしむ。供事を須ゆる者を見れば、現じて爲に僮僕と作り、既に其の意を悅可せしめて乃ち發すに道心を以てす。彼が須ゆる所に隨ひて佛道に入ることを得しめ、善方便力を以て皆能く之を給足す。是の如きの道無量なり。所行涯有ること無く、智慧邊際無く、無數の衆を度脫す。假令一切の佛、無數億劫に於て其の功德を歎ずとも、猶ほ尚は盡すこと能はざらん。彼の不肖の人と癡冥無智の者とを除く。）

此の末段は佛道に通達せる菩薩の働きの自在なることを遺憾なく説明して居る。之を前の方便品に叙述せられたる維摩居士の日常の行動と併せ讀むならば、菩薩行の如何に貴いものであるかといふことを充分に解し得べきである。而して之を説くものは維摩詰であるが、之を促したものは普現色身菩薩である。維摩詰は毘耶離城の長者であつて多くの資財を有し、眷屬奴婢

等も夥しく又其の交友も至て多かつたのであるから、其の菩薩道を勵むに當つて凡て此等のものを如何に觀ずるかを問ひ、維摩詰は之に答ふると共に、更に進んで菩薩が佛の化導を賛くるために如何に力を盡すかを語るのである。維摩は大富豪であつたが其の心は遠く貧富貴賤等の外に超出し僧肇が

外には世の家屬に同ずることを現じ、內には法を以て家屬と爲す。

といつた通りであつた。固より法を學び道を修むる上に於て、貧富貴賤の差のあるべき筈はない。而も其の修め得たる所の道を實行して世を濟ひ人を導くに當つては、地位も資財も勢力も皆それ〳〵に役に立つのである。要するに其の境遇に制せらるゝものには、如何なる境遇も累を爲さぬことは無い。貧賤なれば貧賤なるが爲に歎きの種が多く、富貴なれば富貴なるが爲に爭ひの種が多いのである。若し能く其の境遇を制し得る者には、如何なる境遇も其の善を爲し道を行ずるの便りとならぬものは無い。地位あり勢力あり資財あれば、それを盡く善用して世の爲人のために盡す。貧困であり卑賤であれば、其の中に安んじて自ら樂む所を改めず、自然と其の周圍に善い感化を及ぼすのである。孔子の弟子顏回は貧苦の中に在つて能く道を樂み、其の操守をかへなかつたので、孔子は之を稱揚して、

賢なる哉回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に堪へず、回や其の樂を改めず。賢なる哉回や。

といはれたが、孔子が陳蔡の間に於て危難に逢はれた時に、顏回が之を慰めて『夫子の道は至て大なり、天下能く容るゝなし。然りと雖も容れられざるも何ぞ病へん、容れられずして然る後に君子を見る』といふを聞いて、孔子は大に悦び、笑つて顏回に向つて

回や爾をして財多からしめば吾爾が宰と爲らん。

といはれた。是れは固より一時の戲言ではあるが、顏子の人となりを充分見抜いて斯ういはれたものと思はれる。顏回は貧しい暮しの中に安んじ得たのみならず、若し富めば極めて寬厚なる主人として多くの召使ひに仰ぎ慕はるべき人であつたに違ひない。賢聖の人は誰も皆さうであらう。

さて維摩が普現色身菩薩に答へんが爲に說いた偈は、四句を以て一節を成し、凡て四十二節に分れて居るが、之を大別すれば三段となるのである。第一段卽ち『智度は……』といふに始まり、第十二節の『勝旛道場に建つ』といふまでは、菩薩の具ふる所の德を述べたのである。第二段卽ち第十三節の『起滅なきことを知ると雖も』といふに始まり、第三十九節の『善方便力

を以て皆善く之を給足す』といふまでは、菩薩が一切衆生を救護する働きを有らゆる方面に亙つて述べたのである。而して第三段に於ては以上を綜合して菩薩の德と其の妙用を讃歎し、人々に共に大乘を學んで斯る高德の菩薩と爲るべきことを勸めて結局とするのである。

○智度は菩薩の母　梵語で般若波羅蜜といふのを智度と譯すので、菩薩の行ずべき六度の一である。菩薩が一切衆生の爲に救護の働きを爲し得るのは自ら智慧を具へて居るからである。されば智慧を具へんが爲に力を用ゆることは菩薩をして能く菩薩たらしむる所以であつて、宛も母の如きものである。○方便を以て父と爲す　菩薩は種々の方便を以て衆生を導き、盡く其の惑を除かしむるのである。若し善巧方便に依らなければ決して衆生を導くことは出來ぬ。自ら智慧を具ふると、方便を以て他を導くとは、相俟つて菩薩をして菩薩たらしむるものであるから、之を父母に比するのである。○是に由りて生せざる無し　一切衆生の導師として世に立つ上は、之を導くが爲に種々無量の方法に依らなければならぬが、深妙なる智慧を具へ、善巧方便を用ゆるならば、衆を導くに於て自由自在であるべきである。○法喜を以て妻と爲し　妻は常に夫に伴ひ夫を慰め且勵ますべき者である。菩薩が佛法を學んで大なる喜びを感ずれば、其の喜びは常に其の心を慰め且勵まし、如何なる困苦をも凌いで、此の大法を弘めんとの志を失はざらしむるのである。○慈悲心を女と爲す　菩薩の慈悲心は一切の人を救ひ、一切の人に悦びを與ふるものである。故に之を女の兒に譬へたのである。○善心誠實なるは男　善心にして誠實であれば必ず大事を成就することが出來る。如何なる障礙も誠實の力には敵し得ぬものである。故に之を男の兒に比したのである。○畢竟空寂なるは舍　空寂とは人生の一切の差別を超越したることである。善惡賢愚盡く皆佛法に歸依するによつて救はるべきものと知るならば惡人を憎むの念もなく、愚者を侮るの念も無くなる筈である。此の如き心をもてば常に胸中は安樂平和である。宛も家の中に居れば風雨が襲來しても害を受けず、安樂平和であるのと同樣である。○弟子の衆は塵勞　塵勞とは卽ち煩惱のことであるが、此處では『煩惱の徒』といふ意味に用ゐてある。煩惱に役せられて苦悶して居る人が世間に如何に多くとも、それ等を盡く吾が弟子と考ふるのである。○意の所轉に隨ふ　所轉に隨ふとは菩薩が彼等を敎化し其の迷を轉じて悟に入らしめんと力を用ゐ、次第に其の效果を現はすことである。菩薩たるものは此の確信をもつて世に立ち人に對するのである。○道品は善知識　道品とは前に出たる三十七道品のことで、卽ち凡夫から佛と成るまでに經べき所の修行の行程である。善知識とは良き友のことである。良き友に親しむが如くに三十七道品に親しみ、漸々に智を進め德を高めて終に佛の

境界に到達するのである。○諸度は法の等侶　諸度とは卽ち菩薩の六度のことである。人が旅行をするのに道連れがあれば慰めあひ扶けあつて、長い道中も無事に過すことが出來る。それと同樣に、六度を行ずることを忘らなければ、必ず佛の境界に到達するまでの長い修行を果すことが出來るのである。○四攝を伎女と爲す　四攝法は衆生を誘うて佛法に歸依せしむるための方法として完備せるものである。衆生は宛も伎女の容色に引かれて一切を忘るゝやうに、四攝法を行ずる菩薩に引かれて皆佛法に歸依するやうになるのである。○法言を誦し　法言とは佛の法を說きたまふ言葉である。菩薩の說法は畢竟佛の說きたまへる所を敷衍するに過ぎぬものである。○音樂と爲す　音樂の耳を悅ばすが如く、菩薩は佛法を說いて聽く者に大なる悅びを與ふるのである。○總持の園苑　總持とは衆に勸めて一切の善を持ちて失はざらしめ、一切の惡を止めて發せざらしむることである。此の教へは一切の人を其の中に包容して漏さゞるものであるから、之を廣大なる園の中に林樹亭樹等を包容するに譬へたのである。○無漏法の林樹　無漏とは煩惱を除くことである。人々が煩惱を除くによつて一切の苦を脫し、生きがひのある生涯に入る有樣は、宛も林樹が並び立つて美しく繁茂して居るのと同樣である。○覺意淨妙の華　佛の正法を覺れる者は其の心淸淨にして一切の汚れを去り、又自由自在に種々の美しい行ひを現ずることが出來るから、之を華に譬へて淨妙の華といふのである。○解脫智慧の果　解脫とは一切の惑を離れ、一切の苦を離るゝことである。解脫を求むるが爲に佛法を學び、修行を積むこと久しきに亙れば必ず智慧が具はるのである。それは葉が延び花が咲いて終に果を得ると同樣である。○八解の浴池　八解とは前に出たる八解脫のことである。是れは煩惱を掃ひ去つて、人生の有らゆる繫縛を離るゝによつて禪定を具するに至る有樣を八段に分けて說明したものである。斯くして人生の累ひを脫して悠々自適せるさまは、池水の混々として綠を湛へて居るに比すべきである。○定水湛然として滿てり　池中に淸らかなる水が滿ちて居るやうに、解脫を能くせる人の心は永く禪定を得て、亂るゝことは無いのである。○布くに七淨華を以てし　七淨とは一に戒淨、二に心淨、三に見淨、四に度疑淨、五に分別道淨、六に行斷知見淨、七に涅槃淨をいふのである。是れは大乘の修行を積み、次第に煩惱を除いて心が淸淨になり、終に正覺を得るまでの順序を七段に分けて說いたものである。第一に戒淨とは能く佛戒を守つて違背せず、其の言行一切が淸淨なるを得たことである。第二に心淨とは戒を守つた結果として心に煩惱が無くなり、淸淨を得たことである。第三に見淨とは既に心が淨くなつたので、一切の事物に對する見解に少しも邪曲なく、能く公正にして淸淨なるを得たことである。第四

に度疑淨とは一切の疑惑を除き得て、心身共に全く清淨になつたこと。度疑とは疑惑の中を渡り過ぎて疑惑なき地位に達したといふ意である。第五に分別道淨とは世間の人の善惡正邪の行ひを分別するに少しも其の道を誤らず、一々正當なる判斷を下し得るやうになつたことである。第六に行斷知見淨とは行と斷と知見との三者が盡く完全になつて少しも汚れを帶びぬことである。行とは佛法を弘むるに當つての一切の言行である。斷とは一切の煩惱を除き盡すための努力をいふのである。知見とは萬有の實相を知ることである。此の三者少しも缺くる所なければ、既に佛の境界を去ること遠からぬものである。第五に涅槃淨とは正覺を成就し、佛の境界に到達せることである。心に禪定を得たる結果として七淨を具し、洪大無邊なる德を成ずるので、其の德を華にたとへ七淨華といふのである。○無垢の人　禪定の水の中に浴するは無垢の人である。無垢とは一切の惑を除き盡せることである。○五通馳せ　五通とは前に出たる五通力のこと。卽ち一に天眼通、二に天耳通、三に他心通、四に宿命通、五に神足通である。一切の惑を除けるものは心に此等の通力が具はり、如何なる境遇に在つても常に自在である。それは宛も象馬の自在に遠路を馳驅するが如くである。○大乘を以て車と爲す　象馬は車を牽くがために用を爲すものである。通力を具ふることは大乘の敎へを弘めんがために用を爲すのである。



若し大乘を弘むるためでなく、唯だ通力を現じて人を驚かすのみならば提婆達多等の爲す所と少しも擇む所はない。○調御するに一心を以てし　羅什は此の一心を和合であると解した。和合とは心が寂然として亂れず動せぬことである。また羅什は『容豫として中に處す、是を名けて捨と爲す』ともいつた。○八正の路に遊ぶ　八正は前に屢々出たる八正道のことである。大乘を學ぶものは言行一として正しからぬは無く、自ら八正道に一致するのである。遊ぶとは自在を得ることで、强ゐて努めずして自ら八正道に一致するのである。○相具　三十二相が具はつて居ることである。○衆好　八十種好のことである。心に德があれば自ら外貌にあらはるゝのである。○慚愧の上服　慚とは自ら內に省みて足らざることを知るをいひ、愧とは他と比べて自己の足らざる所を知るをいふ。いかに德が具はつても慚愧の心が無ければならぬ。慚愧ほど美しいものは無い。慚愧の人は最も美しい上服を纏へる人の如く、何人からも仰ぎ見らるのである。○深心を華鬘と爲す　深心とは深く佛法を信受する心である。深心よりして有らゆる善行が生じ來ることは宛も華鬘が頭上に在つて容貌を美にして艶ならしむるが如くである。○七財の寶　是れは藏の中の寶ではなくて、心の中の寶である。七財とは七聖財ともいふので一に信、二に戒、三に聞、四に捨、五に慧、六に慚、七に愧である。一に信とは佛法を信

じて疑はぬこと。二に戒とは佛戒を守つて背かぬこと。三に聞とは常に法を聞くを以て大なる悦びとすること。四に捨とは一切の物に就て執著なきこと。五に慧とは智慧を求めて怠らぬこと。六の慚と七の愧とは上に出て居る。此の七事を具備せる人は卽ち萬德を具する人であつて、世間に於て最も富める者といふべきである。○教授して以て滋息し　滋息とは鳥獸などの殖えて行くことである。佛の大法を人に教授するによつて彼をして善を長せしめ、又自身にも善を長ずるのである。利他と自利とはいつも相伴つて居る。○所說の如く修行し　所說とは佛の所說である。佛道の修行をするものは常に佛の御心に一致するやうに努めなければならぬ。我意を挾んで佛の所說を曲解するやうなことがあつてはならぬのである。○廻向するを大利と爲す　廻向とは佛道に廻向するのである。吾等が種々の善根を積むのは、皆佛の境界に到達する爲に役立つのである。常に斯る自覺をもつて善を行ふは卽ち佛道に廻向する所以である。自身が佛の境界に近づくに隨ひ、周圍の人々にも大なる感化を與へ得らるゝのであるから、自利利他共に大なりといふべきである。○四禪を牀座と爲し　四禪とは四禪定といふに同じく、吾等の心を修して一切の亂想を除き、絕對の理と一致せしむる道程を四段に分ち初禪、二禪、三禪、四禪とするのである。四禪全體に於て十八支を別つ。支とは禪定を支持するために必要なる條件をいふのである。初禪には五支、一には覺、二には觀、三には喜、四には樂、五には一心である。二禪には四支、一には內淨、二には喜、三には樂、四には一心である。三禪には五支、一には捨、二には念、三には慧、四には樂、五には一心である。四禪には四支、一には不苦不樂、二には捨、三には念、四には一心である。其の一々の說明はあまり細くなりすぎるやうであるから省略するが、要するに心の持ち方である。禪定を得るによつて心は極めて平靜安樂であるから之を牀座に比するのである。○淨命より生ず　淨命とは卽ち少欲知足の行をいふのである。一切の欲望を離れて淨らかに生活することである。斯る淸淨なる生活によつて禪定を得るやうにもなれるのである。○多聞にして智慧を增し　徒らに多聞をのみ求むるのではなく、多く聞いて一切の惑を除き、淸淨の行に入らんことを期するのである。○以て自覺の音と爲す　印度の國王は毎朝起き出べき時刻に音樂を奏せしめ、その微妙の聲を聞くことによつて目を覺すので、之を自覺の音と稱した。菩薩は多く佛法に就て聞くことによつて覺を得るのであるから、是れが卽ち自覺の音に當るわけである。○甘露法の食　甘露の食とは天上界に於て種々の名藥を調和して作つたもので、此の甘露味を食する者は非常なる長壽を得ると傳へられて居る。之を以て佛法を學んで正覺を得、永く生死を超越し得るに譬へたのである。○解脫味を漿と爲す

解脫味といふは要するに四味である。四味とは第一に出家して五欲を離れ、第二に禪を行ずるに依つて心の憒亂を離れ、第三に智慧を得るに依つて妄想を離れ、第四に涅槃を得て生死を離るゝのである。漿を飮んで渴を醫するが如く、此の四味によつて一切の愛欲を去り得るが故に之を法漿といふのである。○淨心以て澡浴し　水に澡浴して身の垢を去るが如く、佛法を學んで心を洗ひ淸淨ならしむるのである。○戒品を塗香と爲す　戒を持つ人は獨り其の心に汚れ無きのみならず、又自ら周圍の人々を化して共に淸淨ならしむること、宛も身に香を塗れば其の香氣が周圍を淨むると同樣である。○煩惱の賊を摧滅し　智慧が明かになれば煩惱は盡く滅して行くのである。○能く踰ゆるもの無し　菩薩は世の中に於て何も恐るゝものも無く憚るのも無いから、絶大の勇氣を具へて居るので、何人も之に超越することは出來ぬのである。○四種の魔　道に入る障礙を爲すものを盡く魔と稱することは前にいつた通りである。又前に十種の魔を擧げたが、此處には其の中の重なものを擧げて四魔といふのである。卽ち煩惱魔、蘊魔、天魔及び死魔である。○勝幡道場に建つ　古代の印度には婆羅門教が行はれ、その中に多くの派があつた。其の各派は皆それ〴〵異つたる教義を有するものであるから、互ひに對論して其の教義の勝劣を定めたのである。此の對論に於て勝利を得たるものは其の家の前に旗を建



てその優勝者たることを示す。これを勝幡といふのである。菩薩が群魔に打克つべきことは疑ひなき所であるから、たとへ其の家の前に特に勝幡を建てずとも、勝幡を建てたと同樣である。以上の十二節は菩薩の具へ得たる德を說明したものであるが、以下は其の一切衆生を救護する働きに就て述ぶるのである。

○起滅無きことを知ると雖も　起滅とは卽ち人生に於ける變化と差別とのことである。菩薩は眼前の變化と差別とに囚はれず、永恒に亙つて不變なる理の存することを能く知つて居る。又人々に賢愚善惡の別があるけれども終には皆佛法に歸依すべきものなることを知つて居るのである。○彼に示すが故に生有り　彼とは一切衆生のことである。一切衆生を導くが爲には、善惡正邪種々の生き方のあることを示し、善を求め正に就く心を起させなければならぬのである。最初から誰も皆佛と成るべきものであるとのみ說くならば、各自に反省して自己の非を知ることが出來ぬであらう。○悉く諸の國土に現じ　此處に國土といふは卽ち社會のことである。菩薩は如何なる社會にも身を現じて人々と共に住み、人々を誘うて共に佛法に歸依せしむべく力を盡すのである。○日の見ざるもの無きが如し　日は高き山頂をも深き溪谷の底をも照し、何れの所に在る者も皆日を仰ぎ見るのである。菩薩もまた此の如く、有らゆる種類の人を敎へ導

くことに力を盡し、有らゆる人より仰ぎ見らるゝのである。○十方の無量億の如來を供養し十方世界に無量億の佛があつても、其の覺りたまへる所の絕對の理は同一でなければならぬ。又其の說法はそれぞれに異つて居ても、其の歸着する所は一でなければならぬ。されば一佛に歸依するは卽ち一切の佛に歸依することである。佛に歸依し、佛の敎へを身に行ひ又之を世に弘むることが、佛に對する眞の供養である。必ずしも物を供へずとも眞の供養は出來るのである。○分別の想有ること無し　自分もやがては佛と成るべきものであることを知つて居るから、佛の爲にすると自己の爲にするとの間に何の區別も無いのである。○諸佛の國及び衆生の空なること　諸佛の國とは諸佛の法を說きたまふ所をいふので、其の說法はそれ〴〵皆異る。又一切衆生の性質氣風は固より千差萬別である。○而の說法を聽く者の性質等もそれ〴〵に皆異る。さりながら何れも結局は一に歸すべきもので、其の差別は永遠の差別ではないのである。○而も淨土を修して群生を敎化す　群生とは卽ち一切衆生のことである。一切衆生盡く佛性を具せるが故に終には共に佛と成るべきものと知るけれども、菩薩はそれを自然の儘にして置くことは出來ず、一日も早く彼等をして其の凡夫の境界を脫せしめ、一日も早く此の穢土を淨土に化せしむるやうに念願し、佛法を弘むることに全力を注ぐのである。淨土を修すとは淨土を實



現すべき業、卽ち佛法の弘通に力を盡すことをいふのである。○諸有の衆生の類の形聲及び威儀を　菩薩が衆生を敎化するに當つては、いつも自ら菩薩と名乘つて敎へを說くわけでは無い。其の時に應じ其の場合に應じて、種々の姿を示し種々の態度によつて、それ〴〵に適當なる敎へを與ふるのである。例へば觀世音菩薩が三十三身を現ずるといふが如きものである。菩薩は一切の人の姿を自由自在に現はすことの出來る力をもつて居る。○無畏力の菩薩　高德の菩薩は法を說くに於て無畏である。また如何なる働きをも爲すべき力をもつて居る。それ故に無畏力の菩薩といふのである。○衆魔の事を覺知して　惡魔が天帝の姿となつて來たのを維摩詰が見破つたといふことが前の弟子品に見えて居る。此の如く高德の菩薩を如何なる魔も欺くことは出來ぬ。魔が如何なる巧みをして居るかを菩薩は盡く能く知つて居るのである。○而も其の行に隨ふことを示す　惡魔の群に投じて彼等と事を共にするやうに見せて、徐々と彼等を誘うて佛法に歸依せしむるのである。○意に隨ひて皆能く現ず　無量義經には諸菩薩が釋尊を讚して『法に於て自在にして法王と爲りたまへり』といつたことが出て居る。それは『智慧深く衆生の根に入りたまへる』が爲である。高德の菩薩も亦能く衆生の機根を知れるが故に自在に方便を用ゐて、彼等を化すのである。○或は老病死を示して　凡夫は老病死の近きことを知らず

して唯だ眼前の樂みのみを追うて居る。之を覺醒せしむるために老病死を示すのである。○諸の群生を成就す　衆生を教化して佛法に歸依せしむることである。人々の本來具有せる佛性を開發せしむるのであるから、成就すといつたのである。○幻化の如くなること　人生の離合變化は宛も幻の如きものである。菩薩は自ら能く此の事を了知せる故に、能く人々を教化して永恒不變の道に入らしむるのである。○通達して　人生のはかなき様を見究むると共に、斯る果敢なき生活を脫出すべき道をも深く究めて居るのである。○劫の盡く燒くることを現じて　前にもいつたことであるが、成住壞空の四劫が際限もなく繰返さるゝといふことが古代の印度に於ては信ぜられて居たのである。今は天地萬有が斯く整然として存する時代、即ち住劫であるが、此の住劫の終りに大火が起り、萬物盡く燒けて形を失ふのである。是れが即ち壞劫で、その後には何物も存在せぬ時代、即ち空劫が續く。その後にはまた萬物の形を成す時代、即ち成劫が來るのである。○天地皆洞然たり　洞然とは空にして何物も無きさまである。此の如き有様を人々の眼前に示して、物質的欲望の賴むに足らぬことを知らしむるも亦菩薩の教化の一である。○常想　何物も常住であると考へ、執著心のみを募らせて居るのである。○照して　菩薩の智を以て凡夫の心の中を照し、覺醒することを得しむるのである。○菩薩を請ずれば　多くの人の中には道を求むる志があつて、教へを受くるために菩薩を請待する者もある。○經書禁呪術　經書とは此處では佛教以外の諸道の經典のことをいふのである。禁呪術とは婆羅門教に於て呪を唱へて天邪をはらふ儀式等をいふのである。○此の事を行ず　清淨なる心を以てすれば、凡ての學問技藝等は皆世を化し人を教ゆる緣となるものであるから、菩薩は決して之を疎かにはせぬのである。○世間の衆の道法　佛教以外の種々の教へのことをいふのである。○悉く中に於て出家し　羅什が之を解釋して『先に同じて後に乖くなり』といつたので能く其の意が悉されて居る。最初は異教徒の群に入つて共に學び共に住んで居るが、漸次に彼等を感化して、其の教への佛法よりも遙かに下れるものなることを自覺せしめ、彼等を誘うて其の教へを離れて共に佛法に歸依せしむるのである。○人の惑を解きて　何れの教へでも皆相當の價値はあるに違ひないが、それを最も勝れたるものと信じ、それよりも遙かに勝れたる佛法のあることを知らぬのは、惑へる者といふべきである。故に彼等を覺醒せしめて其の惑を離れさせるのは大なる慈悲の業である。○邪見に墮せざらしむ　彼をして佛の正法を信じ、正見を有せしむるやうに導くのである。○梵王世界の主　梵天王は人間界を統理するものと考へられて居るから、之を世界の主といふのである。日天子とか

月天子とか梵天王とかいふ者が皆佛に歸依し、佛の說法の座に列つたことが諸經に見えて居る。蓋し佛法は獨り人間界の爲にのみ說かれたもので無く、苟くも生有る者は皆佛法を學ぶことに依つて眞に意義ある生を營むことが出來ると考へらるゝのである。既に佛法に歸依し、又佛法の流布を護るのであるから、諸天は皆菩薩の類と見らるゝわけである。○地水風火　所謂四大である、凡ての物質は皆此の四大より生じ來るものといふのである。然るに物質と精神とは全然別のものではなく、物質の中にも精神が潛存して居ると見ることが出來る。さすれば菩薩が地水となり火風となつて存在し、世間の人の生を保たしむるために用に立つて居ると見るのも更に奇異な見方ではないであらう。

○劫の中に疾疫あれば　劫の中とは『其の時代に』といふ意である。菩薩が疾疫ある時には化して藥草となり、飢饉の場合には化して飮食となるといふは、其の世を救ひ人を濟ふ力の極めて洪大にして又變化自在なるを示すものである。○之が爲に慈悲を起し　兵亂の起るのは畢竟煩惱の熾盛なる結果であるから、菩薩は之を哀愍するのである。○無諍地に住せしむ　其の爭ひを解いて平和に復せしむることである。○之を立つるに等力を以てすれば　雙方が同等の力で對立して居るために、戰爭がいつ迄も終局に達すべき見込みの無い場合である。○諸有の地獄處　瞋恚の念のみが勢力を得る所には地獄が出現するのであるから、地獄は到る處にある。



○之が爲に利益を作す　互ひに和順ならしめて、其の苦痛より脫せしむるのである。○五欲を受くることを示し　菩薩は五欲の爲に動さるゝこと無きものであるが、衆生を誘はんが爲に其の中に混じて住み、吾も亦五欲を有する者であるといひ、『汝等と共に煩惱を掃ひ去ることに努力しやう』とて彼等を導くのである。○復た現に禪を行ずることを示し　時にはまた禪定に入つて一切の欲を斷てるさまを示して、世間の人の範となるのである。○魔心をして憒亂して惡魔が如何に力を奮はうとしても、菩薩の心が堅固であるから如何ともすることを得ず、却て自ら弱り果てゝ何の働きも出來なくなるのである。○欲に在りて　而も禪を行ず、外面は五欲を恣にするやうな生活をして居て、而も心は禪定に在りて更に亂れぬのである。○嫁女と作り　媚を賣つて人を惑はすことを業とする婦女のことである。○欲の鉤を以て牽きて　鉤を以て魚をつるが如く、最初は彼の心を悅ばしめて徐々に佛道に向はしむるのである。○邑中の主　地主となつて多くの農民等を指導し敎化するのである。○商人の導　多くの商人が隊を作つて貿易の爲に遠くへ赴く時に、其の嚮導者となることである。○無盡藏と作り　其の貧を救ふべき貨財を豐富に與ふるのである。○諸の貢高を消伏して　貢高とは己の力を恃んで驕り昂

ぶることである。力士の威勢に壓伏せられて驕傲の氣分が無くなれば、自ら反省して道を求むるやうにもなる。○前に居きて慰安し　何か困難な事にあつて恐怖して居るものを、菩薩は自分の前へ招き寄せて慰安するのである。○施すに無畏を以てし　恐怖の心を除くことを無畏を施すといふのである。○五通の仙人と成り　其の心に煩惱が無くなれば自ら通力も具はるといふことを多くの人に示すのである。五通のことは前に出て居る。○戒忍慈に住せしむ　持戒と忍辱と慈悲とが皆具はつて、少しも退轉することが無ければ佛弟子として申分なきものである。○供事を須ゐる者　自分の侍者となつて用を足してくれる者がほしいと思つて居る人のことである。○須ゐる所に隨ひ　須ゐる所といふは生活に必要なる飲食とか調度とかのことである。侍者となつて彼に仕へ、其の必要なものを供して、不自由をさせぬのである。以上の十七節、六十八句は菩薩が衆生濟度の爲に力を盡す種々の方面を數へ上げたのであるが、要するに皆是れ其の洪大なる智慧と慈悲との力の現はれたものに外ならぬ。

○是の如き道無量　以上は僅かに其の一端を擧げたのみである、實際菩薩の世に對し人に對する道は種々無量にして變通自在である。道生は『適應無方なり、皆是れ佛の道なればなり』といつたが、能く當つた言である。○其の功德を讃歎するも、菩薩は佛法を學んで能く佛の御心を知り、佛の御心を以て吾が心とし、佛法の弘通に力を盡すのであるから、佛は大に之を讃歎せらるゝのである。併し言葉では盡さぬほど其の功德は大きいものである。○是の如きの法　菩薩道の貴いことをいふのである。菩薩道を勵んで怠らなければ、終には佛の境界にも到達し得らるゝのである。○不肖の人　下劣なる天性の人をいふのである。○癡冥無智の者　智慧の無い者は無論慈悲心も缺けて居るのである。新譯には『都て智悲無き者』とある。

此の偈の始めの十二節には菩薩が具ふる所の德の如何に貴きものなるかを委しく說き明してある。菩薩の志とする所は一切衆生に救護を與ふるに在ること勿論であるが、他を救はんとするには先づ自身にその力を蓄へなければならぬ。心一つの力が外に現はるゝ時は無限の作用となるのである。中庸に天下國家を治むる根本を說いて唯だ自ら誠にするに在りといひ、更に其の誠に就て論じて

之を誠にする者は善を擇んで固く之を執る者なり。

といひ、更に之に重ねて

誠は自ら成すなり、道は自ら道くなり。誠は物の終始なり、誠あらざれば物無し。是故に君子は之を誠にするを貴しとす。誠は自ら己を成すのみにあらず、物を成す所以なり。己を成

すは仁なり、物を成すは知なり。性の徳なり、外内を合するの道なり。

といひ、至誠なるものは天地と一致する者であることを説いて

此の如き者は見えずして章はれ、動かずして變じ、爲すこと無くして成る。

といつてあるのは、如何にも能く心一つの力の偉大なることを明かにして居る。佛の教へたまへる所も畢竟吾等の心一つを清淨にすることに歸着する。涅槃經に『自ら其の意を淨くする、是れ諸佛の教なり』とあるのを、前にも再三引いたが、此の根本のことを忘れる時は佛教を奉ずるものとはいはれぬのである。吾等が煩惱に充ちたる心を清淨ならしめ得るのは、唯だ佛教に歸依するに依るのである。吾等は佛の御力によつて新なる生に入り、新なる力を得るのである。世の中に如何なる悦びがあつても、此の悦びに超ゆるものは斷じて無い。

普現色身菩薩は維摩詰が大富長者なることを知つて居るから『父母妻子眷族乃至奴婢僮僕を如何に思ふか』と問うたが、維摩の之に答ふる所に依ると、一切其等の物に心を繫けず、只偏へに佛法の中に凡ての滿足を求めて居ることが明かである。維摩が大乘の教へを弘むるに就て其の地位勢力資産等が大なる助けをして居たことは前の『方便品』によつても明かであるが、彼は一切其の地位勢力資産等を恃まなかつたから、それで其等を皆活用して多くの善根を積むことが出來たのである。平山兵原の創徹といふ書の中に眞の勇士が戰場に臨める時の心懸けを說いて

既に阿修羅界に在りて猶ほ須臾の命根を保せんことを幸として、短き刀の陰に身をちゞめ、細き槍の柄に掩はれんことを欲す、其心の賤劣卑怯、啄を置くに所無し。是を以て坐ながら敗亡を取り、屍上猶ほ羞辱を餘すに至る。吾が黨の士請ふ此の魔界を脫出し、超然として神武の域に入らんことを。

とあるが頗る味のある言である。刀や槍を頼みとして身を防がうといふやうな心では、刀や槍を自由に使へて、大なる用に立つのである。又同じ書に

譬へば一番槍を合せ、一番登をするが如き、敵軍槍の穗先を揃へ、つばなの花を連ねたる如くにして咄と突きかゝる。此節に及んで一番槍を仕おほせて感狀を賜はらんの、恩賞を得んのといふ樣なる心で進まるべきや。一番登もまた同じ……是亦功を立てゝ立歸らんなんどいふ心にて此烈しき場を登らるべきや。共に此所我が絶命の地にて、只今國恩を報ずるの時節到來せりと心得て、踏込むでなければ決して先登はならぬぞ。

とある。功を立てんの恩賞を得んのといふ考へを棄てかゝる者が功を立て恩賞をも受けらるゝのである。凡ての事が此の通りである。唯だ一心に道を求め教へを學び、智も德も具はつて來れば、地位でも資産でも其外如何なる物でも皆役に立ち、世をも人をも救ふことが出來るのである。佛の教へは一切の物を皆活かす力をもつて居る。されば佛の教へを學ぶためには如何なる困苦を冒し、如何なる犧牲を拂つても、少しも惜しむには足らぬ筈である。されば瑜伽論には

若し佛法の一句の頌を聞きて歡喜踊躍するは、三千大千世界の中に充滿せる大珍寶聚を得るよりも勝れたり。一句の法能く正等覺を引き、能く菩薩の行を淨むるを以てなり。歡喜踊躍するは一切の尊貴の位を得るよりも勝れたり。設し人ありて告げて言はん、善男子よ、我一句の佛の所說の法を有ちて能く正等覺を引き、能く菩薩の行を淨む。汝聞かんと欲するや否や。汝今若し能く身を大火坑に投じて大苦を受けば、當に汝が爲に說くべしと。菩薩是を聞かば歡喜踊躍して答へて言はん、我若し前の所說の如き一句の法義を聞くことを得ば、たとひ火坑の量三千大千世界に等しくして、中に熾なる火を滿せりとも、我尚ほ身を投じて入るべし。況んや小火坑をや。佛法を求むるが爲には、尚ほ久しく大那落に處して大苦惱を受くべし

況んや餘の小苦をやと。

とあるが、此の熱心あつて初めて能く正法を學び、又正法を持つことが出來るのである。

偈の第十三節から以下は菩薩の法を弘むるに際して種々無量の方便を自由自在に用ゐ、一切衆生を救護するさまを極めて鮮かに描き出してある。是れ卽ち菩薩の內に自ら藏する所の力が自ら發現したものに外ならぬので、僧肇は之を評して

此より已下は盡く菩薩變應の德を歎ず。法を以て家と爲すが故に其れ能く此の若くなり。

といつた。今此處に列擧せらるゝ所は極めて多方面であるが、久しく大乘を學んで其の智慧が明かになれば、自ら一切衆生を救護せんとの願を起し、又其の願を果さんがために種々の方便をも案じ出すことが出來るのである。まことに心の力ほど偉大なものは無い。磐若經に

若し能く心を知れば悉く衆法を知る。種々の世法も皆心に由る。

とある通りである。又同じ經に菩薩の貴きことを稱へて、

正智の力を以て能く有情の心行の黑白を了り、能く衆生の爲に相應せる法を說き、甚深の妙義に入らしめ、究竟涅槃に住せしむ。……身命を捨つるも衆生を利せんとす。

とある。有情とは卽ち人のことである。又華嚴經にも菩薩を稱へて、

菩薩は莊嚴を見ても著すること無く、不淨の刹を見ても憎まず。何となれば寂靜平等に諸法を觀察すればなり。菩薩は常に此の念を爲す、我當に十方の一々の衆生の爲に無量劫に住し、衆生を成就して心に疲厭無く共に止住して捨離すること無けんと。

とあり尙ほ

菩薩は此の大悲心を以て一念だも斷絕せず。

とある。一念とは一刹那のことである。菩薩は一刹那たりとも衆生を哀愍するの念無き時はないのである。吾等凡夫と雖も時としては人の惱めるを見て之を哀愍する念が起るのであるが、又忽ちにして煩惱が頭を上げて來て『他人を憫む暇はない、自分のことが先づ大切である』といふ氣になるのである。一刹那たりとも悲心をもたぬことは無いといふは實に貴いことである。

又同じ經には菩薩が衆生を哀愍する心を細かに說いて十種の大悲とし、

菩薩に十種の大悲ありて常に衆生を觀ず。衆生の歸依する所無きを觀察して大悲を起し、衆生の貧しくして善根無きを觀察して大悲を起し、衆生の邪道に隨逐するを觀察して大悲を起し、衆生の欲に縛せらるゝを觀察して大悲を起し、衆生の長く生死に睡れるを觀察して大悲を起し、衆生の生死の海に在るを觀察して大悲を起し、衆生の長病あるを觀察して大悲を起し、衆生の善法を欲すること無きを觀察して大悲を起す。

とある。『歸依する所無き』とは、一般世間の人は歸依する所の教へが一も無く、日々煩惱に擾されて心が少しも定まらぬのをいふのである。『貧しくして』とあるは心の貧しきこと。卽ち智慧の足らぬことである。『生死に睡る』とあるは變化定まりなき人生に處し、其の間を脫出すべき道を少しも考へずウカ〳〵として毎日を送つて居るのをいふのである。『生死の海に在る』とは、大海の波に揉まれて常に動搖して居る船のやうに、世間の變化の波に弄ばれて其の生活に少しも安定の無い有樣をいふのである。『長病ある』とは心が常に不健全なることである。其の他は特に說明を要せぬであらう。

斯く一切衆生を哀愍するの念が自ら發して其の化導となり、其の救護となり、種々無量の方便も具はるのであつて、維摩詰が『所行涯有ること無く、智慧邊際なく、無數の衆を度脫す』といつたやうな働きも自然に出來るのである。『大學』の中に

康誥に曰く、赤子を保するが如しと。心誠に之を求むれば中らずと雖も遠からず。未だ子を養ふことを學びて而る後に嫁する者は有らず。

とあるが、子を養育する經驗を積んでから結婚する者はない。併し結婚して子を生み、其の子が可愛ければ之を養育するために工夫を凝すから、中らずと雖も遠からぬ程度には其の方法が具はるものである。其の元となるものは子を愛する一念である。菩薩が種々の方便を用ゐて適應自在なのもまた此の如くである。法華義疏に

方便は是れ善巧の名にして、善巧は智の用なり。

とあるが、今此の偈に擧げられたる種々なる方便は、まことに智の用の窮まり無きことを示すものである。

殊に注意すべきは菩薩が身を下して衆生と共に居り、徐々と彼等を導いて佛法に歸依せしむる、其の柔和忍辱の行の貴いことである。此の如きことは少しなりとも自己の智の深きに誇り自己の德の高きを恃むの念があつては出來ることではない。無量義經の中に、佛の具へたまふ所の三十二相を擧げて之を讃歎したる後に、

是れ自高我慢の除るに因りて、是の如き妙色の軀を成就したまへり。

とある。釋尊は自ら少しも自高我慢の念を有せぬが故に、又その諸弟子にも法を行ずること如法にして眞諦の法に趣向し、自ら貴しとせず他を賤しとせざるものは眞の人なり。（中阿含經）

と仰せられ、又重ねて之を戒めて

才辯ありて談に工なるも、自ら貴しとして他を賤しとするものは眞の人にあらず。王者の知る所の故に自ら貴しとして他を賤しとするものは眞の人にあらず。經を讀み戒を持ち論を學べるが故に自ら貴しとして他を賤しとする者は眞の人にあらず。糞衣を着して自ら貴しとして他を賤しとする者は眞の人にあらず。山林樹下に處するが故に自ら貴しとして他を賤しとするものは眞の人にあらず。初禪を得たるが故に自ら貴しとして他を賤しとするものは眞の人にあらず。

と仰せられた。之を維摩詰のいへる所と思ひ合せて、互ひに深く戒むべきである。

## 入不二法門品第九

文殊と維摩との問答も漸く終りに近づき、此より菩薩の不二法門に就ての談論となるのである。不二法とは卽ち中道である。右にも偏せず左にも偏せず、能く正理と一致せる行が卽ち不二法である。聲聞緣覺も空を說き、菩薩も亦空を說くが、菩薩の觀ずる所の空は聲聞緣覺の觀

じたる空とはちがふのである。一切の差別をすて、一切の變化を離れ世俗の外に超然として獨り己を潔くするものが聲聞であり緣覺である。菩薩は決して世俗を疎んぜず、一切の變化、一切の差別を有りのまゝに觀て、而も一切衆生をして結局平等無差別の境界に到達せしめんとして心を盡すのである。其の平等心は差別を棄てぬ所の平等心である。例へば七八人の子をもつた父母は、其の多くの子を平等に愛するけれども、長子は既に生長し、末子はまだ赤兒であるから、之に與ふる所の食物も衣類も皆ちがふのである。赤兒にも生長した兒と同じ食物を與へ、生長した兒にも赤兒と同じ着物を着せて置く父母があつたなら、それは決して慈悲ある父母ではない。それは其の兒等を平等に愛することを知らぬ父母である。其の兒の年頃に應じて、それ〴〵に適當なる食物や衣類を與ふるのが眞の平等の愛である。平等の心の上に立つて差別的の待遇をするのが眞の父母である。菩薩の世間に對するも亦此の如くである。一切衆生皆佛と成るべしと觀ずるは平等觀であるが、其の一切衆生の性質氣風はそれ〴〵に異り、才も德も機根もそれ〴〵に皆異るから、それ〴〵に適當なる方便を以て之を教へ導かなければならぬ。方便には限りなき差別があるのである。

凡夫は唯だ差別のみを觀て平等の觀念が少しもなく、恣に親疎を分ち利害得失を計量するのみである。併し凡夫の爲す所を見て之を卑しみ、自ら斯る群から遠ざかることのみを努めて居るのも亦偏せる者たるを免れぬ。是れは前にも一度引いた語であるが傳教大師の『法華去惑』に

凡そ差別無き平等は佛法に順せず、惡平等の故なり。亦平等無き差別も佛法に順せず、惡差別の故なり。

とあるは眞に名言である。凡て一方に偏するは佛法に於て採らざる所で、何事にも中道を重んずるのである。羅什が

有無迭に用ゆるは佛法の常なり。

といつたのも要するに此の意味である。

さて前の問疾品以來主として文殊と維摩とが說いて他の人々は殆んど默して聽聞して居たのであるが、多くの菩薩の中には相應に意見をもつて居る者もある筈であるから、維摩詰は人々の意見を求むるために『不二法門に入るには如何なる點に着眼すべきか』を問ふのである。羅什は之を說明して、

始めて會せるより以來唯だ二人のみ相對し、餘は皆默然たり。然るに今各その德を顯さしめ

んと欲す。故に問ひて盡く說かしむ。

といつた。此の維摩の問に答へて、不二法に就て說ける菩薩は凡て三十一人であつて、それが連續して一段を成して居る。併し之を一段とすれば餘り長きに過ぎて讀むのに不便と思はれるので、便宜上二つに分けて之に例の如く解釋を加へることにした。之を分けるのには便宜上といふより他に何の理由もないのである。

爾時維摩詰謂衆菩薩言。諸仁者。云何菩薩入不二法門。各隨所樂說之。會中有菩薩。名法自在。說言。諸仁者。生滅爲二。法本不生。今則無滅。得此無生法忍。是爲入不二法門。德守菩薩曰。我我所爲二。因有我故。便有我所。若無有我。則無我所。是爲入不二法門。不眴菩薩曰。受不受爲二。若法不受。則不可得。以不可得故。無取無捨。無作無行。是爲入不二法門。德頂菩薩曰。垢淨爲二。見垢實性。則無淨相。順於滅相。是爲入不二法門。善宿菩薩曰。是動是念爲二。不動則無念。無念則無分別。通達此者。是爲入不二法門。善眼菩薩曰。一相無相爲二。若知一相卽是無相。亦不取無相。入於平等。是爲入不二法門。妙臂菩薩曰。菩薩心聲聞心爲二。觀心相空如幻化者。無菩薩心。無聲聞心。是爲入不二法門。弗沙菩薩曰。善不善爲二。若不起善不善。入無相際。而通達者。是爲入不二法門。師子菩薩曰。罪福爲二。若達罪性。則與福無異。以金剛慧沒了此相。無縛無解者。是爲入不二法門。師子意菩薩曰。有漏無漏爲二。若得諸法等。則不起漏不漏想。不著於相。亦不住無相。是爲入不二法門。淨解菩薩曰。有爲無爲爲二。若離一切數。則心如虛空。以淸淨慧無所礙者。是爲入不二法門。那羅延菩薩曰。世間出世間爲二。世間性空。卽是出世間。於其中不入不出。不溢不散。是爲入不二法門。善意菩薩曰。生死涅槃爲二。若見生死性。則無生死。無縛無解。不生不滅。如是解者。是爲入不二法門。現見菩薩曰。盡不盡爲二。法若究竟盡。若不盡。皆是無盡相。無盡相卽是空。空則無有盡不盡相。如是入者。是爲入不二法門。普守菩薩曰、我無我爲二。我尙不可得。非我何可得。見我實性者。不復起二。是爲入不二法門。電天菩薩曰。明無明爲二。無明實性卽是明。明亦不可取。離一切數。於其中平等無二者。是爲入不二法門。喜見菩薩曰。色色

空爲レ二。色卽是空。非二色滅空一。色性自空。如レ是受想行識識空爲レ二。識卽是空。非二識滅空一。識性自空。於二其中一而通達者。是爲レ入二不二法門一。明相菩薩曰。四種異空種異爲レ二。四種性卽是空種性。如二前際後際空故一。中際亦空一。若能如レ是知二諸種性一者。是爲レ入二不二法門一。妙意菩薩曰。眼色爲レ二。若知二眼性於色一不レ貪不レ恚不レ癡。是名二寂滅一。如レ是耳聲鼻香舌味身觸意法爲レ二。若知二意性於レ法。不レ貪不レ恚不レ癡。是名二寂滅一。安二住其中一。是爲レ入二不二法門一。

（爾の時に維摩詰衆の菩薩に謂ひて言く、諸の仁者、如何か菩薩不二法門に入る。各〻所樂に隨ひて之を說けと。會中に菩薩有り、法自在と名く。說さて言く、諸の仁者、生と滅とを二と爲す。法は本生せず、今則ち滅すること無し。此の無生法忍を得る、是を不二法門に入ると爲すと。德守菩薩曰く、我と我所とを二と爲す。我有るに因るが故に便ち我所有り。若し我有ること無ければ則ち我所無し。是を不二法門に入ると爲すと。不旬菩薩曰く、受と不受とを二と爲す。若し法受けざれば則ち不可得なり。不可得を以ての故に取無く捨無く、作無く行無し。是を不二法門に入ると爲すと。德頂菩薩曰く、垢と淨とを二と爲す。垢の實性を見れば則ち淨相無し、滅相に順ず。是を不二法門に入ると爲すと。善宿菩薩曰く、是れ動、是れ念を二と爲す。動せざれば是を不二法門に入ると爲すと。善眼菩薩曰く、一相と無相とを二と爲す。若し一相卽ち是れ無相なることを知り、亦無相を取らず、平等に入る。是を不二法門に入ると爲すと。妙臂菩薩曰く、菩薩心と聲聞心とを二と爲す。心相空にして幻化の如しと觀ずる者は、菩薩心無く聲聞心無し。是を不二法門に入ると爲すと。弗沙菩薩曰く、善と不善とを二と爲す。若し善不善を起さず、無相際に入りて通達する者、是を不二法門に入ると爲すと。師子菩薩曰く、罪と福とを二と爲す。若し罪性に達すれば則ち福と異ること無し。金剛の慧を以て此の相を沒了して縛無く解無き者、是を不二法門に入ると爲すと。師子意菩薩曰く、有漏と無漏とを二と爲す。若し諸法の等しきことを得れば、則ち漏不漏の想を起さず、相に著せず、亦無相に住せず。是を不二法門に入ると爲すと。淨解菩薩曰く、有爲と無爲とを二と爲す。若し一切の數を離るれば則ち心虛空の如し。淸淨慧を以て所礙無き者、是を不二法門に入ると爲すと。那羅延菩薩曰く、世間と出世間とを二と爲す。世間の性空なれば卽ち是れ出世間なり。其の中に於て入らず出でず、溢れず散せざる、是を不二法門に入ると爲すと。善意菩薩曰く

生死と涅槃とを二と爲す。若し生死の性を見れば則ち生死無く、縛無く解無く、生せず滅せず。是の如く解せる者、是を不二法門に入ると爲すと。現見菩薩曰く、盡と不盡とを二と爲す。法若し究竟して盡き若くは盡きざれば、皆是れ盡相無し、卽ち是れ空なり。空なれば則ち盡不盡の相有ること無し。是の如く入る者、是を不二法門に入ると爲すと。普守菩薩曰く我と無我とを二と爲す。我尙ほ不可得なり、非我何ぞ得可き。我の實性を見る者は復た二を起さず。是を不二法門に入ると爲すと。電天菩薩曰く、明と無明とを二と爲す。無明の實性は卽ち是れ明なり。明亦取る可からず、一切の數を離る。其の中に於て平等無二なる者、是を不二法門に入ると爲すと。喜見菩薩曰く、色と色空とを二と爲す。色卽ち是れ空なり、色滅して空なるに非ず、色性自ら空なり。是の如く受想行識と識空とを二と爲す。識卽ち是れ空なり。識滅して空なるに非ず、識性自ら空なり。其の中に於て通達する者、是を不二法門に入ると爲すと。明相菩薩曰く、四種の異と空種の異とを二と爲す。四種の性卽ち是れ空種の性なり。前際後際の空なるが故に中際も亦空なるが如し。若し能く是の如く諸種性を知る者、是を不二法門に入ると爲すと。妙意菩薩曰く、眼と色とを二と爲す。若し眼性の色に於て貪ならず恚ならず癡ならざる事を知る、是を寂滅と名く。是の如く耳と聲、鼻と香、舌と味、身と觸、意と法を二と爲す。若し意性の法に於て貪ならず恚ならず癡ならざることを知る。是を寂滅と名く。其の中に安住する、是を不二法門に入ると爲すと。

此處に出たる法自在菩薩より妙意菩薩までの十九人は種々の方面より大乘佛教の精神を闡明してゐる。先づ第一に法自在菩薩は生と滅との不二なることを說いた。生滅とは卽ち變化である。吾等の眼前の事物は變化極まりなきものであるが、其の中を一貫して永恆に變らぬ理の存することを知れば、如何に多くの變化にあふとも全く心を動すには足らぬのである。第二に德守菩薩は我と我所との不二なることを說いた。我所とは我が身を托する所の境界をいふのである。我に執することと無く、境界に依ることも無ければ、心はいつも平和安靜なるべきである。第三に不眴菩薩は受と不受との不二を說いた。受とは外界の刺激によつて影響せらるゝこと。不受とは一切外界より影響せられぬことである。此の二者は卽ち迷悟の差とも見らるゝのであるが、迷はやがて悟に入るの階梯であるから、通じて一と見て宜いのである。第四に德頂菩薩は垢と淨との不二を說いた。垢は煩惱であり淨は解脫であるが、煩惱が解脫の緣を作るのであるから、また通じて一と見て宜いわけである。第五に善宿菩薩は動と念との不二を說いた。動とは心の動搖したる狀態をいひ、念とは自己に執著することをいふのである。動といひ念とい

ふも要するに煩惱の致す所の作用に外ならぬものである。第六に善眼菩薩は一相と無相との不二なることを說いた。一相といふも無相といふも畢竟差別相を離れ得たことに外ならぬ。差別とは親疎遠近利害得失等の差別である。斯る差別の外に立てば心はいつも平和である。第七に妙臂菩薩は菩薩心と聲聞心との不二なることを說いた。此の二心は要するに大乘を重んずるか小乘を以て足れりとするかの差であるが、若し小乘を學ぶことは卽ち大乘に入るの階梯であることが明かになれば、兩者畢竟一に歸すべきである。第八に弗沙菩薩は善と不善との不二なることを說いた。不善とは要するに善の不足なるものに外ならぬのであるから、不善より進んで善に入り得べきである。第九に師子菩薩は罪と福との不二なることを說いた。執著が多ければ罪を作り、執著を去れば福を生ずるのである。一心の向ふ所を轉ずれば畢竟一に歸すべきである。第十に師子意菩薩は有漏と無漏との不二なることを說いた。煩惱に役せらるゝは有漏であり、煩惱を掃ひ得たるは無漏である。心が能く理と合致すれば斯る差別の外に立ち得る筈である。第十一に淨解菩薩は有爲と無爲との不二なることを說いた。有爲とは自他を分つ心、無爲とは自他を一にする心である。吾等が修養を怠らなければ、いつか有爲よりして無爲に入り得べきである。



第十二に那羅延菩薩は世間と出世間との不二なることを說いた。世間的生活と出世間的生活とには固より差があるけれども、心一つの持ち方では世間に在りながら出世間の人となり得べきである。第十三に善意菩薩は生死と涅槃との不二なることを說いた。生死とは卽ち人生に於ける有らゆる變化のことである。其の變化の中を一貫する不變の理を觀じ得たるものは、たとへ其身は出死の中に在つても心には出離を得べきである。第十四に現見菩薩は盡と不盡との不二なることを說いた。盡とは一切の惑を破し盡したこと、不盡とはなほ一切の惑を破し盡さぬことである。是れも程度の差であるから、修行を續けて怠らなければ、不盡よりして盡に入り得べきである。第十五に普守菩薩は我と無我との不二なることを說いた。我の本性に大慈悲を發すべき力が潛在するのであるから、その力が發揮されて行きさへすれば無我となり得べきである。第十六に電天菩薩は明と無明との不二なることを說いた。無明とは卽ち惑、明とは卽ち智であるが、智性が漸く發揮されさへすれば、惑は自ら除かるべきに定まつて居る。第十七に喜見菩薩は色受想行識の各に就て、何れも空と不二なることを說いた。色受想行識は皆外界よりの刺激に應じて生じ來る吾等が身心の作用であるが、斯る內外一切の作用が畢竟一に歸すべきことを觀ずるのが卽ち空を觀ずるといふことである。さりながら色受想行識の本性を究めずし

て空を觀ずることの出來るものではない。第十八に明相菩薩は地水火風の四大と空との不二なることを說いた。地水火風は凡ての物質の本であるが、此等四大は空中に於て離合聚散して種々無量の變化を生ずるのである。又空なるものも此等四大を其の中に容るゝによつて初めて存在の意義がある。四大と空とが相依存することを知らなければならぬ。第十九に妙意菩薩は眼耳鼻舌身意の六と色聲香味觸法の六とは何れも不二なることを說いた。眼耳鼻舌身意に生ずる所の欲望を能く自ら制することが出來れば、色聲香味觸法の變化によつて動さるゝといふことはない。斯くして所謂寂滅の境に安住し得るのである。以上の人々の說ける所は、何れも皆『如何なる境遇に在り、如何なる物と人とに對しても常に動搖せざる心』を作らなければならぬといふ點に於て一致して居るのである。此の如きことを能くする人は決して他に對して求むる所がないのであるから、更に進んで世を救ひ人を導くといふ大きな働きも必ず出來るのである。易の繫辭傳に君子の道を說いて

天地と相似たり、故に違はず。知は萬物に周くして道は天下を濟ふ、故に過ぎず。天を樂み命を知る、故に憂へず。土を安んじ仁に敦し、故に能く愛す。

とあるが、眞に此等の人々のためにいへるもの〻如くである。而も此等の菩薩が能く此の如き德を成じ得たのは一に佛の敎化の力であることを思へば、佛の偉大なることを今更ながらに讚歎せざるを得ぬ次第である。

○所樂に隨ひて　不二といふことを種々の方面から說くことが出來るに違ひない。因て各自に其の自ら最も善いと思ふ所を說けよといふのである。○本生せず今則ち滅すること無し　本とは『最初から』といふ意である。生といひ滅といふは現象界のことにすぎぬのであるから、常住不變の理を捉へ得た者は、最初から生といふことに囚はれぬのである。隨てまた滅といふことを念とすべき筈もない。○無生法忍　無生といへば無滅といふことも其の中に含まれて居る　生滅の爲に心を動さぬを無生法忍といふ。忍とは卽ち動搖なきの義である。○不二法門に入る　不二といふは必ずしも二ならずといふのみでなく、三でも四でもないことである。不二法門に入るとは卽ち此の理を體得したるをいふのである。○我有るに由るが故に　我が周圍の境遇の變化を知るものは卽ち我が心である。我が心なければ何事をも覺知すべきやうは無い。○我有ること無ければ　我が心中より一切の煩惱を掃ひ去り、求むる所なく希ふ所なき心となれば、外界の變化が如何樣であつても更に影響せらるゝことは無い。斯く內外共に空なるによつて、衆生の爲に力を盡すべき活作用が生じ來るのである。○受と不受と　外界の刺激によつて

常に影響を受くると受けぬとの差は、卽ち迷悟の差である。併し眞に悟り了つたものは獨り佛のみであつて、其他の者は唯だ程度に於て差異があるのみである。唯だ努めて已まなければ次第に佛の境界に近づき得べきである。○法受けざれば　法とは一切の事物のことである。一切の事物に接して其の影響を受けぬやうになるのは唯だ修行を積んだ結果に外ならぬのである。○不可得　心に何の痕も殘らぬことをいふのである。○取無く捨無く　已に利あるものを取り、已に利無きものを捨てるのが人情である。既に利と不利とに執著せぬ以上は取も無く捨も無い筈である。○作無く行無し　其の心に欲する所を行つて自然と遂に合するのであるから、特に或る作用をしやうとしてするのでも無く、特に或る行ひをしやうとするにも及ばぬのである。○垢の實性を見れば　煩惱の起るのは何故であるかと深く究むることである。煩惱の起る所以を知れば卽ち煩惱を除く道も明かになるわけである。○淨相無し　煩惱が無くなれば卽ち心が淸淨になるので、特に淸淨なる相があるといふわけでは無い。○滅相に順ず　虛妄の念を滅し去つた所が卽ち淸淨なる境界である。○動せざれば　外界の刺激を受けて心が動搖するのは、外に對して求むる所があるからである。若し外に對して求むる所が無くなれば其の心は寂然として不動である。此の如き人は決して自己に執著すること無く、いつも慈悲の念を以て凡ての人に接し得るのである。○分別無し　自他の別を立て、利害得失の別を立てることが無いのである。○一相卽ち是れ無相　吾等の眼前に現はれ來る千差萬別の世界は畢竟唯一絶對の理の發現せるものに外ならぬことを知るは、卽ち一相を知るものである。斯くして有らゆる差別相を離れ去るが故に、之を無相といふも亦可なりである。○無相を取らず平等に入る　取るとは執著することである。無相を觀じ得たりとて之に偏してはならぬ。此の唯一絶對の理が發現して種々の變化を生ぜることを知るならば、變化の中に於て不變化平等の理を認め、其の中に安住し得べきである。變化の中に安住して平等を認むるものをこそ眞に平等觀に達し得たる者といふべきである。○心相空にして幻化の如し　誰も皆佛の境界に到達し得て、絶對唯一の理を觀じ得べきである。賢愚善惡樣々の別はあるが、其等は皆其の途中の過程にすぎぬ。譬へば高山に登る途中に險阻な所もあり平坦な所もあるが、頂上に達して回顧すれば、何れも皆頂上に連るのである。人の賢愚善惡等の差も永久のものではなく、たゞ佛の境界に達する途中の變化にすぎぬと觀ずれば、實に幻化の如しといふべきである。○菩薩心無く聲聞心無し　何れも皆佛心に到達すべき階梯にすぎぬので、畢竟相連つて一であると知るべきである。○善不善を起さず　煩惱より出る身口意の業は盡く不善である。煩惱を掃ひ去れば一切の業盡く皆善である。而も佛な

らぬ者は絶對に煩惱の無くなつたものとはいへぬから、善業といひ不善業といふも要するに程度の差にすぎぬ。故に善なりとて自ら足れりとせず、又不善なりとて徒らに自ら悔まず、唯だ努めて佛の境界に近づかんことをのみ期すべきである。○無相際に入りて通達する　無相際とは凡ての差別を超越したる所をいふのである。佛の境界が卽ちそれである。之を理想として進むことが大乘を學ぶ者の心でなければならぬ。○罪と福と　人に對して罪を犯すは不善の業であある。人の爲に福を作るは善業である。而も善と不善とは程度の差である。譬へば冷い水を漸く熱すれば熱湯となるが如く、不善の業を漸く改めて善に進み得べきである。○金剛の慧　正しき智慧の力には何物も打克つこと能はざる故に之を金剛に比するのである。○此の相を沒了して　罪と福との相を超越して、更にそれよりも高きものを求むるのである。卽ち佛の境界に到達せんことを期するのである。○縛無く解無き　現に煩惱が掃ひ去られて吾が心を縛すべき何物も無くなれば、特に縛を解くための努力も入らぬのである。○諸法の等しきこと　平等の慈悲を以て一切の人に對し、一切の事に接するをいふのである。○相に著せず　一切の差別、一切の變化の外に立つことである。○無相に住せず　自ら悟り得たるを以て足れりとせず、他の各々の迷へる者に對して深き哀愍の念を生ずるが故に、彼等と共に住んで之を教へ導くことに力を盡すのである。○一切の數　一切の差別のことをいふのである。○心虛空の如し　虛空は一切の物を包容して漏さぬものである。菩薩の心も亦此の如くであるべきである。○所礙無き者　一切衆生を救護するための作用が自在に行はれて障礙なきことである。○世間の性空なれば　世間に住して種々の刺激を受けても、之が爲に少しも吾が心を擾さるゝこと無きをいふのである。○出世間　山寺に住まずとも心さへ淨ければ卽ち出家である。○入らず出でず　世間に住しても世間の爲に累を受けなければ世間に入らぬと同樣である。併しながら決して世間を疎んぜず、世間の人々を懇ろに教へ導くのであるから、世間を出でぬとも見らるゝわけである。○生死の性を見れば　有らゆる變化の中を一貫して萬古に亙つて不變なる理の存することを見得たる者が卽ち眞に能く變化の眞性を見たるものである。此の如き人はいつも變化の中に安んじて居ることが出來るのである。○究竟して盡き若くは盡きざれば　一切の惑を斷じ盡した者もあり、或はまた未だ斷じ盡さゞる者もあるが、唯だ是れ修行の程度の差にすぎぬ。久しく努力を積んで怠らなければ共に皆佛の境界に近づき得べきである。○皆是れ盡相無し　盡相無しとは盡と不盡との間に特別の差がないことをいふのである。努めて怠らなければ共に佛と成り得らるゝのであるから、今眼前の差はたゞ一時的の差に過ぎぬのである。○我尙ほ不可得

我に執著すべきでないといふ意である。我に執著することすら惡いのであるから、外に向つて妄りに求め、其の欲望に執著するのは固より不可である。○非我　我より外のもの、卽ち一切の事物のことをいふのである。○我が實性を見る　我が實性は小き我に限らるゝものでなく絶對の理と一致するのである。○二を起さず　妄りに自他を分ちて小き我に執著する念を起さぬのである。○無明の實性は卽ち是れ明　吾等の本性は佛と同じものであるが、其の本性が充分に發揮されぬから無明が起つて居るのである。若し充分發揮された時には卽ち明となるのである。○明亦取るべからず　無明を去つて明を得たりとて、それを自ら恃みとするには及ばぬ。○一切の數を離る　眞に明を得たるものは妄りに自他彼此の差別を立つることは無い。○色空　色とは卽ち外界の刺激を受けて生ずる所の各種の感覺であつて、常に變化して極まり無きものである。併し其の變化の中を一貫して絶對唯一の理が現はれて居ることを見なければならぬ。之を知り得たことを色空を觀じ得たといふのである。○色卽ち是れ空　卽ちとは離れぬことである。色の變化を離れずして、その中に不變化なる理を認めなければならぬのである。○色性自ら空　其の變化して止まぬ中に自ら不變化なる理を宿して居るのである。○受想行識と識空　受とは色卽ち感覺に伴つて生ずる感情である。想とはそれに續いて起る種々なる思想である。行とは意志の作用で、これによつて動作が起るのである。識とは色受想行を統一する作用のことである。此等の作用が一々に皆極まりなく變化するのであるが、其の一々の變化の中に皆唯一絶對の理を現はして居る。これ卽ち識空である。○四種の性卽ち是れ空種の性　地水火風が其の作用を爲すは空間があるからである。若し空間といふものがなければ地水火風の存在すべき所はない。又空間ありと雖も地水火風なければ、空間の存在は全く無意味となる。故に四種を離れて空なく、空を離れて四種無しと見るべきである。○前際後際の空　萬物の存在は始めも無く終りも無い。無始の昔から無限の後まで續くのである。○中際も亦空　其の中間が現在であるが、現在の事物にも一々無限の理が宿つて居るのである。○眼と色と　眼に外界からの刺激を受けて卽ち色を感ずるのである。若し眼があつても何の刺激をも受けなければ色を感せぬ。又刺激が如何に強くとも眼が無ければ固より色を感せぬ。斯く內外相應じて色を感ずるといふ作用が起るのは、內外共に絶對の理によつて統一されて居るからである。耳と聲、鼻と香等に至つても皆悉く此の通りである。○貪ならず恚ならず癡ならざること　貪欲といひ瞋恚といひ、愚癡といひ、何れも皆小き自己に執著するによつて生ずるものである。若し自己の存在がたゞ自己の爲ならず、

絶對の力に護られて一切の人一切の物と共に存することを知るならば、斯る執著を去ることが出來る筈である。○意性の法に於て　法とは卽ち一切の事物のことである。吾等の本性が充分に發揮せらるゝに於ては小き自己に執著する念は無くなり、一切の事物に於て貪欲等の惑を生ずることは無い。○其の中に安住する　寂滅とは一切の事物を無視することでは無い。一切の事物の中に安住し、種々變化の極まりなき中に安住するのが眞の寂滅である。寂滅爲樂といふ語のあるのは之が爲である。

無盡意菩薩曰。布施廻二向一切智一爲レ一。布施性卽是廻二向一切智一性。如レ是持戒忍辱精進禪定智慧。廻二向一切智一爲レ一。智慧性卽是廻二向一切智一性。於二其中一入二一相一者。是爲レ入二不二法門一。深慧菩薩曰。是空是無相是無作爲レ一。空卽無相。無相卽無作。若空無相無作卽無二心意識一。於二一解脫門一。卽是三解脫門者。是爲レ入二不二法門一。寂根菩薩曰。佛法衆爲レ一。佛卽是法。法卽是衆。是三寶皆無爲相。與二虛空一等。一切法亦爾。能隨二此行一者。是爲レ入二不二法門一。心無礙菩薩曰。身身滅爲レ一。身卽是身滅。所以者何。見二身實相一者。不レ起二見身及見一滅身一。身與二滅身一。無レ二無二分別一。於二其中一不レ驚不レ懼者。是爲レ入二不二法門一。上善菩薩曰。身口意業爲レ一。是三業皆無二作相一。身無二作相一。卽口無作相。口無二作相一。卽意無二作相一。是三業無二作相一。卽一切法無二作相一。能如レ是隨二無作慧一者。是爲レ入二不二法門一。福田菩薩曰。福行罪行不動行爲レ一。三行實性卽是空。空則無二福行一。無二罪行一。無二不動行一。於二此三行一而不レ起者。是爲レ入二不二法門一。華嚴菩薩曰。從レ我起レ二爲レ二。見二我實相一者。不レ起二二法一。若不レ住二二法一。則無レ有レ識。無二所識一者。是爲レ入二不二法門一。德藏菩薩曰。有所得相爲レ二。若無所得。則無二取捨一。無二取捨一者。是爲レ入二不二法門一。月上菩薩曰。闇與レ明爲レ二。無レ闇無レ明。則無レ有レ二。所以者何。如下入二滅受想定一無レ闇無上レ明。一切法相亦復如レ是。於二其中一平等入者。是爲レ入二不二法門一。寶印手菩薩曰。樂二涅槃一不レ樂二世間一爲レ一。若不レ樂二涅槃一。不レ厭二世間一。則無レ有レ二。所以者何。若有レ縛則有レ解。若本無レ縛無レ解。則無二樂厭一。是爲レ入二不二法門一。珠頂王菩薩曰。正道邪道爲レ二。住二正道一者。則不レ分二別是邪是正一。離二此二一者。是爲レ入二不二法門一。樂實菩薩曰。實不實爲レ二。實見者尙不レ見レ實。何況非實。所以者何。非二肉眼所見一。慧眼乃能見。而此慧眼無レ見無レ不レ見。是爲レ入二不二法門一。

（無盡意菩薩曰く、布施と一切智に廻向すると を二と爲す。布施の性卽ち是れ一切智に廻向する性なり。是の如く持戒、忍辱、精進、禪定、智慧と一切智に廻向すると を二と爲す。智慧の性卽ち是れ一切智に廻向する性なり。其の中に於て一相に入る者、是を不二法門に入ると爲すと。深慧菩薩曰く、是れ空、是れ無相、是れ無作を二と爲す。空卽ち無相、無相卽ち無作なり。若し空無相無作卽ち心意識無ければ、一解脫門に於て卽ち是れ三解脫門なる者、是を不二法門に入ると爲すと。寂根菩薩曰く、佛と法と衆とを二と爲す。佛卽ち是れ法、法卽ち是れ衆なり。是の三寶皆無爲の相にして虛空と等し。一切の法も亦爾り。能く此の行に隨ふ者、是を不二法門に入ると爲すと。心無礙菩薩曰く、身と身滅とを二と爲す。身は卽ち是れ身滅なり。所以は何。身の實相を見る者は身を見ず、及び滅身を見ることを起さず。身と滅身と二無く分別無し。其の中に於て驚かず懼れざる者、是を不二法門に入ると爲すと。上善菩薩曰く、身口意業を二と爲す。是の三業皆作相無し。身に作相無ければ卽ち口に作相無く、口に作相無ければ卽ち意に作相無し。是の三業に作相無ければ卽ち一切法にも作相無し。能く是の如く無作の慧に隨ふ者、是を不二法門に入ると爲すと。福田菩薩曰く、福行と罪行と不動行とを二と爲す。三行の實性卽ち是れ空なり。空には卽ち福行無く、罪行無く、不動行無し。此の三行に於て而も起さゞる者、是を不二法門に入ると爲すと。華嚴菩薩曰く我に從ひて二を起すを二と爲す。我の實相を見る者は二法を起さず。若し二法に住せざれば卽ち識有ること無し。所識無き者、是を不二法門に入ると爲すと。相を二と爲す。若し無所得なれば卽ち取捨無し。取捨無き者、是を不二法門に入ると爲すと。月上菩薩曰く、闇と明とを二と爲す。闇無く明無ければ卽ち二有ること無し。所以は何。滅受想定に入りて闇無く明無きが如く、一切法相も亦復た是の如し。其の中に於て平等にして入る者、是を不二法門に入ると爲すと。寶印手菩薩曰く、涅槃を樂ふと世間を樂はざると を二と爲す。若し涅槃を樂はず、世間を厭はざれば則ち二有ること無し。所以は何。若し縛有れば則ち解有り。若し本縛無ければ其れ誰か解を求めん。縛無く解無ければ則ち樂厭無し。是を不二法門に入ると爲すと。珠頂菩薩曰く、正道と邪道とを二と爲す。正道に住する者は則ち是れ邪なり是れ正なりと分別せず。此の二を離るゝ者、是を不二法門に入ると爲すと。樂實菩薩曰く、實と不實とを二と爲す。實見の者は尙ほ實を見ず、何に況んや非實をや。所以は何。肉眼の所見に非ず、慧眼乃ち能く見る。而も此の慧眼見ること無く見ざること無し。是を不二法門に入ると爲すと。）

前には凡て十九人の菩薩の所說を便宜上一段としたのであるが、之に續いて無盡意菩薩その他、併せて十二人が同じく不二法門に就て語るのである。先づ無盡意菩薩の說く所は布施等の六波羅蜜と之を以て佛道に廻向するとの不二なることである。六波羅蜜は卽ち菩薩行を總括するものであるが、菩薩行は卽ち佛と成ることを目的とするのであつて、此より外に佛と成るべき道の存すべきやうは無い。之に續いて第二十一に深慧菩薩は空と無相と無作との不二なることを說いた。（不二といふは一であるといふ意であるから、三者が一であるといふ場合にも不二といつてあるのである。）空を空なりと觀ずるによつて心に差別相の無くなつたのが卽ち無相である。無相であれば其の行ひが無作なのであるから、三者は固より離るべからざるものである。第二十二に寂根菩薩は佛と法と衆生との不二なることを說いた。佛は法を說かんが爲に世に出現せられたのである。法は衆生を救はんが爲に說かるゝのである。若し衆生なければ法を說くの要もなく法を說くの要がなければ佛も世に出られぬであらう。第二十三に無礙菩薩は身と身滅との不二なることを說いた。身滅とは卽ち涅槃のことである。此の現實の世に於て此の現實の身をもつて涅槃を得るのが卽ち大乘の涅槃である。第二十四に上善菩薩は身口意の三業の不二なることを說いた。三業は固より相關聯して離る可からざるもので、若し其の一が淸淨になれば他の二も亦隨て淸淨なるべきである。第二十五に福田菩薩は福行と罪行と不動行との不二なることを說いた。不動行とは禪定を得ることである。眞に禪定を得たものは其の一切の言行が全く統一せらるゝのであるから、罪福共に不動行によつて統一せらるべきこと勿論である。第二十六に華嚴菩薩は彼と我との二を立つるの非を擧げて、其の不二なることを說いた。我といひ彼といひ共に絕對の理の中に於ての假の別にすぎぬことを知るべきである。第二十七に德藏菩薩は有所得と無所得との不二なることを說いた。能く取捨を離るゝものは固より一方に執著することの有るべき筈はない。第二十八に月上菩薩は闇と明との不二なることを說いた。闇といふは畢竟明の足らぬものに外ならぬ。二者に絕對的の差別の存すべき筈はない。第二十九に寶印手菩薩は涅槃を樂ふと世間を樂はざるとの不二なることを說いた。世間に處して世間を樂はず又世間を厭はず、自ら涅槃を得たるを以て足れりとせず、進んで世間の衆生を救護することに力を盡すのが卽ち菩薩たる者の志でなければならぬ。第三十に珠頂王菩薩は正道と邪道との不二なることを說いた。邪道に入れる心を翻せば直ちに正道に入ることが出來るのであつて、二者の間に別を立つるには及ばぬのである。第三十一に樂實菩薩は實と不實との不二なることを說いた。萬有の實相を知ることは智慧の完全なものでなければ出來ぬ。一般の者は皆實

相を知らぬのである。併しながら修行を積みさへすれば次第に智慧の眼が開けて實相を見ることが出來るに違ひない。以上諸菩薩の說く所は各大乘の深義を發揮するに足るべきものであるが、此等を盡く綜合するにあらざれば完全なものとはいはれぬのである。因て次の段に至り文殊と維摩とによつて之を綜合したる說明が與へらるゝのであるが、至極の理は言語文字を以て現はし盡さるゝものではない。維摩が默然として說かなかつたのは卽ち最上の說法である。

○布施と一切智に廻向すると　布施は慈悲心の形に現はれたものであるが、又常に布施することによつて其の慈悲心が益々養はれて、益々大きくなるのである。而して結局は佛の大慈大悲の心と一致するのである。佛の御心と一致せる者は、また佛の具へたまふ所の一切智をも具ふることと勿論である。廻向するとは一切智を具ふることを目的として布施を行ずることである。獨り布施のみならず、凡て菩薩道を行ずるは皆佛の境界に到達せんが爲に外ならぬのである。○布施の性　布施は慈悲心の現はれたもので、其の慈悲心が洪大無邊なものになれば卽ち佛なのであるから、布施行の一步一步に佛の境界に近づくべき力が具はるので、佛界と菩薩界とは畢竟通じて一であると見るべきものである。○一相に入る者　修行の一步一步が佛の境界に通じて居ることを能く辨へて、修行を怠らぬ者のことである。此の心さへあれば如何なる困難をも必ず



越えて行くことが出來る筈である。○是れ空是れ無相是れ無作　一切の差別の中を一貫して無差別平等の理が存することを空といふのである。此の空觀が出來て、一切の差別を超越する心となつたのが卽ち無相である。既に無相であれば、世に立ち人に對するに當つて、いつも平等の慈悲心をもつて之に接し、自他を分ち親疎を分ち利害得失を分つやうなことはない。是れ卽ち無作である。此の三者は相聯關して離るゝことの出來ぬものである。たゞ之を解釋する便宜上から假に三つに分けて說くのみのことである。○心意識無ければ　差別に執する心が無くなつたことである。○解脫門　此の三事を明かにし得た者は有らゆる煩惱より解脫し得べきが故に、此の三事を知るのを解脫に入るの門といふのである。○佛と法と衆と　佛法僧を三寶といふのであるが、僧は衆生の中より出て、衆生を敎へ導くために力を用ゆるものである。佛の世に出て法を說きたまへるは實に衆生の爲に外ならぬのである。○佛卽ち是れ法　佛も元は凡夫であつたが法を覺つて佛となり、又衆生の爲に法を說かるゝのである。佛以外に法なく、又法を離れて佛もないのである。○法卽ち是れ衆　佛は衆生の爲に法を說きたまひ、衆生は法を覺つて終には佛の境界に達するのである。法と衆生とは此の如くに不離のものである。○皆無爲の相　畢竟するに皆一に歸すべきものである。○一切の法　一切の事物といふ意に法といふ字を

用ゐてある。萬有の存在は畢竟唯一絶對の理の發現に外ならぬことを知らなければならぬ。○此の行に隨ふ者　此の心を以て常に世に立ち事を處する者のことである。○身と身滅と　其の身に執著する者と、その執著を滅し得たる者とである。執著を滅し得たるは卽ち涅槃である。○身の實相を見る者　多くの罪を作るのも此の身であるが、佛の正法を世に弘むるのも亦此の身である。此の身の生命は百年に滿たぬ、至て短いものであるが此の短い間に於て佛と成るべき因を作ることも出來るのである。煩惱に役せらるゝ生活を一轉すれば、そこに涅槃に入るべき道は開かるゝのである。○身を見及び滅身を見ること　煩惱と涅槃とを全く別けて見ることが間違つて居る。煩惱の身ながらに涅槃を得べき道が見出せるのである。○其の中に於て驚かず懼れず　人生に如何なる變化が起つても之が爲に少しも心を動さずたゞ菩提を求むることにのみ專であれば、いつかは凡夫の境界を脫して佛の境界に近づき得べきである。○身口意業意に思ふ所は自ら身に現はれて行となり、口に現はれて言となる。又口にいふ所は自ら意を動かし、又自ら身の行にも現はれて來る。又身に行ふことは自ら言にも現はれ、自ら意を動すやうにもなるので、三業は常に互ひに相融するものである。其の一を他の二から取り離して考ふることは出來ぬ。○作相無し　小き自己に執著して妄りに親疎を分ち利害得失を別つ念の無くなつたことである。佛の正法を學ぶこと久しきに及んで吾等の本來具有せる佛性が漸く開發されて來れば、必ず斯うなれるものである。○一切法にも作相無し　吾が身口意の業が清淨にして全く執著を離れたものになれば、相對する一切の人、一切の事が皆吾に親しくなり、一として吾を妨げ吾を惱ますものは無くなるのである。○無作の慧　煩惱を去り執著を離れたものは佛と同しき智慧を具ふることが出來、此の智慧によつて一切の言行が導かれ定められて行くのである。○福行と罪行と不動行　人の爲に善を爲せば其の報として樂を受くべきで、これを稱して福行といふ。人に對して惡を爲せば　其の報として苦を受くべきで、之を稱して罪行といふ。不動行といふのは此等の行を超越したる行で、卽ち眞の禪定を得て、如何なる事にも心を動さぬやうになつたことである。福とか罪とかいふことを超越したる不動行こそは佛の御心と一致するものと思はれる。○三行の實性卽ち是れ空　三行共に心一つの作用である。而も此の心には貴き佛性が潛在して居るのであるから、何れの行も結局は佛道を成就するための過程となるべきものである。○此の三行に於て起さゞる者　此の三行が全く異つたものであるといふ考へを起さず、何れの行をも緣として佛道に入らうといふ念をもつて修行を勵むことが肝要である。○我に從ひて二を起す　二とは彼我の別をいふのである。我と他の人との間に差別を置

けば、たとへ他の人の爲に善事を爲しても眞の善事とはならぬ。他の人の惱みを我が惱みとし、他の人の喜びを我が喜びとする念があつてこそ初めて眞の善事を爲し得べきである。○我の實相を見る者　一切衆生と共に生くることが、卽ち我が存在する根本の意義でなければならぬ。我を捨て一切衆生の爲に盡すことが實は我が存在の意義を全うする所以である。○識有ること無し　此處にいふ識とは末那識のことである。末那識とは自己の存在をシツカリと意識する作用である。自己の存在を知ると共に自己以外の人の存在をも知り、自他對立といふことを強く意識するのである。それが元となつて種々の爭闘が起る。若し我を捨て一切衆生の爲に盡すことの貴さを知るものは、此の如き考へを擲ち去ることが出來るから、其の心はいつも平和安穩である。○有所得の相　有所得とは種々の經驗を積み、種々の印象を外界から受けたことをいふのである。卽ち之に依つて自他を別ち親疎遠近を分つ考へが長じて來るのである。○所得無ければ　自他を別つ心の無くなつたことをいふのである。○取捨無し　利害得失の計量を離れたる狀態をいふのである。○滅受想定　受とは外界から受くる種々の刺激のこと、想とは其の刺激に伴つて生ずる念想のことである。受想を滅するといふことは心が決定して、外界から如何なる刺激を受けても之が爲に動搖することの全く無くなつたことである。○闇も無く明



も無き　心が能く決定して、絶對の理と一致し得たる上は凡ての差別の外に超越し得べきことは勿論である。○涅槃を樂ふと世間を樂はざると　世間の樂を求めず、一切の名利の外に立つことは貴い行ひには違ひないが、此に止るならば小乘の涅槃を得たものに過ぎぬ。眞に涅槃を樂ふものは佛の境界に到達することを理想とするものでなければならぬ。佛の境界に近づくに隨ひ、一切衆生を救護すべき力は自ら具はるのである。此の如くであつてこそ佛法を學んだかひがあるわけである。○涅槃を樂はず世間を厭はず　自ら涅槃を得たりとて之に滿足せず、一切世間の惑へる者を救ふことを以て眞の悅びとするのである。斯くて一切の人が惑を去り苦を脫し得れば淨土が實現するのである。此の如き理想を有するものは、現在の世間に如何に苦惱が多くても、世間を厭ふ心を起すことは無い。○本縛無ければ　縛とは卽ち煩惱である。吾等は煩惱の爲に昏まされぬ本性をもつて居るのである。此の本性を發揮し得る時には、煩惱を掃はうとせずとも煩惱は自ら消え失すべきである。○正道に住する者　卽ち佛の御心と一致し得たる者である。佛は邪道を行ずる者に對しても決して之を惡むこと無く、必ず之を教へ導いて正道に歸せしめんことを期せらるゝのである。邪道に入るは畢竟智の足らぬが爲であるから、教への力によつて其の非を自覺せしめ、正道に入らしむることは必ず出來るのである。○實見の

者尙ほ實を見ず何に況んや非實をや　吾が見る所が果して萬有の實相であるか、或は實相でないかと、一々之を證據立てやうとしても到底出來ることではない。常に努めて佛法を學び、心裏の煩惱が漸く消え去るに隨ひ、萬有の實相は自ら心に映じ來るのである。〇見ること無く見ざること無し　强ゐて實相を見やうとせずとも、吾が智慧が明かになるに隨つて、萬有の實相は自ら此の智慧の眼に映じ來り、漏るゝ所は無いのである。

二十餘人の菩薩の說く所はそれ〴〵に方面を異にするが、而も其の歸する所は一である。卽ち一實の道を行ずるに就て如何に吾が心を持すべきかを說くのである。菩薩は佛と成ることを理想として修行を勵むものであるが、佛の覺りたまへる所は唯一絕對の理である。卽ち一實の理である。四教儀に

諸佛菩薩の證見したまふ所は審實不虛なり。

とあり、三藏法數には

一實の相にして中道の理なり。虛妄あることなく顚倒あること無し。

とある。往生要集に

此の一實の境界は卽ち是れ如來の法身なり。

とあるのも同じことをいつたのである。而も斯く一實の理を體得することの出來るのは、何人も本來具有する所の佛性の開發せられたるが爲に外ならぬので、占察經にも

一實の境界とは、謂く衆生の心體本より以來不生不滅自性淸淨にして無障無礙なること猶ほ虛空の如し。

といつてある。菩薩は自ら此の一實の理を體得すると共に一切衆生を誘うて皆共に之を體得せしめんとして常に力を盡すのである、此處に不二法門といふも要するに此の一實の理を自得すべき方法をいふので、僧肇が

世の爲なれば則ち之を法といひ、衆聖の由る所なれば則ち之を門といふなり。

といつたので能く其の意が悉されて居る。

前の佛道品の終りに出たる偈は、菩薩が世に立ち人に接し佛法を弘むるが爲に活動する有樣を描き出して其の詳細を極めたものであるが、斯る活動は皆菩薩の心一つの中から生み出さるゝものである。故に此の入不二法門品には其の心に覺り得たる所に就て說き彼の活動の源泉を明かにするのである。されば羅什は之を說明して

有無迭に用ゆるは佛法の常なり。前品には有を說けり、故に次に空門を說くなり。

といつた。有とは差別のことである。前に菩薩が種々の人に對して種々に法を說くさまを述べてあるのを『有を說けり』といつたのである。次に空門とは空を得るの道といふ意で、空とは卽ち平等のこと、卽ち一實の理のことである。心に得たる所は自ら其の實行に發し、其の實行に發する所は卽ち能く衆を動すのである。故に道生は

既に其の一を悟れば衆事皆得。故に一を衆事の所由と爲すなり。

といつた。無量義經にも

無量義とは一法よりして生ず。

とある。自ら救ひ得ずして人を救ふことは出來ぬ。自ら行ひ得ぬことを人に說いても、人を動すことの出來るものではない。自己を完成することに力を用ゐるのは、卽ち世の爲であり人の爲であることを深く考へなければならぬ。

此の事は獨り佛敎に於てのみならず、儒敎に於ても懇ろに敎へられてある。例へば『中庸』には君子の道を說くこと至て詳密であつて、

君子は動いて而して世々天下の道たり、行ひて而して世々天下の法たり、言ひて而して世々天下の則たり。

といひ或はまた

詩に曰く、嘉樂の君子憲々たる令德あり。民に宜しく人に宜しく祿を天に受く。保佑して之を命じ天より之を申ぬ。故に大德ある者は必ず命を受く。

とあるは之が爲である。又

君子の道は端を夫婦に造す、其の至れるに及びてや天地に察なり。

ともある。更にまた

君子の道は諸を身に本づけ、諸を庶民に徵し、諸を三王に考へて誤らず、諸を天地に建て悖らず、諸を鬼神に質して疑ひ無く、百世以て聖人を俟ちて惑はず。

といふに至つては、其の身を修むるの效果が如何に大なるかを最も明かに語れるものである。

又孔子が舜帝を評した言に

無爲にして治むる者は其れ舜か。夫れ何をか爲さんや、己を恭しくして正しく南面するの

み。

とある。朱子は之を說明して

聖人德盛にして民化す、其の作爲する所有るを待たざるなり。……己を恭しくするとは聖人が德を敬するの容なり。

といつたが、舜は固より天性非凡な人であつたであらうが自ら德を養ふことに力を用ゐて怠らなかつた爲に、天下を感化し得るやうになつたのであらう。心一つが有らゆる力の元であることを知らなければならぬ。

今此の入不二法門品に於て說かるゝ所も、要するに心一つの持ち方であるが、先づ諸菩薩をして各其の見る所を語らしめ、最後に文殊と維摩との所說を以て之を結んだのは、殊に結構の妙を見るべきである。僧肇は之を說明して先づ

經の始めより已來明す所殊なりと雖も、然れども皆大乘無相の道なり。無相の道は卽ち不可思議解脫の法門、卽ち第一義無二の法門なり。

といひ、更に諸菩薩のことに說き及んで

其の歸する所を究むれば一のみ。然るに學ぶ者心を開くに地有り、受習同じからず。或は生滅を觀じて以て本に反り、或は有無を推して以て眞を體し、或は罪福を尋ねて以て一を得、或は身口を察して以て冥寂なり。其の途殊なりと雖も其の會は異らず。異らざるが故に衆人の同じき所を取りて以て此經の大旨を證するなり。

といつたが眞にこれは良い說明である。人々皆性質氣風を異にし境遇を異にして居るから、其の道を求め理を尋ぬる態度もそれ〴〵に異つて居る。併し結局は同じ所に歸着するのである。『本に反る』といひ『眞を體する』といひ『一を得る』といひ、何れも吾等が本來具有せる所の佛性が遺憾なく發揮せられて、絕對の理を體得したことに外ならぬのである。

吾等凡夫は此の如くに貴い本性を有することを自覺せず、常に外界に向つて滿足を求めて居るのであるが、自ら其の心の中に滿足を求むることを知らずして、專ら之を外に求むるは惑へるの甚しきものである。白雄といふ人の詠んだ句に

けふのみの春を歩いてしまひけり

とあるが如何にも面白い。家の中に坐つて居て、小い窓から垣根にはえて居る草を眺め、襟を披いて徐かに風を入れたゞけでも充分に春の長閑さを翫賞することは出來る。『モウ春も終りになる。何處かで心ゆくばかり春の氣分を味ひたい』と其處此處を歩きまはつても、別に春らし

い場所があるわけではない。一日歩きまはつて居るうちに、春は暮れてしまふのである。吾を苦しむるものは吾であるが、吾を救ふものも亦吾である。吾が此の心を離れて、吾を樂ますべきものを何れの處にも求むることは出來ぬ。大日經の中に毗盧遮那佛は金剛手が如何にして佛智を成ずべきかと問へるに對して、

菩提心を因と爲し、大悲を根本と爲し、方便を究竟と爲す。

と說かれ、更に重ねて

云何か菩提とならば、謂く實の如くに自心を知る。

と說かれた。なほ之に續いて

自心に菩提及び一切智を尋求す。何を以ての故に、本性清淨なるが故に。

とある。菩提とは卽ち覺である。正覺を得たるもの卽ち佛であるが、其の覺を得べき本性は吾等も皆もつて居るのである。されば善無畏の作つた『大日經疏』には

此の法何れの處より得るや。卽ち是れ行者の自心のみ。若し能く實の如くに觀察し、了々として證知すれば、是を菩提を成ずと名く。其れ實に他に由りて悟らず、他よりして得ざるなり。問ひて曰く、若し卽心是れ道ならば、何が故に衆生は生死に輪廻して成佛を得ざる。答へて曰く、實の如くに知らざるを以ての故なり。

と說明してある。吾等が皆道を求め智を磨き、漸く道を觀ること了々たるに至れば、必ず大悲心が生じて來るのである。

大悲心とは卽ち一切衆生を深く哀愍するの心である。一切衆生悉く淸淨なる本性を有し、盡く佛と成り得べきものでありながら、更に之を自覺せず、煩惱に役せられて每日を送つて居る。之をたゞ『愚なものである』と冷淡に看過することは出來ぬ。『吾も亦昨日まではあの通りであつた』と反省して見ると、彼等に覺醒を與へずして此儘に過ぐることはどうしても出來ぬのである。之によつて『如何にもして彼等の惑を除き彼等の苦を除いてやりたい』といふ念が起つて來る。是れ卽ち大悲心である。此の大悲心よりして種々の方便が案じ出さるゝのである。種々の方便を以て法を說くのは要するに聽く者の機根に應じての事であるから、必ず後には眞實の道を覺ることが出來るやうにしてやらうといふ考への上に立つので、大集經に

能く衆生を調じて　悉く阿耨多羅三藐三菩提に趣向せしむ、是を方便と名く。

とあるによつて能く其の意は悉されて居る。阿耨多羅三藐三菩提とは卽ち佛智である。『衆生を調じて悉く』といふ中には善人も惡人も、智者も愚者も皆含まれて居る。其等一切の衆生に對し

て、それ〴〵の機根に合ふやうに方便が用ゐらるゝのであるが、結局は其等の凡ての者をして共に佛智を求むる念を起さしめんがためであるといふ。此の如き洪大なる慈悲心を有してこそ眞に菩薩の名を辱めぬものと稱すべきである。

斯く一切衆生を救護せんがために種々の方便を以て教へを說くことに、絶えず力を盡して居る間に益々其の智が磨かれて、終には佛の境界に到達するのである。それ迄の努力は實に非常なものであるが、如何に努力したればとて無より有を生ずることの出來るものではない。其の本性が絶對の眞理に合致すべきものであるが故に、多くの努力を重ねて行く間に其の本性が充分に開發せられて、終に佛智を具ふるに至るのである。無盡意菩薩の言に『布施の性は卽ち是れ一切智に廻向するの性なり』とあるが、獨り布施のみならず、菩薩の行ずる一切の事の中には盡く皆佛智を成就すべき力が含まれて居るのである。而も菩薩が最初から菩薩なのではなく本來凡夫であつたものが漸く修行を重ぬることによつて此に到達したのである。凡夫の心の中に佛とも菩薩ともなるべき心が潛在して居たのが佛法を學ぶによつて漸く伸びて行つたもので、華嚴經に

三界の所有唯だ是れ一心。

といひ更にまた

心と佛と及び衆生と是の三無差別なり。

とあるは能く此の理を言ひ現はしたるものである。

此の一心より外に吾を救ふべき力を有するものはない。吾を救ふ力はやがて發展して一切衆生を救ふ力ともなるのであるから、何よりも大切なのは此の心一つである。なほ華嚴經の中には

初發心の時に便ち正覺を成ず。

といふ語もある。初發心とは佛の正法を學ばうといふ決心をした時のことである。此の決心をした時に、正覺卽ち佛の覺を成ずべき道が開かれたのである。佛と凡夫との距離は非常に遠いものであるけれども、初發心の時の考へを改めずして一歩一歩と進んで行けば、終には佛の境界に到達することも出來るので、譬へば東京から西へ向つて歩き出して、その歩みを止めずに居ればいつか京都へも神戸へも到着するのと同樣である。併しながら其の途中に於て或は疲れて進めなくなることもあり、或は正しい大道を離れて横徑へ迷ひ込まうとすることもある。その時に自ら勵まして前進を續け、或は自ら戒めて横徑へ足を踏み込まぬやうにすることが肝要

である。又自己一人の成佛を期するために修行するのでないといふことは、前から度々述べた通りであるから、他の多くの後れた人々をさし招いて自分と共に前進させ、又横徑へ外れかゝつた者を戒めて正しい道へ引戻すやうに努めなければならぬ。たとへ横徑へ外れた者でも、進まうといふ念は兎も角も持つて居るのであるから、珠頂王菩薩がいふ通り『是れ邪是れ正と分別せず』、彼等に對しても充分の同情をもつてやらなければならぬ。華嚴經の中には『菩薩に十種の大悲あつて常に衆生を觀ず』といふことを擧げて

衆生の歸依する所なきを觀察して大悲を起し、衆生の邪道に隨逐するを觀察して大悲を起し、衆生の貧しくして善根なきを觀察して大悲を起し云々

とあるが、此の如き心は能く佛の御心と一致するもので、卽ち成佛の因となるのである。

如是諸菩薩各々說已。問文殊師利。何等是菩薩入不二法門。文殊師利曰。如我意者。於一切法。無言無說。無示無識。離諸問答。是爲入不二法門。於是文殊師利問維摩詰。我等各自說已。仁者當說。何等是菩薩入不二法門。時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰。善哉善哉。乃至無有文字語言。是眞入不二法門。說是入不二法門品時。於此衆中。五千菩薩皆入不二法門。得無生法忍。

（是の如く諸〳〵の菩薩各々說き已りて文殊師利に問ふ、何等か是れ菩薩不二法門に入ると。文殊師利曰く、我が意の如きは、一切の法に於て、言も無く說も無く示も無く識も無し。諸〳〵の問答を離るゝ是を不二法門に入ると爲すと。是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、我等各〳〵自ら說き已んぬ、仁者當に說くべし。何等か是れ菩薩不二法門に入ると。時に維摩詰默然として言無し。文殊師利歎じて曰く、善い哉善い哉。乃至文字語言有ること無し、是れ眞に不二法門に入るなりと。是の入不二法門品を說ける時、此の衆の中に於て五千の菩薩皆不二法門に入り、無生法忍を得たりき。）

入不二法門品はこゝに其の終りを告ぐるのであるが、今まで二十餘人の菩薩の說いた所を綜合して見ると、入不二法門といふことの意義はほゞ盡されて居るやうである。併しながら言語や文字によつて現はさるゝ所には固より限りがある。いかに巧みに說き委しく語つても、最も深遠なる理を現はし盡せるものではない。其の言ひ難く語り難き所は、唯だ心より心に傳ふるより外に道はないのである。言語文字は畢竟學ぶ者をして心に深く之を玩味せしむべき便りを與ふるものに過ぎぬ。孟子は博辯宏辭を以て知られた人であるが、其の弟子公孫丑のために

『何をか浩然の氣といふ』と問はれた時には、之を説明することなく、言ひ難きなり。其の氣たるや至大至剛、直を以て養ひて害すること無ければ天地の間に塞がる。

といひ、浩然の氣の本性に就ては何もいはなかつた。それは到底言語を以て悉すことの出來ぬものであるからである。又芭蕉は俳聖と稱せられた人であるが、其の葬式の時に直愚上人の讀んだ法語には

五十一年、一字不說。

とあつた。芭蕉が如何に俳聖でも其の胸中に感じた所を言語文字に現はし盡せるものではない。其の句を讀むものは、其の十七字を便りとして、何百千言にも言ひ盡されぬ意味を心に深く味はなければならぬのである。文學藝術等に於てすら、其の極致は言說の外に在る。況して や大乘の深義を知らんとするものが言語文字を解し得たるを以て足れりとすべきでないことは、平生充分に心得て居なければならぬ所である。文殊師利が『諸の問答を離るゝこと』を擧げたのはまことに適切であるが、維摩詰が默然として一語をも發しなかつたのは更に適切である。此の無言の教へは千萬言にも勝れる大なる力であつたに違ひない。



○一切の法に於て　此の法といふ字には法の凡ての意義が含まれて居る。前にもいつた通り法といふ字が或る場合には法則とか、法度とかいふ意に用ゐられる。又實在といふ意にも用ゐられ、一切の事物といふ意にも用ゐらるゝのである。此處にいふ法は凡て此等の意義を包容したるものである。凡てのものゝ眞實の相は言語文字を以て現はし得べきではない。○言も無く說も無く　言說が全く無用だといふのではない。言說を以て悉されぬといふことを知らなければならぬといふのである。一片の雲の動くのでも、一輪の花の開くのでも、深く心に之を味へば天地の妙機が此處に現はれて居る。之を言語文字を以て說き盡すことは出來ぬ。○示も無く識も無し　其の眞相を說き示さうとしても決して悉されぬ。又之を人に說き傳へて完全なる知識を與へやうとしても出來ることでは無い。○諸の問答を離る『難問答に巧なり』とは菩薩の弘教に就て最も大切なる條件の一とせられて居るのであるが、問答によつて聽く者を啓發する力は確かに大なるものである。併しながら問答のみによつて眞の覺を與ふることは出來ぬ。最後に於ては獨り深く心に之を案じて自ら覺るべきのみである。○默然として言無し　文殊は言語文字を離るべしといつたが、なほ自ら言語を費して居る。維摩は一言をも費さずして、絕對の理は言語文字を離れ、唯だ心に之を會すべきものなる

ことを示した。道生が之を評して『言迹は無言に盡く』といつたのは能く當つて居る。

此の維摩詰の無言といふことに因んで、羅什は脇比丘と馬鳴との故事を語つた。此の脇比丘は佛滅後六百年頃の人であるが、禪定を得んがために晝夜工夫を凝し、少しも横臥することなく脇の地に着くことが無かつたので、脇比丘と稱せられたのである。然るに其の頃婆羅門の學者に馬鳴といふ人があつて、大辯才あり多くの弟子に歸依せられて居た。此の人が脇比丘の名を聞き多くの弟子を率ゐて之を訪ひ、

一切の論議皆破す可し。若し我汝が言論を破すること能はずんば、我が首を斬りて謝すべし。

といつたが脇比丘は默然として答へなかつた。馬鳴は此の有樣を見て憍慢の念を發し、『彼は徒に空名あり、實は知る所無きものなり』といひ、其の弟子と共に之を捨て去つたが、中路にして飜然として悟る所あり、其の弟子を顧みて『此の人大智慧有り吾が及ぶ所にあらず』といつた。弟子等は之を聞いて其の意を解し得ず、その理由を問うた。時に馬鳴は之に答へて。

我言へり、一切の語言破す可しと。卽ち是れ自ら破するなり。彼言はざれば則ち破する所無し。

といひ、直ちに脇比丘の所へ返つて、其の罪を謝し、改めて其の弟子となつて佛法を學び、後には非常なる大德となつた。羅什は此の事を語り終つて、之に附け加へて

夫れ默語殊なりと雖も宗を明すは一なり。所會一なりと雖も而も迹に精麁あり。無言といふこと有るは、未だ無言といふこと無きに如かず。故に默然の論は論の妙なるものなり。

といつた。羅馬の諺にも『言語は銀なり、沈默は金なり』といふのがある。結局多言は無言に及ばぬものである。

併しながら言語を盡して後でなければ沈默の貴きことは分らぬ。最初より沈默するのが貴いといふことではない。維摩詰も前から段々と文殊師利との間に問答を重ね、縱橫の辯を以て多くの人々を啓發し、多くの利益を與へ、その終りに於て無言になつたのである。卽ち言を盡して說いて後に、言を以て盡し難きものあることを示したのである。此の經の最初、佛國品に於て諸菩薩の德を稱せる中にも

念定總持辯才斷えず。

とあり、法を說くの大切なることは明かに示されてある。又長者の子等が佛を讚せる偈の中にも佛の說法の貴きことを稱へて

佛一音を以て法を演説したまへば衆生類隨ひて各解を得。

とある。又無量義經の德行品に於て、諸菩薩が釋尊を讃したる語の中にも

梵音雷震して響に八種あり、微妙清淨にして甚だ深遠なり。

とあり、佛の說法の貴きことを稱へて居る。佛菩薩は大慈悲心あつて、如何にもして衆生を覺醒せしめんと思はるゝが故に、種々に語を盡して之が爲に道を說かるゝのである。併しながら如何に言を盡しても絕對の妙理を語り盡すことの出來るものではない。それは唯だ人々をして自ら案じて自ら得しむるより外に道はないのである。

されば教へを聽く者は先づ言語文字を緣として教へに入り、後には言語文字を離れて其の理を體得すべきである。而も其の言語文字に對するに當つては、いつも深く之を玩味して、其の言語文字の底に深く存する所の理を酌み取ることに意を用ゐなければならぬ。月を指す指といふ譬喩は前にも引いたが、指を擧げて月を指すのは、月の在る所を示さんが爲である。若しその指のみを見て、月を見ぬものがあれば、指も亦其の用を爲さぬことになる。されば楞伽經には

愚の月を指すを見て、指を護りて月を觀ざるが如く、名字に計著する者は我が實の心を見ず。

とある。また圓覺經には

修多羅の教は月を標す指の如し。若し復た月を見て了知すれば、標す所のものは畢竟月にあらず。一切の如來の種々の言說、菩薩に開示するも亦復た是の如し。

とある。月を示すための指であるから、既に月の在る所が分つてしまへば指の要はないわけである。併しながら月の在る所を知るまでは指を無用といふわけには行かぬ。指の用を無視するものも愚である。又指にのみ眼をつけて何時までも月を見ぬ者も愚である。初めは指に依つて月を見、月の在る所が分つて後は指を離れて月のみを見るのが宜いのである。維摩詰が縱橫に談論して後に默然として言はぬといふは眞に能く道を說くものといふべきである。語るも默すも共に其の慈悲心の現はれたものと思へば、共に限りなく貴いことである。佐藤一齋の言志錄に

誘掖して之を導くは教の常なり。警戒して之を喩すは教の時なり。弱行以て之を率ゐるは教の本なり。言はずして之を化するは教の神なり、抑へて之を揚げ、激して之を進むるは教の權にして變なり。教も亦術多し。

とあるが、眞に能く世を導き人を教へんとする者の苦心は非常なものである。大慈悲心ある者

にして初めて之を能くすべきである。

## 香積佛品第十

維摩詰と文殊師利との問答は次第に重疊し來つて、大乘佛教に於ける重要なる問題の殆んど凡てに亘り、維摩が默然として言はぬといふことを以て其の終りを告げた。此以上に談論すべきことは何も無い。維摩と文殊との辯を以ても說き盡せぬものがあるといふ以上は、もはや他の者が言を挾むべき所はないわけである。茲に於て局面は一轉して香積佛より香飯を請ひ來るといふ一段となつた。是れは信の力の如何に大なるかを示さんがためである。信の力は人間界のみならず、如何なる世界にも通ずるものである。維摩詰は娑婆世界に住む者であつて、香積佛の住したまふ所の衆香國とは非常に隔つて居る。併しながら維摩詰の請ふ所は直ちに香積佛の容るゝ所となり、香飯を惠まれたのである。維摩詰は娑婆世界に在つて釋迦牟尼佛の御弟子となり、修行を積むこと既に歲久しく、信解共に遙かに群を抜き衆の模範となつて居た人である。釋迦一佛を信ずるものは卽ち凡ての佛を信ずる者である。十方世界に如何に多くの佛があつても、其の具へたまふ所の德は皆一である。又其等諸佛の說きたまふ所の敎へは各相異るが





如くに見えても、其の歸する所は卽ち一である。故に釋迦牟尼佛を信ずるものは、實に十方世界の有らゆる佛を信ずる者であつて、其の信の力は獨り釋迦牟尼佛の御心に感應するのみならず、十方世界の諸佛にも感應するわけである。されば維摩詰の請ふ所を香積佛が容れられたといふに何の不思議もない筈である。吾等は釋迦牟尼佛の敎へたまふ所が十方世界の有らゆる佛の御心と一致するものであること、卽ち唯一絕對の敎へであることを知るが故に、之に對して誠心を以て歸依することが出來るのである。若し此の事を信じなければ、吾等は釋迦佛に向つて絕對の信を捧ぐることは出來ぬわけである。されば此の香積佛品に記された所は、吾等の信を固むるために大なる力となるものと申すべきである。

又此の香積佛品の後段に於ては彼の衆香國の諸菩薩が遙々と此の娑婆世界に來下するといふことが記されてある。それは維摩詰と面會し、又釋迦牟尼佛に謁して其の德を讚嘆せんが爲だとある。斯くて其等の諸菩薩は維摩詰のもとに來つて『釋迦牟尼佛は何を以て說法したまふか』と問ひ、維摩詰は釋迦牟尼佛が種々の方便を以て衆生を敎へ導きたまふ有樣を委しく物語つた。此の娑婆世界の衆生は多く心が邪曲であるから、之を敎へ導くには非常なる努力を要するのであるが、釋迦牟尼佛は少しも之を厭ひたまふこと無く其の化導を續けらるゝのである。維

摩詰が此等の事を說くを聽いて、彼の諸菩薩は『未曾有なり』と歎じた。更に維摩詰は彼の諸菩薩の問に答へて、『此の娑婆世界に於て菩薩道を行じ、衆生に利益を與ふる功德は他の世界に於ける百千劫の間の行よりも勝つて居る』といひ、其の困難が多いのに比例して其の功德も亦大なることを詳說した。此の維摩詰の所說は吾等の如くに此の娑婆世界に於て大乘を學ぶ者に大なる敎訓となり、大なる勇氣を與ふるものである。吾等は困難の多いだけ功德も亦大であるといふことを信じて、如何なる勞苦をも堪へて行くことが出來る。殊に其の結末に於て擧げられたる八ケ條の心得は、今日の如くに複雜なる世に立つて信心を勵む者に取つて最も適切なる敎訓である。吾等は共に勵ましあつて共に此の心懸けを失はぬやうにしなければならぬ。

於レ是舍利弗心念。日時欲レ至。此諸菩薩當二於レ何食一。時維摩詰知二其意一而語言。佛說二八解脫一。仁者受行。豈雜レ欲レ食而聞二法乎一。若欲レ食者。且待二須臾一。當レ令レ汝得二未曾有食一。時維摩詰卽入二三昧一。以二神通力一示二諸大衆一。上方界分。過二四十二恒河沙佛土一。有レ國名二衆香一。佛號二香積一。今現在。其國香氣。比二於十方諸佛世界人天之香一。最爲第一。彼土無レ有二聲聞辟支佛名一。唯有二淸淨大菩薩衆一。佛爲說レ法。其界一切。皆以レ香作二樓閣一。經二行香地一。苑園皆香。其食香氣。周二流十方無量世界一。時彼佛與二諸菩薩一。方共坐食。有二諸天子一。皆號二香嚴一。悉發二阿耨多羅三藐三菩提心一。供二養彼佛及諸菩薩一。此諸大衆莫レ不二目見一。時維摩詰問二衆菩薩一言。諸仁者。誰能致二彼佛飯一。以二文殊師利威神力一故。咸皆默然。維摩詰言。仁此大衆無乃可レ恥。文殊師利曰。如二佛所一言。勿レ輕二未學一。於レ是維摩詰不レ起二于座一。居二衆會前一。化二作菩薩一。相好光明。威德殊勝。嚴二於衆會一。而告レ之曰。汝往二上方界分一。度下如二四十二恒河沙一佛土上。有レ國名二衆香一。佛號二香積一。與二諸菩薩一方共坐食。汝往到レ彼。如二我辭一曰。維摩詰稽二首世尊足下一。致レ敬無量。問二訊起居一。少病少惱。氣力安不。願得二世尊所レ食之餘一。當下於二娑婆世界一施二作佛事一。令中此樂二小法一者得レ弘二大道一。亦使二如來名聲普聞一。時化菩薩。卽於二會前一。昇二于上方一。擧レ衆皆見下其去到二衆香界一禮中彼佛足上。又聞二其言一。維摩詰稽二首世尊足下一。致レ敬無量。問二訊起居一。少病少惱。氣力安不。願得二世尊所レ食之餘一。欲下於二娑婆世界一施二作佛事一。使中此樂二小法一者。得レ弘二大道一。亦使二如來名聲普聞一。

（是に於て舍利弗心に念へらく、日時至らんと欲す。此の諸の菩薩當に何をか食すべきと。

時に維摩詰其の意を知りて語りて言く、佛八解脫を說きたまふ、仁者受行す。豈に食を欲すること を雜へて而して法を聞かんや。若し食せんと欲せば且く須臾を待て。當に汝をして未曾有の食を得しむべしと。時に維摩詰卽ち三昧に入り、神通力を以て諸の大衆に示す。上方の界分に、四十二恒河沙の佛土を過ぎて國有り、衆香と名く。佛を香積と號し、今現に在す。其の國の香氣十方の諸佛の世界の人天の香に比ぶるに最も爲れ第一なり。彼の土には聲聞辟支佛の名有ること無く、唯だ淸淨の大菩薩衆のみ有り。佛爲に法を說きたまふ。其の界の一切皆香を以て樓閣を作り、香地に經行し、苑園皆香し、其の食の香氣十方無量の世界に周流す。時に彼の佛諸の菩薩と方に共に坐して食す。諸の天子有り皆香嚴と號す。悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發して彼の佛及び諸の菩薩を供養す。此の諸の大衆目に見ざる莫し。時に維摩詰衆の菩薩に問ひて言く、諸の仁者誰か能く彼の佛の飯を致さんと。文殊師利の威神力を以ての故に咸く皆默然たり。維摩詰言く、仁、此の大衆乃恥づ可きやと。文殊師利曰く、佛の言ふ所の如し、未學を輕んずること勿れと。是に於て維摩詰座を起たず、衆會の前に居して、菩薩を化作す。相好光明威德殊勝にして衆會を蔽ふ。而して之に告げて曰く、汝上方の界分に往け。四十二恒河沙の如き佛土を度りて國有り、衆香と名く。佛を香積と號す、諸の菩薩と方に共に坐して食したまふ。汝往きて彼に到り、我が辭の如くに曰せ。維摩詰世尊の足下に稽首し敬を致すこと無量なり。起居を問訊す、少病少惱にして氣力安きや否や。願はくは世尊食する所の餘を得て、當に娑婆世界に於て佛事を施作し此の小法を樂ふ者をして大道を弘むることを得しむべし。又如來の名聲をして普く聞えしめんと。時に化の菩薩卽ち會の前に於て上方に昇る。衆を擧げて皆其の去りて衆香界に到り、彼の佛の足を禮するを見る。又其の言ふことを聞く、維摩詰世尊の足下に稽首し敬を致すこと無量なり。起居を問訊す、少病少惱にして氣力安きや否や。願はくは世尊食する所の餘を得て、娑婆世界に於て佛事を施作し此の小法を樂ふ者をして大道を弘むることを得しめんと欲す。亦如來の名聲をして普く聞えしめんと。）

維摩詰が衆香國より香飯を請ひ來るといふ不思議なことを現ずる前提として、先づ最初に舍利弗が諸菩薩のために食事に就て懸念することが記されてある。舍利弗は釋尊の御弟子中に於ては第一の先輩であるから、自分等よりも更に德の高い諸菩薩のために斯る心使ひをしたのはさもあるべき事であるが、之に就て羅什は說明して

舍利弗獨り念を起すには其の旨三あり。一には結業の體未だ資無きこと能はず。二には意を

大方に絶てども法を樂むこと深からず。三には己が有待を推して衆も亦然らんと謂ひ、弟子の上に處りて宜しく衆の爲に供を致すべしとせるなり。

といつた。結業の體といふは卽ち此の肉體のこと。資無きこと能はずといふのは食物なくしては支へられぬことである。意を大方に絶つといふは世間一般の人の求むるもの、卽ち名利等を求むる念は無くなつたといふ義である。併し未だ法を樂むこと深からぬが故に、食事などに心を勞するのである。有待とは衣食等を待つて初めて保たるべき身をいふのである。諸菩薩は道を樂むこと深きが故に食事などは全く念頭に無いけれども、舍利弗は自己の心を以て諸菩薩を忖度し、諸菩薩の爲に心配をしたのである。彼はまことに親切にして忠實なる人であつたが、其の知り得たる所は未だ深からず、諸菩薩とは大なる懸隔があつた。是れ維摩詰の一喝を免れなかつた所以である。

維摩詰は『豈に食を欲することを雜へて而して法を聞かんや』と一喝しながら、却て舍利弗の求むる所を容れ、香飯を衆香國に請うた。それは飯を請うて諸菩薩に饗することが主ではない。飯を請ふことを緣として、信の力の偉大なることを示さんが爲である。前にいふ通り釋迦牟尼佛の敎へたまへる所は卽ち十方世界の諸佛の御心と一致せるものであるから、此の敎へを深く信ずるものは、十方世界の有らゆる事を照し見る力を具へ、又十方世界の諸佛の御心を推度することも出來るわけである。舍利弗等はまだ此の如き力を具へては居ないけれども、努めて怠らなければ後には必ず斯る境地にも到達し得べきである。故に維摩詰は文殊と問答して、彼等を輕んせぬといふ意を明かにし、彼等を大に勵ましたのである。是れ亦大菩薩の具有する大慈悲心の發露と見るべきものである。



○舍利弗心に念へらく　舍利弗は前にも諸菩薩の爲に坐すべき床の無いことを憂へたが、今また食事の時刻に迫つて其の設けの無いことを憂へた。其の親切なる性質がよく現はれて居る。客を待つに當つて、座を設け食を供するのは當然の禮である。然るに維摩詰が此の當然の事をせず、客の疑惑を起すのを待つて居たのは、之を端緒として敎へを說かんが爲であつて、其の慈悲心の洪大なることは遠く舍利弗等の上に在る。○八解脫　これは前にもいふ通り、別名を八背捨ともいひ、要するに一切の貪愛を捨て心に禪定を得る道を敎へられたものである。八解脫を學びながら食を念ふが如きは、信ずる所の甚だ深からざる者といふべきである。○食を欲することを雜へて而して法を聞かんや　法を聞くの悅びを深く感ずるならば、飢寒等は一切忘れて居るべき筈である。勿論舍利弗は自身のためで無く、諸菩薩の爲に心配したのであるが、

兎に角食事などに心が向くといふのが法を聞くことの悦びを深く感ぜぬ證據である。○佛爲に法を說きたまふ　常に大乘のみが說かるゝ國である。此の娑婆世界とは非常に懸絶して居るのである。後に至つて斯る國から諸菩薩が態々此の娑婆世界へ來て釋尊を讃歎するのである。○十方無量の世界に周流す　獨り衆香世界のみならず、其の香は他の國にまで及ぶのである。佛の德の及ぶ所も亦此の如くである。○彼の佛及び諸の菩薩に供養す　其の慈悲洪大なるが故に供養を受くるのである。此の供養の餘りを維摩詰が受け得られたのも、亦其の慈悲の洪大なるが爲である。○此の諸の大衆　維摩詰と共に居る大衆が盡く其の衆香國の有樣を明かに見たのである。○誰か能く彼の佛飯を致さん　其の信力能く彼の香積佛の御心に徹する者でなければ、其の香飯を請ふことは出來ぬわけである。○文殊師利の威神力を以て　文殊の心が大衆の心に通つたので、大衆は自己の力の遠く維摩詰に及ばぬことを自覺し、誰も口を開く者は無かつたのである。○恥づべきや　大衆が維摩に比して力の足らぬ者であつても、少しも恥づるには及ばぬ。今より後努めて怠らなければ後には維摩の如き人にもなり得らるゝのである。維摩は此の意を以て文殊に問うたのである。維摩の慈悲心が此の一言にも現はれて居る。僧肇は之を評して『未成のものを勵ますなり』といつた。○未學を輕んずること勿れ　文殊も維摩と同じ考へであるから、斯く答へて大衆を勵ましたのである。○菩薩を化作す　維摩自身と少しも異らぬほどの威德勝れたる、一人の菩薩を出現せしめ、之に彼の衆香國へ赴くべきことを命ずるのである。以て維摩の信力は何れの世界にも通ぜざること無きを見るべきである。○少病少惱　佛は固より常に安穩であるが、法を說くことに力を盡さるゝ故に、斯く申して慰問するのである。○佛事を施作し　衆生を敎化することを佛事といふのである。維摩詰は佛の御力の洪大無邊なることを示して、娑婆世界の衆生に敎化を與へんことを願つたのである。○小法を樂ふ者　信の力の極めて大なることを知らぬ者のことである。羅什が『樂ふこと遠きに勝へざる者を皆名けて小と爲すなり。但だ小乘のみをいふに非ず』といつたのは能く當つて居る。○大道を弘むることを得　他の世界の佛までを動すことが出來ると知るならば、大に奮發して菩薩道を勵み、後には普く世間を感化することも出來るやうになるであらう。○如來の名聲普く聞え　香積佛より娑婆世界へ香飯を與へられたことによつて、佛の御名は普く娑婆世界に弘まる。之によつて釋迦牟尼佛に歸依する者は獨り釋迦牟尼佛のみならず、他方の佛にも護られて居ることを知り、一層信を增すに至るであらう。其の功德はまことに莫大である。○衆を擧げて維摩詰と共に居る人々が眼のあたり之を見て、信の力の大なることを深く感じたのである。

此處に維摩詰の遣はせる化の菩薩が香積佛の所へ赴いて、恭しく慰問の語を述ぶるさまが寫されてあるが、之を法華經の寶塔品及び涌出品に記さるゝ所と對比して見ると頗る興味が深い。寶塔品には十方の世界から靈鷲山に來集したる諸佛が各寶樹の下なる師子の座に坐し、侍者を遣はして釋迦牟尼佛を問訊して

少病少惱にして氣力安樂にましますや。及び菩薩聲聞衆も悉く安穩なりや否や。

といひ、華を散じて佛に供養せしめたことが記されてある。又涌出品に依れば、大地の中から涌出したる諸菩薩が釋迦牟尼佛の前に立つて恭しく合掌し、

世尊少病少惱にして安樂に行じたまふや不や。度すべき所の者教を受くること易きや不や。世尊をして疲勞を生せしめざるや。

と問訊せるに對し、釋迦牟尼佛は

諸の善男子、如來は安樂にして少病少惱なり。諸々の衆生等は化度す可きこと易し、疲勞有ること無し。

と答へられたとある。維摩詰は娑婆世界より使を遣はして他方の世界の香積佛を慰問し、法華經に出たる諸菩薩は他方より此の娑婆世界へ來て釋迦牟尼佛を慰問したのである。之を併せ考へて見ると、十方世界の佛と衆生とが共に深き緣あるものであるといふことが知らるゝのである。佛は絕對の眞理を體得せられたるものであるが、絕對の理は固より唯一つでなければならぬのは言ふに及ばぬことである。諸佛が成佛までに經て來られたる徑路はそれ〴〵に皆ちがふであらうが、既に成佛せられたる以上は全く同じ境地に在るにちがひ無い。されば一佛に歸依したものは凡ての佛に歸依したと同等であつて、一佛の悅ばるゝことは凡ての佛の稱歎せらるゝ所でなければならぬ。法華經の寶塔品の偈は前にも度々引いたが、末法の世に於て此の經を深く信じ、又之を世に弘むるために力を盡すものゝ功德をほめられて、

此經は持ち難し、若し暫くも持つ者は我卽ち歡喜す、諸佛も亦然なり。

とある。釋尊の歡喜せらるゝやうな行ひは卽ち諸佛の歡喜せらるべき行ひなのである。

又一切衆生が悉く佛性を具へて居るといふことも今まで屢々いつた所であるが、此の佛性なるものは種々あるので無く、人々の具有する所のもの悉く同一でなければならぬ。これは佛と成る種である。佛が皆同じ佛である以上は、其の種も亦同じ性質のものに違ひない。金を含有する礦石には種々あつても、その中から採つた精金は皆同じ性質の精金である。但し礦石の性質が種々に異つて居る以上は、その中から精金を採る方法に相異のあるべきは勿論である。是れ

卽ち佛が種々の方便を以て教へを說かれたる所以である。種々の方便を用ゐらるゝのは畢竟一切衆生をして終には同一なる佛の境界に到達せしめんが爲に外ならぬのである。方便品に

唯だ佛と佛とのみ乃し能く諸法の實相を究盡したまへり。

とあるのを讀むと、吾等凡夫は全く何も分らぬ者かと思はれて甚だ心細くなるのであるが、是れは決して吾等を失望せしめんがために發せられたる語ではない。吾等凡夫と雖も常に心を盡して佛法を學び、信解の力が進んで行きさへすれば、後には諸法の實相を究盡することも出來るので、前にも引用したる方便品の偈の一節に、

我本誓願を立て一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき。我が昔の所願の如き今は已に滿足しぬ。

とあるのと思ひ合せて佛の御心の在る所を知るべきである。『吾が如く等しくして』といへば佛と等しく諸法の實相を知り、世を救ひ人を導くべき力を具へ得たることである。釋尊は吾等凡夫をして盡く此の如き力を具有する者たらしめんことを理想として教へを說き始められたのである。『我本誓願を立て』とあるが、これは其の世に出て法を說かれたる最初の時から斯る誓願を立てられたといふのである。而して『今は』といふは此の法華經を說かれた時のことで、卽ち四十餘年間の說法を經て後である。此の四十餘年の間種々の方便を以て一切衆生を教へ導かれた結果として、彼等も後には佛の境界に到達し得べき見込みが立つたので『已に滿足しぬ』と仰せられたのであらう。

諸佛は皆同じく大慈悲心を有せらるゝこと勿論であるが、その中に於て最も吾等に深い緣ある佛は釋迦牟尼佛である。釋迦牟尼佛は娑婆世界に於ける吾等を救護せんが爲に出られたる佛である。而も單に貴い教へを吾等のために說かれたのみならず、身を以て範を示して吾等を導かれたのである。最初は印度の國王の子として吾等と同じ此の土の上に生れたまひ、吾等と同じく人生の問題に就て種々に苦悶せられ、而る後に種々の苦行を重ねて成道せられたのである。其の降誕より成道までの御事蹟は一々に皆吾等のための貴き說法である。此の御事蹟は『凡夫と雖も勤めて怠らなければ必ず佛と成り得らるゝものである』といふことを明かに示されたものである。是れも前に引用したる語であるが、無量義經德行品の偈に、

我復た成く倶に稽首して、能く諸々の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。

とあるは實に此の意である。斯く身を以て實行せられた所を說かるゝのであるから、其の一語

一語が深く吾等の心に入つて、吾等のための大なる力となるわけである。

此の娑婆世界の衆生は盡く皆煩惱に充ちたる心をもつて居るのであるから、たとへ佛の教へに歸依しても、また世間の縁に牽かれて退轉するものも少くない。之に對して釋尊の苦心せられたことは一通りではなかつたであらう。殊にまた佛法が漸く世間に流布するに隨ひ、之を嫉妬して迫害を加ふるものも多く、釋尊は御一代の間に種々の苦難にあはれたのである。有名なる大難は九回あつたと傳へられて居るが、その外の小難は數知れぬほどであつた。而も釋尊は之を少しも苦とせられず『安樂にして少病少惱なり』と仰せられ、衆生に對しては『化度す可きこと易し』と仰せられた。まことに佛の御心の寛いことは感激の外はないのであるが、確かに釋尊は疲勞なく、いつも安樂に在したことであらう。釋尊は何人にも皆貴い佛性の具はつて居ることを見究めて居られたから『今のところで見ると、彼等の中に善人もあり惡人もあり、智者あり愚者もあるが、何時かは必ず縁を得て佛法に歸依し、漸く其の邪見を離れて來るに違ひない』といふ確信をもつて居られたのである。若し此の確信がなければ『一切の者を盡く吾と等しくして異らぬ者にしてやりたい』などゝ仰せられやう筈はない。

釋尊は斯く娑婆世界には特に縁の深い佛であるから、吾等は特に其の洪大なる御恩を感佩しなければならぬのであるが、釋尊の吾等に御教へになつたことは十方の世界に通じて、凡ての者の共に歸依すべきものであつた。それは決して此の娑婆世界にのみ限らるべきものでは無かつた。方便品の中に

十方佛土の中には唯だ一乘の法のみなり。

とあることは前にも述べたが、釋尊は又過去の佛の教へも現在の釋尊の教へと其の意を同じくすることを明言せられて

過去無數劫の無量滅度の佛、百千萬億種にして其の數量る可からず。是の如き諸世尊も種々の縁譬諭、無數の方便をもて諸法の相を演說したまひき。是の諸の世尊等も皆一乘の法を說き、無量の衆生を化して佛道に入らしめたまひき。

とある。又未來の佛に就ても同樣に

未來の諸の世尊其の數量有ること無けん。是の諸の如來等も亦方便して法を說きたまはん。一切の諸の如來無量の方便を以て諸の衆生を度脫して佛の無漏智に入れたまはん。若し法を聞くこと有らん者は一として成佛せずといふこと無けん。

と仰せられた。斯く釋尊の說きたまへる所と諸佛の說きたまふ所とは一致すべきもので、現在

十方の諸佛の教への一致するのみならず、過去未來の諸佛の教へも凡て一致すべきものである
ことを明されてある。卽ち是れこそは絶對の眞理であつて、永遠の生命を有するものであるこ
とを明されたのである。されば吾等は此の教へを絶對に信奉すると共に、斯る貴い教へを聽く
べき緣を得たことを深く感謝し、之を信奉することに依つて、獨り釋迦佛のみならず、諸佛の
御心にかなふといふ深き悅びを感ずべきである、されば法華經の信解品に於て迦葉等は佛恩に
感激して

世尊は大恩ましまします。稀有の事を以て憐愍教化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か
能く報ずる者あらん。

といふと共に、釋尊に歸依するのは卽ち十方世界の諸佛に歸依する所以であると知るが故に更
に

諸佛は稀有にして無量無邊不可思議の大神通力ましまします。

といつたのである。此の如き信解の力を有する者は眞に能く佛の化導を贊け、佛法の流布に大
なる力を致すことが出來るであらう。

今維摩詰の說ける所と行へる所とを見ると、眞に能く佛の化導を贊くるものと稱せらるべき



である。法華經の法師品に、

此の人は是れ大菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を成就し、衆生を哀愍し、願ひて此の間に生せる
なり。

とあるは正しく維摩詰に適切である。彼は前に舍利弗が其の室に牀座の無いのを怪しめるを緣
として、神通力を以て須彌燈王の許より師子の座を求めて來たが、今また舍利弗の食を求めん
とするを緣として再び神通力を現はし、香積佛の許より香飯を請ひ來つた。是れ皆衆生をして
佛法の力の洪大なることを知らしめ、誠心を以て之に歸依せしめんが爲の方便である。彼は眞
に佛の御心を以て其の心とせる者といふべきである。彼の須彌燈王佛は維摩詰のために師子の
座を與へ、又香積佛は維摩詰の請によつて香飯を分ち與へられた。是れ維摩詰が釋迦牟尼佛に
歸依して、菩薩道を勵み、能く佛の化導を贊くるものであるからである。是れ釋迦牟尼佛に歸
依するのは卽ち諸佛に歸依する所以で、釋迦牟尼佛の御心にかなへる者は卽ち十方の諸佛の讚
めたまふ者であることを證するものである。斯くまでに貴き佛法であることを知つた者は、必
ずや其の信解の力を强め得たことであらう。又維摩詰の香飯を請ふ語に

當に娑婆世界に於て佛事を施作し、此の小法を樂ふ者をして大道を弘むることを得しめん。

といつたのは大に注意すべきである。たとへ佛の大乘の教へを學んでも、其の心の狹小なる者は佛法の力の斯くまでに洪大なることを知らぬから、容易に大信力は得られぬのである。維摩詰は斯る輩を哀愍するの念が深かつたので、釋尊に歸依するものは十方の佛に護念せらるゝものであることを彼等に覺知せしめ、彼等の信解の力を强くしてやらうと望んだのである。彼等が大乘の眞の精神を充分に辨へて來れば、必ず之を世に弘むることに全力を注ぐに至るであらうから、世間の人が汎く其の益を受くべきである。是れ皆維摩詰の有せる大慈悲心の致す所である。苟くも大乘を學ぶものは共に仰いで之を範としなければならぬ。

彼諸大士見二化菩薩一。歎二未曾有一。今此上人。從二何所一來。娑婆世界。爲レ在二何許一。云何名爲下樂二小法一者上。卽以問レ佛。佛告レ之曰。下方度下如二四十二恒河沙一佛土上。有二世界一名二娑婆一。佛號二釋迦牟尼一。今現在於五濁惡世一。爲下樂二小法一衆生上。敷二衍道教一。彼有二菩薩一。名二維摩詰一。住二不可思議解脫一。爲二諸菩薩一說レ法。故遣レ化來。稱二揚我名一。幷讚二此土一。令二彼菩薩增一益功德一。彼菩薩言。其人何如乃作二是化一。德力無畏神足若レ斯。佛言甚大。一切十方皆遣レ化。往施二作佛事一。饒二益衆生一。於レ是香積如來以二衆香鉢一盛二滿香飯一。與二化菩薩一。時彼九百萬菩薩。俱發レ聲言。我欲下詣二娑婆世界一。供中養釋迦牟尼佛上。幷欲レ見二維摩詰等諸菩薩一。佛言可レ往。攝二汝身香一。無レ令二彼諸衆生起一惑著心一。又當下捨二汝本形一。勿上レ使下彼國求二菩薩一者而自鄙恥上。又汝於レ彼莫下懷二輕賤一而作中礙想上。所以者何。十方國土。皆如二虛空一。又諸佛爲レ欲レ化下彼樂二小法一者上。不二盡現一其清淨土一耳。時化菩薩既受二鉢飯一。與二彼九百萬菩薩一俱。承二佛威神及維摩詰力一。於二彼世界一忽然不レ現。須臾之間。至二維摩詰舍一。



彼の諸〳〵の大士、化の菩薩を見て未曾有なりと歎ず。今此の上人は何れの所よりか來れる。娑婆世界は何れの許に在りとや爲ん。云何か名けて小法を樂ふ者と爲すと。卽ち以て佛に問ひたてまつる。佛之に告げて曰はく、下方四十二恒河沙の如き佛土を過ぎて世界有り、娑婆と名く。佛を釋迦牟尼と號す、今現に五濁の惡世に在して、小法を樂ふ衆生の爲に道教を敷衍したまふ。彼に菩薩有り、維摩詰と名く。不可思議解脫に住して、諸菩薩の爲に法を說く。故らに化を遣はして來らしめ、我が名を稱揚し幷に此の土を讚めて、彼の菩薩をして功德を增益せしむと。彼の菩薩言く、其の人何如か乃ち是の化を作し、德力無畏神足斯の如く

なると。佛言く甚だ大なり。一切十方に皆化を遣はし、佛事を施作して衆生を饒益すと。是に於て香積如來、衆香の鉢を以て香飯を盛り滿て化の菩薩に與へたまふ。時に彼の九百萬の菩薩倶に聲を發して言く、我娑婆世界に詣りて釋迦牟尼佛を供養したてまつらんと欲す。幷に維摩詰等の諸の菩薩を見んと欲すと。佛言はく、往く可し。汝が身香を攝めて、彼諸〳〵の衆生をして惑著の心を起さしむること無れ。又當に汝の本形を捨て、彼の國の菩薩を求むる者をして而も自ら鄙恥せしむることなかるべし。又汝彼に於て輕賤を懷きて礙想を作すこと莫れ。所以は何。十方の國土は皆虛空の如し。又諸佛諸の小法を樂ふ者を化せんと欲するが爲の故に、盡く其の淸淨の土を現せざるのみと。時に化の菩薩既に鉢飯を受け、彼の九百萬の菩薩と倶に、佛の威神及び維摩詰の力を承けて、彼の世界に於て忽然として現せず、須臾の間に維摩詰の舍に至る。）

此の一段には香積佛が維摩詰の請に應じて香飯を與へらるゝことが叙せられてあると共に、更に彼の衆香世界の諸菩薩が釋迦牟尼佛に謁し且維摩詰と相見んが爲に態々娑婆世界へ來ることゝなり、頗る精彩を添へたる觀がある。それは彼の世界の香積佛が諸菩薩の問に應じて、釋迦牟尼佛が此の娑婆世界の五濁に充されたる中に立つて、衆生を敎化し道敎を敷演するために力を盡したまふ大慈悲心を讃歎し、又維摩詰の智德共に秀でたることを稱揚せられたるが爲である。斯く娑婆世界に在つて法を弘むることを大なる功德と考へるのは、大乘佛敎の特色である。世間の紛擾を厭うて獨り山林に住み、有らゆる煩累を避けて獨り其の道を樂むといふは高尙のやうであるが、決して佛の御心にはかなはぬ事である。淸淨なる身を以て濁れる世間の人と共に住むのは、まことに堪へ難き苦痛であるけれども、その苦を苦とせずして甘んじて世間の中に混じ、之を敎へ導くことに力を盡すのが卽ち佛菩薩の志である。而して其の苦を忍ぶことが多ければ多いほど、其の功德も莫大であると考へられて居るのである。されば最も苦難の多い娑婆世界に住して、化導のために力を盡したまふ釋迦牟尼佛、並に其の化導を贊くる諸菩薩に對して、他の世界の佛菩薩が殊に讃歎し敬重せらるゝことは當然の次第である。

此の事は生を娑婆世界に受けたる吾等に大なる勇氣を與ふるものである。今の吾等は凡夫であるけれども、勤めて大乘を學んで、聊かなりとも佛の化導を贊け得るやうな身となれば、それが何にもかへ難き悅びでなければならぬ。而も佛の化導を贊くるといふことは世間を離れて山寺に住み、朝夕に經論を讀誦してそれを世間の人に向つて說くことのみをいふのではない。維摩詰の如く世間の人に混じて世間の生活を營み、漸々に其の周圍の人々を誘うて佛の正法に

歸依せしむる者を、佛も稱讃したまふのである。實世間の實生活を離れて佛法を考へるのは間違つて居るのである。現時の世相を見ると如何にも複雜である。人々は其の日其の日の問題を解決するのに忙しくて、信仰とか人の道とかいふことを考へる餘裕が殆んど無くなつて居る。而も其の心の底には限りなき不安が蟠つて居るのである。斯ういふ時代に生れて佛の正法を學ぶべき緣を與へられたことは大なる悦びでなければならぬ。更にその貴い教へを世に弘むるために聊かなりとも力を致し得るならば、それこそは優曇華の開いたのにも比すべきものであらう。○娑婆世界何れの許に　常に安樂なる世界に在つて修行をして居るものは、娑婆世界といふ多事多難なる世界のあることを知らぬのである。○小法を樂ふ者　常に大乘の教へのみを聞いて居るものは、小法に安んずるといふ氣分が分らぬのである。○五濁の惡世に在して　五濁といふことは前に委しくいつたが、要するに世相が險惡になり、人々の心も專ら利己的になつて、道も教へも顧みぬやうになつた時である。此の如き時に出て教へを說くのには種々の困難が伴ひ、種々の障礙も生ずるわけであるが、それだけに其の功德も莫大である。今香積佛は之を稱歎せらるゝのである。○小法を樂ふ衆生　眼前のことにのみ心を惹かれて、永遠のことを考慮せぬ人々のことである。○故らに化を遣はして　釋尊の教へに歸依すれば十方の諸佛の御心にかなふといふことを人々に知らしめんがために、特に化の菩薩を遣はして香飯を乞うたのである。○此の土を讃めて　此の娑婆世界と異り、清淨なる世界があるといふことを人々に知らしむるのである。これは娑婆世界の人々をして大に奮つて德行を勵み、此の娑婆世界を化して淨土と爲すために力を盡さしめんとの志に依るのである。卽ち其の洪大なる慈悲心の發露に外ならぬものである。○彼の菩薩　娑婆世界に在つて大乘の修行をする者のことである。○一切十方に　維摩詰の德行は獨り釋尊の嘉したまふ所であるのみならず、十方の諸佛の共に讃めたまふ所である。○娑婆世界に詣りて釋迦牟尼佛を供養し　娑婆世界に在つて釋尊が教化に盡瘁したまふ有樣を親しく見て、之に供養して其の德を稱へやうといふのである。○維摩詰等の菩薩衆　此等の諸菩薩は佛の教化を贊け、此の娑婆世界を淨土と化せしめんが爲に力を盡すものであるから、是れ亦頗る尊重すべき人々なのである。○惑著の心を起さしむる　衆香世界から諸菩薩が何れも其の身より精妙なる香氣を放つて居ることを知るならば、それを羨むの餘りに執著心を起し、娑婆世界に在つて修行することが馬鹿らしくなるであらう。故に最も之を愼まなければならぬのである。○汝が本形を捨て、彼の世界の菩薩は其の容姿極めて端正で威德あるものであるが、娑婆世界へ來るために特に其の姿を變へて、娑婆世界の人々の如くにするのである。

ある。○自ら鄙耻せしむる　娑婆世界が在つて大乘を學ぶ者が自己の姿の衆香國より來れる諸菩薩に比して甚しく劣れるを見て、自ら耻ぢ自ら鄙しむる念が起るならば、必ず佛と成らうといふ大決心が緩むかも知れぬ。久しく修行を重ねた者は兎も角も、まだ修行の足らぬ者には其の恐れがある。香積佛が斯る事までも考慮せらるゝのは眞に佛の大慈悲と申すべきである。○輕賤を懷きて礙想を作す　娑婆世界が衆香世界の如くに清淨ならぬを見て、之を輕賤する念を生じ、又娑婆世界の人々に對して自分達とは段がちがふなどゝ考へてはならぬと戒めらるゝのである。○皆虛空の如し　虛空は凡ての物を容れて一も之を隔つることは無い。虛空の如しとは卽ち平等なりとの意である。十方の世界は現在に於てそれ〴〵に皆異つて居ても、後には必ず皆佛の化導を受けて、皆清淨なる國土となるべきに定まつて居る。故に平等の念を以て之に對すべきである。○盡く其の清淨の土を現はさず　人々をして自己の心が煩惱に充ちて居る間は淨土が實現せられぬものであるといふことを自覺せしめ、其の煩惱を除くために努力せしむることが最も肝要である。○佛の威神及び維摩詰の力　彼の國の諸菩薩を娑婆世界に來らしむることとは、彼の國の諸菩薩にも、また此の娑婆世界の人々にも共に大なる教訓を與ふるものである。此の點に於て積香佛も維摩詰も見る所が一致して居たのである。



此の一段を熟讀するものは此の娑婆世界に生を受けて種々の苦難を嘗め、然る後に佛の救護を受けて正覺を成ずることの悦びを深く感ずべきである。苦を忍ぶこと久しければ其の功德を積むことも亦甚大である。それは諸經の中に說かれてあることではあるが、就中無量壽經の中に於て懇ろに說かれてあることは特に注意すべきである。無量壽經は淨土宗や淨土眞宗に於て最も重んずる所の經典で、安樂國の最も莊嚴なる有樣を委しく說かれたものであるが、其の國に往生せんとせば、此の娑婆世界に在る間に多くの善根を積まなければならぬといふことが丁寧に教へられてあるのである。例へば次の如き語がある。

汝等是に於て（こゝといふは此の娑婆世界のことである）廣く德本を植ゑ、恩を布き惠を施して道禁を犯すこと勿れ。忍辱精進して心を一にし、智慧をもて轉た相教化して德を爲し善を立てよ。心を正し意を正しくして齋戒淸淨なること一日一夜なれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歲なるに勝れたり。所以は何。彼の佛の國土は無爲自然にして皆衆の善を積みて、毛髮の惡無ければなり。此に於て（此の娑婆に於てといふ意）善を修すること十日十夜なれば、他方の諸佛の國に於て善を爲すこと千歲なるに勝れん。所以は何。他方の佛國は善を爲す者多く、惡を爲す者少く、福德自然にして惡を造すの地無ければなり。唯だ此間は

（娑婆世界のこと）惡多くして自然なること有ること無し。勤苦して求欲し、轉た相欺紿し、心勞し形困み苦を飲み毒を食ふ。是の如く怱務して未だ曾て寧息せず。

とある。無量壽國といふは卽ち無量壽佛の國で、安樂國といふも同じ所である。善を爲す者の多い國に於みの住する國に在つて、善を爲すこと久しきはさのみ困難ではない。善を爲す者の少い國に於ては僅かに一日善を爲すことも甚だ困難である。然るに佛は此の困難に打克つのが非常に貴いことであると仰せられたのである。苦を忍び難を冒してこそ初めて眞の智慧を成ずることが出來るのである。されば

忍は卽ち是れ菩提の正因なり。阿耨多羅三藐三菩提は卽ち是れ忍の果なり。

と優婆塞戒經には說いてある。又佛遺教經の中には

能く忍を行ずる者を乃ち名けて有力の大人と爲す。

とある。その他にも此の如き語は多くある。

鐵が能く鍛へられて初めて名劍となるが如く、又玉が能く磨かれて初めて美しい光りを發するが如く、吾等の智慧も種々の困苦を忍び種々の艱難を經て初めて大成するのである。明の倪允昌の語に

一苦一樂相練磨す、練極まりて福を成す者は其の福始めて久し。一疑一信相參勘す、勘極まりて知を成す者は其の知始めて眞なり。

とあるが是れは眞に能く世間を知つた人の語である。寂しい田舍の殆んど何の刺激も受けぬやうな所で生涯を送り、朝夕に佛を禮拜して極樂往生を祈つて居る老翁や老婆を羨しく思ひ、自分が忙しい都會生活をして居るために、信仰がほしいとは思ひながら何時までも信仰に入ることの出來ぬのを悔んで居る人が少なくない。併しそれは甚だ愚なる考へ方である。吾等が信仰を求むるのは唯だ自己一身の苦を除かんが爲ではない。世間の多くの人にも其の苦を脫し惱みを去るべき道を與へ、共に意義ある人生を送るやうになりたいと思つて、それで信仰を求むるのである。苟くも大乘佛教を學ぶ者は此の事を忘れてはならぬ筈である。誰も能く知る所の四弘誓願の第一は

衆生の無邊なるも度せんと誓願す

とある。之に續いて

煩惱の無數なるも斷せんと誓願す。

とあるので非常に貴く感せらるゝのである。自ら佛教を信じて一切の煩惱を離れんと思ふのは

斯くて一切衆生を救ふべき身とならんが爲でなければならぬ。而して煩惱なるものは種々の場合により。種々の刺激に應じて殆んど際限もなく起るものであるから、今現に自分の心が平和であるからとて、それで全く煩惱が無くなつたものと定めてしまふことは出來ぬ。山の陰などの殆んど雨も風も當らぬやうな所に建てられた小屋が何十年も安全であつても、それは建て方が堅固なためでは無いから眞に安全とはいはれぬ。どうかして急に暴風雨に襲はるゝことがあれば一堪りもなく壞れてしまふのである。基礎をも充分に固くし、柱も屋根も極めて堅牢なものを擇んで建てたのでなければ眞の安全な家とはいはれぬ。

されば刺激の少い田舍に住んで『信仰のあつい人』といはれて居る人達を羨まずに、出來るだけ刺激の多い所で種々に試みられ、種々に鍛へられて後に、自己を眞に安全な、眞に堅固な人に仕上げやうと決心することが最も賢い道である。斯くして立派に仕上げられた人は、その久しい間の努力の無益でなかつたことを知つて深き悅びを感ずると共に、世間の多くの人々がなほ多くの煩惱に役せられて毎日を送つて居るのを見て深き哀愍の情を起す。又自分の過去の經驗に引比べて見て、其の煩惱の起つて來る事情をも徑路をも能く知つて居るから、之に對して救護を與へ敎化を與ふることも出來るのである。病の性質を深く究めずして、之に適當なる



藥を與ふることの出來やう筈はない。寂しい田舍でたゞ靜かに信心をして居る人々には世を救ひ人を導くべき力などは殆んど無いのであるから、別に羨むにも及ばぬのである。佛の化導を贊け得るやうな人になつて、初めて佛恩に報ずることも出來るわけであるから、吾等は常に之を以て吾等の理想とし、常に自ら勵むべきである。されば前に引いた無量壽經の文にも此の娑婆に於て修行することの貴き所以を述べられて、『智慧をもて轉た相敎化して德を爲し善を立てよ』とある。自ら救ふと共に他を救ひ、自ら覺ると共に他を覺すことに力を用ゐる者でなければ、佛の御心にかなふ者とはいはれぬわけである。

今此の香積佛が諸菩薩を娑婆世界へ遣はされたに就ては、深き意義のあることを考へて見なければならぬ。前に維摩詰が使を彼の世界に送り、彼の佛に香飯を請ふに當つて『娑婆世界に於て佛事を施作し、此の小法を樂ふ者をして大道を弘むることを得しめん』といつた趣意は、其の段に於て一通り說明して置いた。彼は釋迦牟尼佛の說きたまふ所が卽ち十方世界の諸佛の御心と一致せるものであることを明かにし、釋迦牟尼佛に歸依する者は、十方世界の諸佛の共に嘉したまふ所のものであることを明かにし、此の娑婆世界の衆生の信念を堅固ならしめたいと望んだのである。是れ實に大なる慈悲心である。それ故に香積佛は之を諒とせられ其の請を許して

香飯を與へらるゝのみならず、なほ諸菩薩を遣はして釋迦牟尼佛及び維摩詰等を慰問せらるゝ事となつた次第である。而して彼の世界の諸菩薩は此の娑婆世界へ來て大に學ぶ所があつたが、此の娑婆世界の者は彼の世界の菩薩を迎へて大に學ぶ所があり、互ひに大なる滿足を感じたことは次の段に於て委しく記されてある。彼の世界の諸菩薩は釋尊が娑婆世界の者を化導せらるゝために、特に多くの苦心を重ねらるゝさまを委しく知り、今更ながらに佛の大慈悲に感じ入つた。又此の娑婆世界の者は他の世界の諸菩薩が斯くまで深く釋迦牟尼佛に歸依せるさまを親しく見て、今更の如くに親しく釋迦牟尼佛の教へを受くることの有難さを知り、幾倍か其の信心を堅固にすることが出來た。而も彼の世界の諸菩薩が此の娑婆世界に來るに當つて聊かも娑婆世界の者を卑み侮るさまなく、慇懃鄭重に釋迦牟尼佛に對する恭敬の意を表したのは、彼の世界の香積佛の豫め敎誡せられた所に依るものである。

尤も釋迦牟尼佛が娑婆世界の衆生を敎化せらるゝに就て、諸佛が特に深き敬意を有せらるゝといふことは、法華經の中にも明かに見えて居る。卽ち其の方便品に於ては釋尊が成道の後、方便を以て一切衆生を敎化せんとの決心をせられたる時のさまを述べて、

是の思惟を作せる時、十方の佛皆現して梵音をもて我を慰諭したまふ。善哉釋迦文、第一の導師。是の無上の法を得たまへども、諸〳〵の一切の佛に隨ひて方便力を用ゐたまふ。……復た三乘を說くと雖も、但だ菩薩を敎へんが爲なりと。

といつてある。又妙音菩薩品の中に、淨光莊嚴世界より妙音菩薩が此の娑婆世界へ來て、釋尊及び諸菩薩を慰問せんとした時にも、彼の世界の淨華宿王智佛が之を戒めて、

汝彼の國を輕しめて下劣の想を生ずること莫れ。善男子、彼の娑婆世界は高下不平にして土石諸山穢惡充滿せり。佛身も卑小にして諸〳〵の菩薩衆も其の形亦小なり。……汝往て彼の國を輕しめ、若は佛菩薩及び國土に下劣の想を生ずること莫れ。

と仰せられたことが見えて居る。是れは此の維摩經に現はれたる思想と能く一致するものである。此の穢惡に充ちたる娑婆世界に釋尊の教へが弘まり、やがて此處が淨土となるのであるから、決して此の娑婆を輕んじ侮つてはならぬのである。又此の世界を淨土とすべき力を具へたまふ釋尊の貴いことは申すまでもないが其の聖業を贊くる所の諸菩薩の貴さも亦充分に認められなければならぬものである。

又香積佛が『十方の世界は皆盡く終には淨土となるべきものである』と告げたまふと共に、特に此の娑婆世界の淸淨ならざる理由を說明して、『諸の小法を樂ふ者を化せんと欲するが爲の

故に清淨の土を現せざるのみ』と仰せられたことも大に注意すべきである。此と同樣のことは最初の佛國品にも說かれてあつたのであるが、敎化の順序としては先づ衆生をして穢土の生活の厭はしいことを深く自覺せしむることより始まらなければならぬのである。重い病に罹りながら自ら病者たることを知らぬ者は、如何に良い藥を與へられても之を服用しやうとは思はぬ。故に彼をして先づ其の重病を自覺せしむることが肝要である。たとへ重病に罹つて居ても、良藥を服しさへすればやがては健康の身となれるのであるから、其の良藥を有難く思ふ心が起りさへすれば此の人は必ず救はるゝのである。佛の化導も亦此の如きものであつて、切角佛性を具へて居ながら煩惱にのみ役せられて毎日を送つて居る者をして、先づ煩惱の生活の淺ましいものであることを深く自覺せしむることから始まるのである。其の苦を苦と知つて、斯る苦の中から如何にもして脫出したいと熱望する者が出て來れば之に對して種々の敎へが與へられ『自ら其の意を淨うすることに力を用ゐれば其の周圍の人々も亦自ら淨くなる。凡ての人の心が淨くなれば其處に淨土が實現するのである』といふことを覺らしめらるゝわけである。是れは前にも引用したと思ふが、大集經の中に說かれたる

我淨ければ施度も亦淨し。施度淨きが故に願も亦淨し。願淨きが故に菩提亦淨し。菩提淨きが故に一切の法亦淨し。

といふが如き語を能く味つて見ると、諸佛が何故に其の說法の始めに於て、穢土の厭ふべきことを力說せられたかを明かに知ることが出來る。次の段に至つて維摩詰が『此の娑婆世界には剛强にして化し難き者多き故に、佛も剛强の語を說いて之を調伏せらるゝのである』と語つて居るのも亦此の意に外ならぬ。眞に維摩の如きは能く佛の御心を知れるものといふべきである。

時維摩詰。卽化二作九百萬師子之座一。嚴好如レ前。諸菩薩皆坐二其上一。是化菩薩。以二滿レ鉢香飯一與二維摩詰一。飯香普薰二毗耶離城一。及三千大千世界。時毗耶離婆羅門居士等。聞二是香氣一。身意快然。歎二未曾有一。於レ是長者主月蓋。從二八萬四千人一。來入二維摩詰舍一。見二其室中菩薩甚多。諸師子座高廣嚴好一。皆大歡喜。禮二衆菩薩及大弟子一。卽住二一面一。諸地神虛空神。及欲色界諸天。聞二此香氣一。亦皆來入二維摩詰舍一。時維摩詰。語二舍利弗等諸大聲聞一。仁者可レ食二如來甘露味飯一。大悲所レ熏。無二以限意一食レ之。使レ不レ消也。有二異聲聞一念。是飯少。而此大衆人々當レ食。化菩薩曰。勿レ以二聲聞小德小智一稱二量如來無量福慧一。四海有レ竭。此飯無レ盡。使二一切人食揣一若二須彌一。乃至一劫。猶不レ能レ盡。所以者

何。無盡戒定智慧解脫解脫知見功德具足者。所レ食之餘。終不レ可レ盡。於レ是鉢飯悉飽二衆會一。猶故不レ盡。其諸菩薩聲聞天人。食二此飯一者。身安快樂。譬如二一切樂莊嚴國諸菩薩一也。又諸毛孔皆出二妙香一。亦如二衆香國土諸樹之香一。

（時に維摩詰卽ち九百萬の師子の座を化作し、嚴好なること前の如くにして、諸菩薩皆其の上に坐す。時に化の菩薩鉢に滿てる香飯を以て維摩詰に與ふ。飯香普く毗耶離城及び三千大千世界に薰ず。時に毗耶離の婆羅門居士等、是の香氣を聞ぎ、身意快然として未曾有なりと歎ず。是に於て長者主月蓋、八萬四千人を從へ來りて維摩詰の舍に入る。其の室中に菩薩甚だ多く、諸の師子の座の高廣嚴好なるを見て皆大に歡喜し、衆の菩薩及び大弟子を禮し、却きて一面に住す。諸の地神虛空神及び欲色界の諸天、此の香氣を聞ぎて亦皆來りて維摩詰の舍に入る。時に維摩詰、舍利弗等の諸の大聲聞に語るらく、仁者如來の甘露味の飯を食す可し。大悲の熏ずる所なり、限意を以て之を食して消せざらしむること無かれと。異の聲聞有り念へらく、是の飯少し、而して此の大衆人々に當に食すべきやと。化の菩薩曰く、聲聞の小德小智を以て如來の無量の福慧を稱量すること勿れ。四海は竭くることも有りとも、此の飯は盡ること無し。一切の人をして食揣せしむること須彌山の如くにして乃至一劫なるも猶ほ盡すこと能はず。所以は何。無盡の戒定智慧解脫解脫知見の功德具足せる者の食せる所の餘なり、終に盡く可からざるなりと。是に於て鉢飯悉く衆會を飽かしめて猶ほ故のごとく盡きず。其の諸の菩薩聲聞天人此の飯を食する者は、身安くして快樂なること譬へば一切樂莊嚴國の諸菩薩の如し。又諸の毛孔より皆妙香を出すこと亦衆香國土の諸樹の香の如し。）



此に至つて維摩詰の願つたことが盡く滿足せられたのである。前には須彌燈王の國より師子座を借り來つて多くの菩薩や大弟子をその上に坐せしめたことがあつた。維摩詰の病臥したる所は方丈の室であるといふが、其の一室に斯くも多くの人を容れ、斯くも驚くべき不思議の事が數々實現せられたといふは、正しき信仰の力の洪大無邊なることを能く證するものである。然るに今また衆香國より多くの菩薩が此の一室に來集し、此の一室は其等の諸菩薩をも盡く容れて少しも狹隘を感ずることは無かつたとある。その上に彼の國より遣はされたる香飯は滿室の人々を飽かしめてなほ盡きず、而も其の香氣は三千大千世界の果てより果てまでも傳はつたとある。維摩詰は佛の御力の洪大無邊なるを、大乘を信ずる力の同じく洪大無邊なるとを凡ての人々に教へて、其の信念を益々堅固ならしめたいと望んだのであるが、それが此に至つて盡

く滿足したのである。隨て維摩の室に於ける問答は之を以て終結せられ、次の菩薩行品よりは釋尊の菴維樹園に於ける說法に戻るわけである。

此處に記されたる香飯の一條は耶蘇の事蹟の中にやゝ相似たる所がある。併し其の內容を能く比べて見ると、頗る相異る點があつて、大乘佛教の特色が明かに分るやうである。新約聖書マタイ傳の第十四章には

日暮るゝ時其弟子來りていひけるは、此は寂しき所にして時もはや遲し、諸邑に往きて自ら食を求めさせん爲に人々を去らしめよ。イエス彼等にいひけるは、人々往かずともよし、爾等之に食を與へよ。答へけるは、我等此にたゞ五のパンと二の魚あるのみ。イエスいひけるは、其を此に持來れ。遂に人々に命じて草の上に坐らしめ五のパンと二の魚を取り、天を仰ぎ謝して、パンを割りて弟子に與ふ。弟子之を衆人に與へぬ。みな食ひて飽き、其餘りたる屑を拾ひしに十二の筐に充ちたり。食ひし者は婦と幼童の外凡そ五千人なりき。

とある。耶蘇が天に祈つてパンと魚とを分けた時に、五千人が飽くまで食してもまだ餘るほどになつたといふのは神の力が耶蘇に加はつて、限りなく多くの人を救ふべき不思議の働きが出來ることを表はしたものであるから、維摩詰の香飯と似通つて居るやうにも見える。併し香飯の方はそれを食したる人々が飽きたといふのみでなく、其の身より妙香を出して周圍に薰じたといふことがある。是れは大乘の教へを學ぶ者はたゞ其の身の煩惱を除き得て安穩であるのみならず、又其の周圍の人々にまでも良き感化を與へ得べきことを示すものであつて、彼のマタイ傳の記事に比べて遙かに高い思想といはなければならぬ。又更に注意すべきは其の香飯の香が『普く毗耶離城及び三千大千世界に薰じた』といふことである。維摩詰の室へ入り來つた者は何れも佛法に緣のある者であるが、三千大千世界の中には未だ釋尊にも、維摩詰にも緣の無い者が夥しく居た筈である。然るに其等の人々の間にまでも香飯の香が及んだといふは、今現に緣の無いやうに見ゆる者も決して永く無緣の者なのではない、然るべき時機が來れば必ず佛法に緣をもつやうになり、必ず佛の化導を受くることを得るであらうといふ意を現はしたものと思はれる。佛の慈悲は斯くも洪大なるものである。

○前の如くにして　前には須彌燈王佛の國から師子の座を借りて來て諸菩薩を坐せしめたのであるが、今のもそれに少しも劣らぬ美しい座である。○長者主月蓋　長者の中の最上の人である。此の毗耶離國には國王がなく、五百人の協議によつて萬事を決して居たといふ、卽ち現今の共和政治であつた。而して月蓋長者は衆に推されて其の統率者であつたといへば、現今の大

統領に相當する地位であつたのであらう。○菩薩甚だ多く　此の室に來集せる菩薩の甚だ多きは、卽ち維摩詰の德の極めて高きに依るものであるから、長者等が歡喜した筈である。○如來の甘露味の飯を食す可し　道生は之を說明して『泥洹は是れ甘露の法にして、此の食を食する者は必ず以て之を得。故に飯中に甘露味あるなり』といつた。泥洹とは涅槃といふと同じことで、卽ち佛の得たまへる正覺のことである。甘露は其の正覺を得たる心の最も平和にして安穩なるに譬へたのである。今舍利弗等に此の香飯を食せんことを勸むるは、卽ち彼等が必ず大乘を學んで、後には佛の境界に到達せんことを志とすべきを勸むるのである。○大悲の熏ずる所なり　佛の大悲心が此の香飯の中に入つて居るから、之を食するものは自ら其の感化を受けて自己も佛のやうになりたいといふ大なる望みを起すであらう。○限意を以て之を食して消せざらしむること無かれ　限意とは大慈悲心の足らぬさまをいふのである。若し自己の得たる所は必ず以て之を人に施し、人と共に其の益を得やうといふ心が足らず、自己のみ大に得る所あらんことを望む者は佛の御心と一致せぬ者であるから、香飯を食しても消化せぬに定まつて居る。○異の聲聞　舍利弗等に比すれば遙かに下劣なる一人の聲聞である。○如來無量の福慧　佛は無量の福慧を具へらるゝが故に、其の施したまふ所も亦無量なるべきである。是れ小智の者の



測り知ることの出來ぬ所である。○食揣すること須彌の若く　揣とは手に丸めて握ることである。須彌山の大きさになる程多くの飯を手に握つて食するともといふ意である。○乃至一劫すとも　斯く多くの量の飯を、たとへ一劫の間食し續けてもなほ盡ることは無いのである。○戒定慧解脫解脫知見の功德具足せる者　戒定慧等は何れも菩薩道に缺くべからざる諸德であることは前に述べた。其等が具足して少しも缺けぬものは卽ち佛である。此の香飯は佛より分け與へられたものである。その如何に食しても盡きぬのは、卽ち佛の御德の邊際なきを現はすものである。○毛孔皆妙香を出す　自ら其の周圍の人を感化すべきほどの淸淨なる心となつたことを現はすのである。

此の段の始めに於ては、維摩詰が彼の衆香國より來れる菩薩を迎ふるために師子の座を用意したことが記されてある。座を具へて客を迎ふるのが正しき禮である。前に文殊師利菩薩等が入り來つた時に座を設けなかつたのは、敢て禮を盡さぬ意ではなく、之によつて舍利弗等に疑惑を生ぜしめ、一段の問答を起すべき計畫であつたからである。其の問答が一段終つて後、維摩詰は須彌燈王の國から師子の座を借り來つて人々をして之に坐せしめたが、（不思議品）其の師子の座の美しきさまは

卽時に彼の佛三萬二千の師子の座の高廣にして嚴淨なるを遣はして、維摩詰の室に來入す。

諸の菩薩大弟子釋梵四天王等昔より未だ曾て見ざる所なり。

といつてある。然るに今囘衆香國の諸菩薩を迎ふるに當つては、師子の座を他より借ること無く、維摩詰自身の神通力によつて忽ち之を室内に現はし、其の美しさは前のに少しも劣らなかつたとある。此の二段を對比して見ると非常に深い興味が感せらるゝやうである。

前には此の娑婆世界の諸菩薩大弟子等を坐せしめんが爲に、他の世界より師子の座を借り來つたのである。今は他の世界より來れる諸菩薩を迎へんが爲に維摩詰自ら師子の座を化作したのである。彼の須彌燈王佛より師子の座を與へられたことは、前にも既に繰返していつた通り釋迦牟尼佛に歸依したものは他方の諸佛も共に稱めたまふ所のものであるといふ意を現はして居るが、今彼の衆香世界より來下せる菩薩達を迎ふるが爲に維摩詰の化作したる師子の座は前に須彌燈王佛より與へられたるものと同樣に美しく、衆香世界よりの賓客を坐せしむるに充分適したものであつたといふ。之によつて此の娑婆世界が決して輕んずべきものでないことが愈々明かになり、娑婆世界に在つて釋迦牟尼佛の教へを受くることの貴さが愈々明かになつたわけである。而して月蓋長者等八萬四千人の者が維摩詰の所へ來て、多くの威德ある菩薩の室中



に充滿したる有樣、又その坐せる師子の座の非常に美しきさまを見て、大に歡喜して禮拜したとあるが、彼等は今更ながらに維摩詰の偉大なる人物であることに驚歎したものゝ如くである。維摩詰が久しく此の毗耶離城に在つて佛法を弘むることに絕えず力を盡し、諸人の畏敬する所となつて居たことは前の方便品に委しく出て居る。

諸佛咨嗟し弟子釋梵世主の敬ふ所なり。

とさへいつてある。月蓋長者は同じ毗耶離に住し常に深く維摩詰を敬して居たのであるが、此の莊嚴なる有樣を目擊しては、更に何倍か其の感を深くしたことであらう。

尙ほ此等の人々のみならず、地の神も虛空の神も乃至は天上界に住する者も香飯の發する香に惹かれて此の維摩詰の室へ來入したとある。何れも皆佛法に歸依して眞の悅びを得べき緣ある者であるからである。此等は何れも普通の人よりも自在の力を有する者として羨み視られて居たものである。殊に天上界は人間界と異り、何の苦痛も無い世界と思はれて居たので、來世は天上界に生れたいといふのが古代の印度人の理想であつた。貧しい者に施しをするとか、苦しんで居る者を救ふとかいふやうな善事を爲すのも、多くは其の報として來世は天上界に生れやうと望むが爲であつた。又娑羅門の中に苦行を主とする者の多くあつたことは前にも述べた

が、其等も大概は『現世で苦を忍べば來世に至つて天上界に生を受け永く安樂に活きて行かれやう』といふ考へに出たものである。併しながら斯ういふ考へは全く誤つて居る。忙しい世の中で暮して居た人が暇になれば、その當坐はまことに愉快に思はれるけれども、久しく暇で居れば何となく毎日を送るのに張り合がなくなり、結局は前の忙しかつたのが戀しいやうに思はれて來る。又麁食をして居た人が毎日美味に飽きるやうな境界になると、その當坐は滿足を感ずるけれども、美味に馴れてしまふと少しも美味とは思はず、却て淡泊な物がほしくなる。凡て外界からは眞の滿足が與へらるゝものでは無い。吾等が果して天上界に生を受け得るか否かは分らぬが、若し天上界に生れて毎日を平穩に送ることが出來たとしても、久しく其の平穩なる生活に滿足が感ぜらるゝものではない。やがて其の餘りに單調なる生活に厭きて、また別の境界に移りたいといふ欲望が生じて來るに違ひない。

涅槃經その他の諸經に天人の五衰といふことが出て居る。それは天上界の者と雖も其の死に先つて五種の衰相が現はれて來るといふのである。其の五種の衰相の名は經によつて多少の異同があるけれど、

本座を樂まず。



といふことが必ず其の一に擧げられてある。卽ち其の境界に對して倦厭の情を生ずるのである。天上界に生を受くることを理想とする者が多かつたといふけれども、其の天上界の生活が樂しからぬものになつてしまふのでは仕方が無いではないか。要するに眞の滿足は外界よりして與へらるゝものでは無い。境遇を變ずることによつて苦を除き樂を求め得るやうに考へるのは間違ひである。心に凡ての煩惱が無くなつて、人のために力を盡すことを身の樂みとするやうになれば、如何なる境界に在つても其の樂みを改めず、悠々として毎日を送ることが出來るのである。孔子は顏回を稱して

賢なる哉回や。一簞の食一瓢の飮、陋巷に在り。人は其の憂に堪へず、回や其の樂みを改めず。

といはれたが、是れは眞の樂みが外よりして與へられず、唯だ其の心の中からのみ生み出さるべきものなることを證する所の語である。佛菩薩の如きは固より常に其の樂みを改めぬ者である。されば此の地上に生を受けたる吾等は勿論、何れの所に住む者でも、苟くも生命を有する者は皆共に佛法に歸依することによつて、初めて生きがひのある生き方が出來るのであることを知らなければならぬ。此の經の中にも度々斯ういふ思想が現はれて居るが、此の一段の記事

は特に注意すべきである。

又香飯を分つて多くの菩薩大弟子等に食せしめたが、なほ盡きなかつたといふは、佛の智慧と慈悲との力の無量無邊なることを現はすのであるが、之に似たことは多くの經典の中に說かれてある。例へば法華經の妙音菩薩品には、妙音菩薩が三十四種の身を現じて、有らゆる人々にそれ〳〵適當なる教へを與へたといふことを說いて後、

是の如く種々に變化して身を現じ、此の娑婆國土に在りて諸の衆生の爲に是の經典を說く。

神通變化智慧に於て損減するところ無し。

とある。如何に用ゐても用ゐ盡されず、益々其の妙用を加ふるものが實に佛菩薩の智慧である。譬へば小い池の水は暫くの間酌み出して居れば涸れてしまふけれども、大洋の水は酌めども酌めども更に減ずるさまは見えぬ。佛菩薩の智慧も此の如くにして更に窮まる所がない。無量壽經にも

如來の智慧海は深廣にして涯底なし。

といつてある。斯く其の智慧が無量であるから其の慈悲の働きも亦無限であつて、一切衆生を救護するのである。而して彼の香積佛の香飯を食したるものは皆身安くして快樂を得、その身





より妙香を發したとあるが、佛の化導の力は實に此の如きものである。大乘の教へを學ぶことは漸く久しければ漸く德を成じ智を明かにすることを得て、自ら其の周圍の人々に大なる感化を及ぼし、人々を率ゐて共に佛法に歸依せしむることが出來る。斯くて多くの功德を積み、佛の化導を贊くるために力を盡すこと久しきに及んで、自身も漸く佛の境界に近づき得るのである。

爾時維摩詰問二衆香菩薩一。香積如來以レ何說レ法。彼菩薩曰。我土如來。無二文字說一。但以二衆香一。令下諸天人得レ入二律行一。菩薩各各坐二香樹下一。聞二斯妙香一。卽獲二一切德藏三昧一。得二是三昧一者。菩薩所有功德。皆悉具足。彼諸菩薩問二維摩詰一。今世尊釋迦牟尼以レ何說レ法。維摩詰言。此土衆生。剛強難レ化故。佛爲說二剛強之語一。以調二伏之一。言是地獄。是畜生。是餓鬼。是諸難處。是愚人生處。是身邪行。是身邪行報。是口邪行。是口邪行報。是意邪行。是意邪行報。是殺生。是殺生報。是不與取。是不與取報。是邪婬。是邪婬報。是妄語。是妄語報。是兩舌。是兩舌報。是惡口。是惡口報。是無義語。是無義語報。是貪嫉。是貪嫉報。是瞋惱。是瞋惱報。是邪見。是邪見報。是慳悋。是慳悋報。是毀戒。是毀戒報。是瞋恚。是瞋恚報。是懈怠。是懈怠報。是亂意。是亂意報。是愚癡。是愚癡報。是結戒。是持戒。是犯戒。

是應作。是不應作。是障礙。是不障礙。是得罪。是離罪。是淨。是垢。是有漏。是無漏。是邪道。是正道。是有爲。是無爲。是世間。是涅槃。以レ難レ化之人心如二猴猿一故。以二若干種法一制二御其心一。乃可二調伏一。譬如下象馬憃悷不調。加二諸楚毒一。乃至徹レ骨。然後調伏上。如レ是剛強難レ化衆生故。以二一切苦切之言一。乃可レ入レ律。

（爾の時に維摩詰衆香菩薩に問ふ、香積如來何を以てか法を說きたまふと。彼の菩薩曰く、我が土の如來は文字の說無し。但だ衆香を以て諸〻の天人をして律行に入ることを得しむ。菩薩各々香樹の下に坐し此の妙香を聞ぎて、卽ち一切德藏三昧を獲。是の三昧を得る者は菩薩所有の功德皆悉く具足すと。彼の諸〻の菩薩維摩詰に問ふ、今世尊釋迦牟尼何を以てか法を說きたまふと。維摩詰言く、此の土の衆生剛強にして化し難きが故に、佛爲に剛強の語を說き以て之を調伏したまふ。言く是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ諸難處、是れ愚人生處、是れ身邪行、是れ身邪行の報、是れ口邪行、是れ口邪行の報、是れ意邪行、是れ意邪行の報、是れ殺生、是れ殺生の報、是れ不與取、是れ不與取の報、是れ邪婬、是れ邪婬の報、是れ妄語、是れ妄語の報、是れ兩舌、是れ兩舌の報、是れ惡口、是れ惡口の報、是れ無義語の報、是れ貪嫉、是れ貪嫉の報、是れ瞋恚、是れ瞋恚の報、是れ邪見、是れ邪見の報、是れ慳悋、是れ慳悋の報、是れ毀戒、是れ毀戒の報、是れ瞋恚、是れ瞋恚の報、是れ懈怠、是れ懈怠の報、是れ亂意、是れ亂意の報、是れ愚癡、是れ愚癡の報、是れ結戒、是れ持戒、是れ犯戒、是れ應作、是れ不應作、是れ障礙、是れ不障礙、是れ得罪、是れ離罪、是れ淨、是れ垢、是れ有漏、是れ無漏、是れ邪道、是れ正道、是れ有爲、是れ無爲、是れ世間、是れ涅槃と。化し難きの人心猿猴の如くなるを以ての故に、若干種の法を以て其の心を制御して乃ち調伏す可し。譬へは象馬の憃悷にして不調なれば、諸の楚毒を加へ乃至骨に徹して然る後に調伏するが如し。是の如く剛強にして化し難き衆生なるが故に、一切苦切の言を以て乃ち律に入る可しと。）

此に至つて先づ維摩詰の問に應じて、彼の衆香國より來つた菩薩が香積如來の說法に就て語り、次に彼の菩薩の問に應じて、維摩詰が釋尊の說法に就て語ることになるのであるが、勿論釋尊のことを語るのが主である。維摩詰は釋尊が剛強の語を說いて衆生を調伏せらるゝことを說き、衆香國より來た諸菩薩は非常に敬服した。此の娑婆世界の衆生には其の心の順良なものが至て少いから、佛の御苦心は一方ならぬものである。其の所謂剛強の語といふ意義に就て維什は

之を說明して、

如來の說法には其の要三あり、一には軟善の語、二には剛強の語、三には雜說なり。善行樂果は軟善の語なり。善を讃し惡を毀るは雜說なり。剛強の語とは惡行によつて苦果を得べきことを說いて、衆生の反省を促すことをいふので、是れ一に佛の洪大なる慈悲に出るものである。僧肇はまた

聖化何ぞ常あらんや、故に隨ひて應ずるのみ。此土は剛強なり、故に剛強の教を以てして應ず。

といつた。如何に貴い教へでも其の人に適應しなければ殆んど其の用を爲さぬ。譬へば腹痛を治するに最も效驗のある藥でも、熱を下すために用ゐては其の驗は現はれぬ。教へも亦此の如きものである。

前に佛が人を教へらるゝに四種の方法を用ゐられたといふことを述べた。卽ち所謂四悉檀である。其の四悉檀中の一に對治悉檀といふのがある。それは藥を以て病を治するが如く、聽く者の心の病氣を見究めて、其の病を除くべき教誡を與へらるゝことをいふのである。佛の慈悲は眞の大慈悲である、決して所謂姑息の愛ではない。其の善を稱めて、優しく之を奬勵するのも慈悲であるが、其の惡を責めて嚴しく之を懲すのも亦慈悲である。嚴なるべきを嚴にせぬのは慈悲の缺けたるものといふべきである。禮記に

師嚴にして然して後に道尊し。道尊くして然して後に民學を敬することを知る。

とあるが、世を導き人を教ゆるといふ大切な事に當る人は、深く意を用ゐなければならぬことである。

○文字の說無し　言語によつて說明せぬことである。○律行に入る　律行とは卽ち正しき行のことである。妙音を聞ぐによつて其の心が常に清淨であるから、更に妄想の起ることが無くて、其の行は常に方正なのである。○一切德藏三昧　心一つが凡ての根本である。心が清淨にして且安靜であれば、其の言行に現はるゝ所は皆大なる利益を周圍の人々に與へ得べきである。故に僧肇は「此の三昧の力能く諸の功德を生ずるなり」といつた。○是れ地獄　瞋恚の念によつて地獄が吾等の胸中に出現するのである。故に地獄の苦を委しく說いて、瞋恚の念を生ずることを嚴しく戒めらるゝのである。以下餓鬼畜生等に就ても皆同樣である。○諸難所　前に出た八難所のことである。又之を八無暇ともいふ。佛を拜し法を聞くべき緣の無い境界を八種擧げたのである。是れは人生に於ける最も大なる不幸であるが、斯る不幸なる境界をいつ迄も脫